
IS 史上最強の弟子イチカ

武芸者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 史上最強の弟子イチカ

【NZコード】

N6723V

【作者名】

武芸者

【あらすじ】

インフィニット・ストラatosと史上最強の弟子ケンイチのクロス。一夏が梁山泊と接点を持ち、かなり強化されます。

この作品はArcadiaにも投稿しています。

プロローグ（前書き）

最初に一言。作者はセカン党です。もつともいぢりでは鈴はサークル
幼馴染になりますが。セカンド幼馴染は美羽です。
それからセシリ亞も好きです。

プロローグ

「一夏あー。」

「ふおふお、安心するといい、千冬ちゃんや」

「ちふゅ、ねえ……」

弟の身を案じる少女に向け、老人が愛嬌のある表情を浮かべて安心させようとする。

その老人の手の中には千冬の弟、衰弱した様子の一夏が抱かれていた。

「いっくんに手を出した不届き者は、わしが皆懲らしめてやつたらのう。怪我もないぞ。ただ、いろんなことがありすぎて疲れただけのようじや」

なんでもない」とのよつに、陽気に言つ老人。彼の名は風林寺隼人。
ふうりんじ はやと
無敵超人の異名を持つ、史上最強の生物。

風貌はそれに相応しく、一メートルを優に超える筋骨隆々の巨体。ただでさえ目立つ容姿なのに、それに拍車をかける長い金髪の髪と髪。

その姿は圧巻で、隼人の微笑みが妙なギャップを生み出していた。だけど千冬は隼人に怯えることなく、一夏を受け取り、抱き締めながらお礼を言つ。

「ありがとうございます、本当にありがとうございます」

「なあに、困つた時はお互い様じやよ。それにしてもよかつたのか

の「う、こ、く、んが心配だったのはわかるが、今日は大事な試合だったのじやねん。」

「そんなのはいいでもいいんです。一夏が無事だった、それだけで十分ですか」

「ふむ、お主は良い姉じやの」

隼人は自身の顎鬚を撫でつつ、空いている手で千冬の頭をポンポンと叩いた。

「後はわしらに任せるとこ、黒幕にはきつたりと落とし前を付けるからのう」

優しい笑顔でわざわざされるその言葉。それは千冬にとっても頬もしく、やしてとても恐ろしかった。

+++

「風林寺さんには、本当に頭が上がりません」

「気にするでない。何度もいってると、困った時はお互い様じや」

「ですが、いつも」ちらが一方的に助けられてると思っています

「じやかり気」あるでない。いつの者もこくへんのことを歓迎しとるからのう」

千冬と一夏の姉弟には両親が存在しない。幼い一夏と、当時高校生である千冬を残して突然失踪したのだ。

2人には頼れる親類もおらず、どうしたら良いのかわからなかつた。そんな姉弟に向け、手を差し伸べてくれたのが隼人である。

「アパパパ～」

「アパチャイすげつ！」

「いぢか、スピード上げるよ。しつかりつかまつてるよ」

「うん！」

あらゆる武術を極めた者達が集う場所、梁山泊。

幼い一夏の姿はそこにあり、今は優しき巨人、アパチャイ・ホパチャイと遊んでいた。

隼人にも負けない巨体であり、褐色の肌と水色の髪をした青年。その風貌から恐れられることが多々あるが、彼の本質はとても優しく、子供や動物などには絶大な人気を誇っていた。

一夏を肩車して嬉しそうに走っている姿から想像できるように、彼は大の子供好きだ。そんな彼が裏の世界では『裏ムエタイ界の死神』などと呼ばれているのを誰が想像できるだらうか？

「それはそつとドイツはどうじやつた？ 世界は広いからのう、何か新しい発見があつたじやうつ？ 今の千冬ちゃんはそんな顔をしておるぞ」

「……流石ですね」

隼人に指摘され、千冬は感心した。こうも見事に自身の心境の変化

を突かれるとは思わなかつたからだ。

千冬は今までドイツにいた。あの事件から既に1年以上の時間が経ち、既にIS操縦者の現役を引退している。

IS インフィニット・ストラトス

女性にしか扱えない、世界最強の兵器。

当初は宇宙空間での活動を想定して作られていたのだが、千冬の親友である篠ノ之 束が兵器として完成させた。

彼女一人でISの基礎理論を考案、実証し、全てのISのコアを造つた天才科学者なのだが現在は失踪中であり、世界中が束の行方を追つているとのことだ。

束の親友だったために千冬はISの開発当初から関わつており、ISに関する知識や操縦技術は並みのパイロットよりも遥かに高い。しかも公式試合で負けたことがなく、大会で総合優勝を果たしたことからも誰もが認める世界最強のIS操縦者だつた。

そんな彼女の突然の引退。よくよく考えれば、隼人じやなくともなにかあつたと勘ぐるのは当然かもしれない。

「最初は……借りを返すつもりで教官の話を受けました。ですが人に教えると言うことに意義を感じるようになり、その道に進んでみるのも面白いかと思つただけです」

「そうか……お主の決めたことじや。わしは応援するぞ」

「ありがとうございます」

「いっくんのことは任せなさい。血はつながつていなくとも、彼は既に家族のような存在じや。わしらがしっかりと面倒を見るから、安心するといい」

「はい」

縁側に腰掛け、お茶を飲みながら談笑を交わす隼人と千冬。そんな2人に、背後から女性の声がかけられた。

「千冬……来て、たんだ」

「お久しぶりです、しぐれさん」

「ん……」

剣と兵器の申し子、香坂しぐれ。

ポニーテールのようになじみ髪を後ろで束ね、くノ一のよじつな格好をした美女。

年齢不詳だが、見た目からして歳は千冬とあまり変わらないだろう。彼女もまた、梁山泊で暮らしている者の一人だった。

「しぐれや、『あいえす』とやらの整備は終わったのかの?」

「今……秋雨が仕上げをしてい、る」

「やうかそうか、秋雨君に任せとけば安心じゃのう」

剣と兵器の申し子であるがゆえに、また、梁山泊で唯一の女性の達人であるがゆえに、彼女もまたEIS操縦者だった。

しかも公式では負けなしだとされている千冬だが、非公式、訓練などではしぐれに手も足もでなかつた。

千冬が誰もが認める世界最強のEIS操縦者なら、香坂しぐれは正真正銘、世界最強のEIS操縦者である。

「逆鬼、一気に発電してくれ」

「つたぐ、何で俺がこんなことを……」

HSにいくつものコードをつなぎ整備、調整をしている胴着の中年男性。

彼が哲学する柔術家こと岬越寺秋雨（じかえつじ　あきさる）。黒髪と口髭が特徴的で、隼人やアパチャイに比べるとスマートな身体つきだが、武術の達人なだけにとても鍛えられた肉体を持つ。

書、画、陶芸、彫刻のすべてを極めたと謳われる天才芸術家だが、その他にも医師免許などを所持しており、からくりや機械関連の知識にも精通している。まさに完璧超人。そんな秋雨だからこそ、世界最先端の技術の結晶であるHSの整備ができるというものだ。

そして、HSにつながったコードの先端、自転車のような発電機で電力を生み出している人物の名が逆鬼至緒（さかき　しお）。

ケンカ100段の異名を持つ空手家。口調は乱暴で、頬から鼻にかけて横断する一文字の傷があり、素肌の上に革のジャケットと言ついかにも恐ろしい風貌をしているが、心根はとても優しい青年だった。

「相変わらず、秋雨君の発明は見事じゃのう。その発電機のおかげで、うちの家計は大助かりじゃわい」

「収入が不定期な分、逆鬼の体力は有り余りますからね」

「つるせえよ！」

逆鬼達のやり取りを見て、千冬は思わず笑みをこぼす。

平和な日常。両親がいなくとも、自分達姉弟を支えてくれる家族の
ような者達。

これが幸せなのだと瞞み締めていると、あっさりとその考えは崩壊
してしまった。

「久しぶりね、千冬ちゃん。相変わらず良い体してるね」

「…………」

あらゆる中国拳法の達人、馬劍星^{ばけんせい}。

長身とはいえ女性である千冬よりも小さく、小柄な中年の中中国人男性。長い口髭と眉毛が特徴的で、帽子とカンフー服を愛用している。彼を一言で表すならエロ親父。美女を見ればセクハラ行為を働くため、千冬は馬のことを苦手としていた。

「ほ、れ……」

「ありがとうございます、しぐれさん」

「ちょ、ちょっと待つね！ いくらなんでも真剣は洒落にならないね！！」

それでも最近は慣れてきたのか、馬に対する遠慮がない。しぐれに渡された刀、真剣を受け取り、千冬はそれで馬に斬りかかる。

中国拳法の達人なだけあり、千冬の斬撃を紙一重でかわす馬だったが、その表情は引き攣っていた。

「アパパ、剣聖楽しそう！」

「これ、アパチャイ。ビーを見ればそつ取れるね！？」

「千冬姉、頑張れ！」

「こっちゃん！？」頑張られたらおこっちゃん死んじゃうねー。」

その様子をケラケラと眺める一夏達。そんな彼らを制する少女の声が、梁山泊内に響き渡る。

「みんな～ん、おやつの用意ができましたわ」

無敵超人風林寺隼人の孫娘、ぶうごんじんじゆの風林寺美羽。

一夏と歳の変わらない、長い金髪の美少女。幼いながらも梁山泊の家事を一手に引き受けける才女だ。

「あ、美羽ちゃん、私も手伝おつ」

「ありがとうございます。では、じゅうを運んでいただけますか？」

馬を追いかけるのを中断した千冬は、手伝いを申し出る。

いつまでもこんな日々が続けばいいのだと想つ、平和な毎日。だが物事に永遠なんてものは存在せず、日常とは些細な切欠で崩壊するものだった。

「これが、HS……」

「これこれ、勝手に触つたら……」

おやつを食べ終わった一夏が、秋雨の整備していたHSに興味を持つ。

興味本位で触ることを咎める秋雨だったが、もう既に遅い。一夏は既に I.S に触れてしまった。

これはしげれの専用機だったが、整備のために一時初期化していたのが原因だらう。そうでなくとも、まさかこのようになると誰が想像できただらうか？

「 I.S 、これは……」

どんな原理かはわからないが、 I.S とは女性しか起動することができない兵器。男性では到底扱うことができない。だが一夏は男性、男の子である。普通なら起動するはずがない。動くはずがなかつた。だと言つのに……

「 I.S が……起動した？」

I.S の起動。動かせないはずの男が、 I.S を動かした。これが日常の崩壊であり、世界を巻き込むことにならうとは、一体誰が想像しただらうか？

BATTLE 1 剣と兵器の申し手に弟子入り！？

「ボクの弟子にする……な」

「待つてくださいしぐれさん！ そんないきなり……」

一夏がエラを起動させ、梁山泊は騒々しい空氣に包まれていた。

「まあまあ、落ち着くね千冬ちゃん。しぐれどんもいきなりすぎるね」

一夏を弟子にするというしぐれと、それを反対する千冬。言い争いを始めそうな2人を馬が仲裁し、仕切り直せた。

「しかし驚いたのう。本来、その『あいえす』というのは女性にしか動かせないんじやろ？ なのに何故、いつくんが動かすことができたのかのう？」

「私にもわからかねます。ただひとつだけ言えることは、彼は世界中で唯一エラを動かせる男とこうじとドジョウ！」

隼人と秋雨は驚きと共に感心し、一夏を見定めていた。

IS、世界最強と呼ばれる女性専用の兵器。例え武術を極めた達人でも、男性なら動かすことは不可能な代物だ。

それどころにでもいるような普通の少年、一夏が起動させた。ならば彼に何かがあると思つるのは当然だらう。

「あはは、凄いよ一夏！」

「えへへ」

アパチャイは自分の「こと」のようの一夏を褒め称え、一夏は照れ臭そうに笑っている。

まるで他人事のようであり、とても客観的な反応だった。

「一夏ー、お前の「こと」なんだぞ、もう少し真面目に……」

「だから落ち着くな、千冬ちゃん。いきなりの「こと」で「ちやんもどうしたらいいのかわからないのね」

馬の言つてることはもつともだつた。自身が世界で唯一 IIS を動かせる男と言つたところで、別に何かが変わるわけではない。一夏は一夏であり、千冬の弟、梁山泊の仲間なのだから。だが、このことが世間に知られればこれまでの生活ができなくなるのも事実。何せ、世界で唯一 IIS を動かせる男なのだ。世界各国の研究機関、またはその関係者が放つておかないだらう。

「幸い、このことを知つてるのは我々梁山泊の身内の者だけだ。平穀な暮らしを望むとこのなら、一夏君の「ことは」は内密にすべきだと思います」

「ふむ、やうすべきじやうな。もつとも、それはいつくんがどうしたいかによるがの」

「へ?」

話を降られた一夏は、間の抜けたような顔で呆然とする。真剣な表情で問いかけてくる隼人の雰囲気に恐縮し、言いつのない緊張感を味わっていた。

「これまでどおり平穏な日々を望むか、それとも茨の道を歩むのか
？ それはお主の決断しだいじゃ」

「俺の、決断……」

場合によつては人生を左右するほどの決断。それを迫られた一夏は瞳を閉じ、真剣に思考を巡らせる。

世界で唯一 IIS を動かせるという事実。それを知つた時はいまいち現実味を感じず、アパチャイに褒められるがままに喜んでいた。自分は特別な存在なんだと思い、表現のしようがない高揚感に包まれた。

だが、冷静になつて考えてみると話は違つてくる。確かに一夏は特別な存在だ。それは否定のしようがない事実だらつ。けど、そのことが知れ渡れば彼は日常を失つてしまつ。

これまでどおりに梁山泊の者達と一緒に過ごすことができなくなり、研究付けの毎日を送ることになるかもしれない。流石に非人道的なことはされないだろうが、モルモット（実験動物）一步手前の生活を送ることになるかもしれない。

そう考へると、喜んでばかりもいられなくなつた。

「俺は……」のままがいいです。梁山泊から離れたくないです」

だから、正直な気持ちを吐露する。男で IIS を動かせるといつのはとても名誉なことだが、だからと言つてこの暮らしを失いたくはなかつた。

「どうか、それがいつくんの決断じゃな」

隼人が微笑む。身内に向けられる、とても優しそうな笑みだつた。

千冬も一安心したようすで、安堵の息を吐く。

「残……念。弟子、欲しかつた……な」

しぐれは残念そうに俯き、畳の上の元の字を書いていた。

「あ、いや、それはエリにっこいの話であつて、別にしぐれさんに弟子入りするのが嫌だとかそういうわけじゃないですから」

「本当……？」

「はい。むしろしぐれさんほどの達人に剣を教えてもらえるなら教えて欲しいくらいです」

落ち込むしぐれに向け、一夏は彼女を気遣つてのフォローを入れる。それが、地獄の始まりだといふことをまったく理解していなかつた。

「じゃあ、教え……る」

「へ？」

「そうだな。私はエリに関わるのは反対だが、しぐれさんに剣を教わるのは悪い」とじゃないと思つた。お前も昔は剣道をしてたからな」

「ほひ、ならじつくんはしぐれの弟子じゃな。剣の道は険しいぞ」

「しぐれズルいよ。アパチャイも弟子欲しい！」

一夏を他所に進んでいく話。

しぐれのフォローのために言つた言葉が、なぜか彼女に弟子入りする意として取られていた。

「えへと、今のは冗談で……」

「弟子……ふ、ふふ……一夏、これからは私のことを、師匠と呼べ」

（しぐれさんが笑つてる…？）

普段はどんなことがあっても顔色ひとつ変えず、感情を表に出さないしぐれが確かに笑つていた。

香坂しぐれ、年齢不詳のスタイル抜群の美女。そんな彼女が笑う姿はとても美しく、そしてとても恐ろしかった。

十十十

「ふ、ふふふ、ふははははっ！ いつそ殺せエエエーーー！」

「わっ！？ 一体どうしたのよ、一夏」

「鈴～」

一夏は錯乱し、狂つたような悲鳴を上げた。

そんないきなり取り乱し始めた一夏に向け、一夏曰く『サーード』幼馴染で中国人の凰鈴音、通称鈴が心配そうに声をかけてきた。これまた一夏曰く、ファースト幼馴染の篠ノ之筈が家庭の事情で転校し、その後に仲良くなつたのが鈴なのだ。ちなみにセカンド幼馴

染は美羽だ。

一夏の悪友である五反田弾（いだんだ だん）とも仲が良く、美羽も合わせて4人で一緒に遊んだりもしている。

「しぐれさんが無茶苦茶なんだよ……お前はあるか？ 日本刀持つ女性に1時間以上追い掛け回されたことなんて…… 刀物怖い刃物怖い刃物怖い」

「な、なんか大変なのね……」

流されるがままにしぐれの弟子となつた一夏は、毎日のよつにトラウマを植えつけられる日々を送つていた。

そして、時折羨ましそうな視線を送つてくるアパチャイ。彼は一夏にムエタイを教えたいたらしいが、それは謹んでご遠慮したい。裏ムエタイ界の死神と呼ばれる彼の修行風景を見れば、その理由も理解できるだろう。

「何度も死ぬ思いをしたか……今、じつして鈴と並んで帰宅しているのが俺の唯一の癒しだ」

「い、いい一夏！？ えつと、あの……私も一夏と一緒に帰るのに悪い気はしないわ」

「そうか……ああ、腹減った。帰りに鈴の家によつていいか？ 鈴の親父さんの酢豚と杏仁豆腐が食べたくなった」

「別にいいけど……一夏つてうちの酢豚好きよね」

「おひ、アレは絶品だよな。もつ毎日食べたいからこそ」

「そつか、そうなんだ……」

道中、いい雰囲気になる一夏と鈴。

鈴は頷きながら何かを考え、ある決意をした。

「じゃあね、一夏。私が料理がつまくなつたら…………」

「ん？」

「酢豚を毎日…………」

「フフフ～～～一夏殿、奇遇ですね」

「あ、響」

「…………」

だが、鈴が言い切るより前に邪魔が入った。

歌いながらやつてくる邪魔者、それは羽帽子と奇妙な服をした不気味な少年、九弦院響。

彼は暇があれば歌つて踊り、作曲などをしていた。その作曲に関しては類稀なる才能を持つており、将来的には音楽学校への進学が決まっているとか。

天才気質の少年だが、そんな彼を一言で表すなら変人である。

「本日はお口柄も良く、良い天氣ですね。まるで私達の出会いを天がしゅくぶ…………」

「なんでいいといひで出てくんのよおーーー」

「ぐふあーー？」

そんな響を、鈴は情け容赦なく殴り飛ばした。

「スフォルツァンド（特に強く）……良い一撃でした。今ので素敵
なメロディーが舞い降りてきましたよ。ララララー！」

「だからあなたは、殴られたのになんでそんなにペンペンしている
よ！？ この国じや邪魔をする奴は馬に蹴られて死ねって言ひなごい、
あんたは馬にけられても平氣をつけね」

「ハラララー」

殴り飛ばされた響はやばい倒れ方をしたもの、すぐさま起き上がり
つて作曲を始めていた。

羽帽子の羽の部分がペンとなり、懐から五線譜紙を取り出して曲を
書き込んでいく。

彼から声をかけてきたといふのにそれに熱中し、一夏と鈴の存在は
忘れ去られていた。

「これは家で早速奏でてみたいですねー！ では、一夏殿、鈴音氏。
私はこれで失礼します。ラララー！」

「…………なにしに来たんだ？」

「…………ちが聞きたいわよー」

自由翻弄な響に呆気に取られ、一夏と鈴は同時にため息をついた。

あれから暫くの時が経つた。

響経由で知り合つた新たな友人、千秋祐馬ちあき ゆうまと知り合つたり、鈴や弾と共に遊んだり、しぐれの修行によつてまた新たなトラウマを刻まれたり……

楽しかつたことや思い出したくない出来事などなど、いろいろなことがあつた。本当にいろいろなことがあつた……

「俺の癒しが、心のオアシスが、酢豚が……」

「もへ、一夏。そんなにマジ泣きしないでよ……」

「だつて、だつて……」

その日常が崩壊する。梁山泊の修行でボロボロとなつた一夏の心のよりどり、鈴が所謂家庭の事情と言つ奴で祖国に、中国に帰るといつのだ。

それに一夏は本氣で涙を流し、空港で鈴との別れを惜しんでいた。

「ホントにやめてつたら……帰れなくなるじゃない」

「帰らないでくれよ、鈴

「やつにやわけにもいかないわよ……」

「俺と一緒に暮らす。絶対に幸せにしてみせるから

「え、ええつ！？ ちよ、一夏！ それってプロポ……」

「馬さんがそう言えば一発だつて言つたけど、これってどうこう意味なんだ？」

「死ね！」

「ぐはっ……」

鈴の手加減なしのビンタが一夏に叩き込まれる。バチーンと乾いた良い音が響き、一夏の頬には鮮やかな紅葉の跡がついていた。

「な、なんで怒るんだよ？」

「うつさい馬鹿！ 死ね、本当に死ね！…」

怒鳴り、口論を始めてしまう一夏と鈴。

周囲からは呆れたような視線や、どこか微笑ましそうな視線が投げかけられるが、2人にはそんなものを気にする余裕はなかった。

「まあ、いいわ。一夏の病気は今に始まつたことじやないし……」

「俺はいたつて健康だぞ」

「いいから黙れ」

これまでのやり取りで疲労し、鈴はがっくりと肩を落とす。だが、その表情はにやけており、例え一夏が言葉の意味を理解していないともとても嬉しそうだった。

「ねえ、一夏」

「ん？」

だから、ちょっとだけ積極的になつた。

一夏の背は標準だが、男なだけあつて鈴よりも高い。鈴は背伸びし、一夏に顔を近づける。

「え……？」

呆気に取られた一夏は、状況を理解するのに少しばかりの時間を要した。

頬に触れる感触。柔らかくて温かいもの、鈴の脣。

「えへへ……」

「鈴……」

鈴は真っ赤な顔で照れ臭そうに笑い、一夏に言つた。

「じゃあね、一夏。一時のさよならだけじ、こつかひとつ……」

「ああ……」

言い終わり、鈴は一夏に背を向ける。そのまま飛行機の登場口に向かって歩いていった。

鈴の笑顔を正面から見た一夏は未だに呆然としながら思つ。鈴のこと、今まで一緒に遊んでいた良く知つてゐるはずの鈴が、意外な一面を見せたような気がした。

(鈴つて……笑うとあんなに可愛かつたんだ)

胸が高鳴る。それと同時に締め付けられるような痛みが走った。感じるのは喪失感。いて当然だった存在が、自分の前からいなくななる悲しみ。

一夏はなんとなく、鈴に口付けされた頬の部分に触れて気づいた。

「あれ……？」

濡れていた。瞳から一筋の涙が垂れ、一夏の顔を濡らしていた。一夏は泣いていたのだ。

「やはり、お友達がいなくなるのは寂しいですね。はい、一夏さん」

そんな一夏に、隣に立っていた少女がハンカチを手渡す。

「ああ、ありが……つて、えええええつ！？」

「うわっ、びっくりした！」

それを受け取った一夏だが、気配なく隣に立っていた少女に今更ながらに気づき、悲鳴染みた声を上げてしまう。

その大声に、少女も吃驚したように声を上げた。

「いや、それはこっちの台詞……なにしてんだ美羽！？ つてか、見てた？」

「はい、ばつちつと」

「…………」

少女、美羽は素敵な笑顔で一夏の言葉に同意する。一夏は顔は火が吹き出そつたほどに熱くなつた。

「いいですね、幼馴染といつものば」

「いや、それを言つなら美羽と俺も幼馴染なんだけど……」

「あら、やつでしたわね。ならこの場合、なんと言つのでしょつ？」

「知らない。で、なんで美羽がここにいるんだ？」

「お友達の見送りをするのは当然ですわ。もつ挨拶はしましたし、場の空気を読んで今まで隠れていたんですの」

「そつだつたのか……」

「もつとも、それ以外にもここにいる理由はありますか」

「え？」

美羽の言葉に、一夏が首をかしげた。

「こつくんや、どつやらお別れは済んだよつじやのつ」

「長老……え、どつじでこつじへ。」

そんな一夏に、梁山泊の長である隼人が声をかけた。いや、彼だけではない。

「けつ、見せ付けやがつて」

「グッジョブね、いつちゃん。でも、たつきの台詞は頂けないね」

「若いのはいいねえ」

「う……ん」

「アパパ」

「逆鬼さん、馬さん、岬越寺さん、じぐれさん、アパチャイまで！」

？」

梁山泊の者達勢揃い。未だに状況を理解できていない一夏は、パクパクと口を動かして固まっていた。

「はい、これ。一夏さんの荷物ですわ」

「え、ええ……なにこれ？ 今から旅行にでも行くよつなのの大荷物は

「よつなではなく、本当に行くんです。飛行機に乗つて空の旅ですわ

「えええつー？」

状況がまったく理解できない。既に定められた決定事項に、一夏は驚きの声を上げる。

「ちよ、説明を…マジで理由を説明して」

「ふおつふおつふお、わあ、ゆくわざの衆」

梁山泊、日本を発つ。

+++

「セシリア・オルコット……ガキを始末するのに、なんでわざわざ俺達武器組がイギリスまで出向かなくちゃいけないんだ」

「そういうな。何でもその小娘は良いとこのお嬢ちゃんでな、事故で亡くなつた両親の遺産をたんまりと持つてゐるのよ。それが周りの親族達には面白くないらしくてな、我々『闇』に厄介」とが回ってきたということだ」

「ふん、気にくわねえ。反吐が出そつな仕事内容だな」

「依頼だから仕方がない。それにこの小娘、代表候補の腕前を持つIIS操縦者らしいから結構楽しめるかもな」

「IIS……か。世界最強の兵器ねえ。確かに使つものが使えれば強力だが、ガキには過ぎた玩具だ。それにわざわざ、相手の土俵で戦う必要もない」

「まあ……始末さえしてくれるなら、方法は任せせるさ」

「ああ」

事態が動き出す。ある少女に、強力な魔の手が迫っていた。

BATTLE 2 イギリスへ！！

「ヂュードュー！」

「不憫だな、
鬪忠丸……」

飛行機に乗るために行李手荷物検査にて

一夏はケーシーに入れられてしまつたしくれの友達、ネスミの闘忠丸に哀れみの視線を向ける。

いくら闘忠丸がしぐれの友達とはいへ、飛行機内に動物の持ち込みは許可されていない。

「それはそうとじぐれさん……あなた、そんなものを持ち込んで飛行機に乗るつもりだったんですか？」

...」

た。 当のしぐれ本人は、手荷物検査にてあらゆる持ち物を没収されてい

刀、鎌、苦無、手裏剣、釵、トンファー、毒等等。驚愕を通り越してむしろ感心するほどの危険物を持ち込み、一夏はおろか手荷物検査を行う係員を呆れさせていた。

「特別許可が出た。通せ」

「ええっ！？」

その代わり、慌てて駆けつけてきた空港のお偉いさんらしき人物が述べた一言が係員達を驚愕させる。

没収すべき危険物は全てしぐれに返却され、闘忠丸もゲージから出される。

「ふつ」

しぐれは涙目で闘忠丸を頭に乗せ、何事も無かつたようにゲートをくぐつていった。

「特別許可つて……何したなんですかしぐれさん？」

「別に……僕は何もやつてな……い」

特別許可という単語に一夏は疑問を抱いたが、しぐれはそれだけしか答えてくれなかつた。

だけどなんとなく理解はできる。そんな特別な許可を出せるような存在となると、普段なら手も届かないような上層部の人間にしかありえない。

一夏は知つていた。梁山泊には時折、各國のお偉いさんが訪れることがある。そしておそらく、何か面倒なことが関係しているというふことを。

「……もしかして、これからかなり危険なところに行きます？」

「ふつ」

「誤魔化さないでください！？」

一夏の問いかけにしぐれは視線を逸らして笑みをこぼす。だが、その程度では一夏は誤魔化されなかつた。

何せ命が懸かっているのだ。しぐれの襟首をつかみ、涙目で揺さぶ

る。

「まあまあ、落ち着きたまえ一夏君」

「岬越寺さん……」

秋雨が一夏を落ち着かせようと、その肩にポンと手を置いた。

「人間……生まれたら必ず死ぬんだ！！ なに、それが遅いか早い
かの違いだよ」

「つー」

が、それは逆効果だった。一夏は秋雨の手を振り払い、脱兎の「」と
く駆け出す。

今しがた入ってきたゲートを田指し、全力で走った。

「ふつ」

もう一度しぐれが笑つた。返つてきた鎖鎌を早速取り出し、それを
一夏に向けて投げる。

分銅が鎖を伴つてぐるぐると巻きつき、一夏は一瞬で拘束される。
後は成す術もなく、一夏はあっさりと引き戻された。

「俺はまだ死にたくないー！ た、助け……助けて千冬姉エエーー！」

「いひ、静かにしないか。周りに変な田で見られるだり」

泣き叫び、見つとも無くも「」にはいな姉に助けを求める一夏。
それを咎める秋雨だったが、そんなことを気にする余裕はなかつた。

「今更そんなこと気にしているんですか！？ そもそもこの組み合せじゃ好奇の視線に晒されるのは当然でしょ！」

隼人、アパチャヤイ、逆鬼。この3人の巨漢だけでもかなり目立つ。それに加えて武器を所持したしぐれ、胴着姿の秋雨、カンフー服に帽子の馬は十分に目立ち、一夏の現状は更に拍車をかけていた。

「しぐれどんに秋雨どんも意地が悪いね。いつちゃん、なにもそんなに怯える必要はないね」

「馬さん……これって、本当にどうこいつ状況なんですか？」

そろそろ收拾のつかなくなつた状況を落ち着けるため、馬がフォローワーに回る。

しぐれの鎖鎌から解放された一夏は疑問の全てを馬に向けた。

「ちょっとした人助けね。いつちゃんも知つてのとおり、梁山泊にはたびたびお偉いさんやその関係者が訪れてくるね。そんな人達が持つてくるのは表沙汰にできない秘密裏の依頼がほとんど。もつともそれは梁山泊の貴重な収入源になるね」

「えつと、つまり……今回の旅行はその依頼のついでといつことですか？」

「やつこいつ」とね。あちらさんがおいちやん達全員の旅費を出してくれるといつから、どうせなら豪勢に観光をしようと思つてね。そりじゃなけりや、うちが海外旅行には行けないね」

「危険……じゃないですよね？」

「大丈夫ね……………多分」

「帰る！俺、お家に帰るウウーー！」

「男は度胸ね。いつちゃん、覚悟を決めるね」

「いやだー！千冬姉え！鈴ーー！」

收拾を図ろうとした馬も失敗。一夏は取り乱し、再び叫びだす。いい加減喧しくなつてきたので、しぐれは筒のようなものを取り出して一夏に向ける。口にくわえ、軽く息を吹きかける。

「ふつ」

「がつ…………」

「流石しぐれどん、見事な腕前ね」

それは吹き矢。先端には眠り薬が塗つてあり、一夏の意識が沈んでゆく。

意識を失つて立つことすらできない一夏の体を馬が支え、視線を後方へと向けた。

「やつぱり飛行機はいやよ！簡便よおおーー！」

「今更暴れやがって！そもそもハンバーグ三週間で手を打つたはずだろうがーー！」

「船がいよー！」

「馬鹿、行くのはイギリスだぞ！ 何日かかると思つてんだ！？」

そこでは飛行機に乗るのを前にして暴れるアパチャイと、それを取り押さえようとする逆鬼の姿があった。

実はアパチャイは飛行機恐怖症である。一時は美羽が毎晩夕食にアパチャイの好物であるハンバーグを出すといふことで落ち着きはしたもの、乗る直前になつて再び駄々をこね始めた。

「しぐれどん、あつちも頼むね」

「うん……」

馬に促され、今度は吹き矢をアパチャイに向ける。そして一吹き。

「うう……」

「命……中」

本来なら野性的な勘と並外れた反射神経で余裕で回避することができたアパチャイだったが、逆鬼に取り押さえられているためにそうはいかなかつた。

背中に吹き矢の矢が突き刺さり、動きを一瞬止める。が、それだけだつた。

「いやよ、いやよー 飛行機はいやよー！」

「象も眠らせる薬……なのに」

呆れるほどのタフネスさで眠り薬が効かない。しぐれの眠り薬は一

滴でインド象すら眠らせると云つのに、アパチャイの耐性はそれ以上だつた。

「仕方がないのう。逆鬼君、秋雨君」

「はい、長老。ここは力技で……」

見るに見かねた隼人が袖をまくり、それに秋雨も続く。逆鬼、隼人、秋雨。屈強な男3人でアパチャイをふんじばる。流石のアパチャイも3人だとどうしようもなく、悲痛な叫びを上げながら飛行機内に連行されていった。

「飛行機はいや、飛行機はいやよ！」

「いい加減大人しくしろ！」

「そうだよアパチャイ君。飛行機が落ちる確率は宝くじで一等が当たるより低いから安心したまえ」

「そうじやよ。お前さんが機内で暴れたりしない限り大丈夫じゃから安心するといい」

「それ、洒落になつてねえな……」

騒々しく、騒がしく、梁山泊の面子はそんな感じで飛行機に乗り込んでいった。

そんなこんなでイギリス。

「つまつー…ピザつまつー…！」

「こつちやん、ピザじゃなくてピッシャね

「アパパ、ピッシャおこし！」

「！」めんなさい、世界一料理のまつこ国なんて思つて「！」めんなさい

「おこし！」

「本当にですか。ほつぺたが落ちてしまいそうです」

なんだかんだで一夏とアパチャイはイギリス旅行を満喫していた。馬やしぐれと、美羽と共にピザを頬張り、空きつ腹を埋めていく。飛行機内では機内食以外食べられなかつたからだ。

アパチャイは飛行機を降りたらいつもの元気と食欲を取り戻し、一夏はイギリスに着いてしまつたのでもはや開き直るしかなかつた。食費を含めた滞在費は依頼主持ちらしいので、とにかく食べた。自棄食いのよつに、いや、それは正真正銘の自棄食いだつた。

「あ……そだ、一夏。一応これを持つてお……け

「へつ……？」

現実から逃避しようとする一夏だつたが、それをしぐれは許してくれない。

思に出したよひあるものを取り出し、それを一夏の前に差し出した。

「ちょひ、これって刀ですか！？ な、なんでこんな物騒なものを……」

「護身用だ。もしかしたらちょひと危険な目に遭うかもしれない……から」

「あははは……アパチャイ、次はシーフードピザを」

「アパ、限界まで食べ続けるよ。最後の晚餐よー。」

「アパチャイ……それ、洒落になつてねえ」

しぐれの物騒な言葉を聞き流し、さらに現実から目を背けようとする一夏だったが、アパチャイのあまりにも的を射た発言に現実へと戻されてしまった。

晚餐ではないが、これが一夏の最後の食事となりかねない可能性があつた。

「ふつ、ただの刀じゃない……ぞ。知り合いの刀工がお前のために打つてくれた刀……だ。通常の刀とは刃と峰が逆になつていい……る」

「く……？」

しぐれに言われて、一夏は受け取つた刀を少しだけ鞘から抜いてみる。

すると、しぐれの言葉通りこの刀は刃と峰が逆になつた奇妙な刀だった。と言つたか、これは……

「逆刃刀か！？」

正真正銘の逆刃刀。古流剣術飛天御剣流の使い手であり、人斬り抜刀斎と呼ばれた人物が不殺いふさやの剣士になった時に用いた刀。一夏の愛読書であり、しぐれもたまに読んでいる漫画に出てきたものだ。その現物を前にし、一夏の頬が引き攣る。

「なんですかこれ！？　俺に不殺の剣士になれって言うんですか？」

「まあ、そんなところ……だ。知つてるとは思うが、梁山泊の真髓は活人拳。人を殺すことによしとはしない。それで刀剣を武器とする場合は峰打ちとなるわけだが、峰打ちと言うのは斬る時に峰と刃を逆にする高度な技……だ。実戦でそれを成すのはかなり難しい」

「確かにこの刀だと常に峰打ちになりますが……それなら木刀や竹光でもよくないですか？」

「その場合は、打ち合つた時に相手の刀剣で得物ごとと両断される……ぞ」

「もう帰りたい！　着いて早々ホームシックです！　千冬姉え、リイイン！！」

相手が刀剣武器とした場合、木刀や竹光では強度に不安がある。それは理解できるが、そんな状況になるかもしれないという思いが一夏の平常心を蝕んでいた。

「不満……か？」

「いや、不満とか言う以前の問題です……」

「やうか……なら、一応もうひとつ用意した武器がある」

がつくりと肩を落とす一夏に向け、しぐれが新たな武器を取り出す。それは大きな、あまりにも大きな鍵だった。どんな巨大な門を開けるのだろうと思つようなほどに巨大な鍵。だけどそれは剣、武器だった。

「き~ぶれ~……」

「逆刃刀がいいです！」「これがいいです！！」それはやばい、なんがまずい気がする！」

しぐれがその剣の名称を言い切る前に一夏が抑止する。逆刃刀を握り締め、それが気に入つたような反応を見せて誤魔化した。何故なら全てしぐれに言わせたら非常にまずい気がしたからだ。主に版権的な問題で。

「そう……か。せっかく、この武器専用の衣装も用意したんだ……が」

「うわあ……どつかで見たことあるよつな、真っ黒なコードですね」

「ピストルも……通さない」

性能は確かそうだったが、一夏は丁重に断りを入れた。そして、再び現実から目を逸らす。

「アパチャイ、次はドミニペザにしよう……」

「アパパ」

この一時だけでも、現状を忘れない一夏だった。

「ふむふむ、今回の依頼内容は彼女の護衛じゃな？」

「そういうことだ。なんでも名家のお嬢様で、遺産絡みのことで命を狙われているらしい」

「人の欲は深いものだね」

観光する一夏達とは打って変わり、依頼主によつて用意されたホテル内で隼人、逆鬼、秋雨による3人で今回の依頼についての話し合いが行われていた。

「おそらく、今回の件には『闇』の武器組が出てくるだろ」と言つ事だ。達人級マスタークラスも何人かいるかもしけねえ」

「ふむ、なら一応用心のために私も控えよう。逆鬼が交戦中でも、私が彼女を守るよ」

「わりいな……しかし、よかつたのかよ？」

「ん、なにがだね？」

念入りに計画を練つてゐる中、逆鬼がふと秋雨に尋ねる。

「一夏を連れてきたことだ。それに美羽もだ。そりや、滞在費全額依頼主持だから旅行にちょうどいいとは思つたが、ちつと危なすぎはしねーか？ 僕達の関係者とこうことで狙われるかもしけねーぜ」

「ほつほつ。逆鬼君は優しこのつ」

「まつたくですね」

「そんなんじやねーよー！」

純粹に一夏の心配をする逆鬼だったが、隼人と秋雨に冷やかされて声を荒らげる。

顔が赤く、とても恥ずかしそうだった。それが更に隼人達の笑いを誘つ。

「まあ、なんじや。いつくんや美羽の方にはしぐれとアパチャイ、それに馬もついてあるから大丈夫じやよ」

「そうそう、例え軍隊が来ようと一夏君達に危害が及ぶ心配はない

や」

「そりや、わかってるけどよ……」

一夏達には梁山泊の豪傑が3人もついているのだ。例えどんな相手が来ようと撃退できる。はぐれたり、迷子になつたりしなければ大丈夫だろつ。そつ結論付ける。

「まあ、何かあつた時はあつた時で、いつもの策でいけばよこじや
らひ」「ひ

「そうですね、それがいいです」

「……だな」

隼人の言葉に逆鬼と秋雨が頷く。彼らの言う、いつもどおりの策と
は……

「つむ！ なりゆき任せ大作戦じゃ！！」

「なるよひになるところだ」とですね

「なんかあつたら、その時ににかすればいいからな」

とても策とは呼べない、客観的過あがめ結論だった。

結論も出たので、話は仕事のものへと戻る。現在はホテルの部屋に
滞在している3人だが、これにはちゃんと意味があった。

「で、確かにこの部屋に嬢ちゃんとボディガードが来るんだろ？ そ
ろそろ時間じゃないのか」

「確かに……これは少し気がかりだね」

梁山泊が護衛する少女は命を狙われているため、常に身を潜める場
所を変えているらしい。

そのためにそう簡単には接触できず、1のよひに待ち合せをして
いるのだが……時間になつても相手が姿を現さない。

「どうやう……」

秋雨がポツリとつぶやく。違和感を感じる。それと同時に荒々しいものを五感が感じ取っていた。

隠す気など微塵もない殺意。秋雨だけではなく逆鬼や隼人も既に感じ取つており、椅子に腰掛けながらドアへと視線を向けた。

「情報が漏れていたらしい」

瞬間、ドアが突き破られる。ボロボロとなり、意味を成さなくなつたドア板は無理やりはがされ、一人の男が室内に入つてきた。その手にはトンファーが握られており、おそらくはそれでドアを破壊したのだろう。

「お前らが護衛の助つ人か？　はつ、無駄なことを。どうせ俺に殺されるつて言つのによ」

男は傲慢な口調で秋雨達を見下していた。それがどんなに無謀なことかすらも知らずに。

「おやおや、マナーがなつていなーいね。ドアを破壊するなんてノックが過激過ぎやしないかい？」

「はつ、悠長なことを。んなもん気にする余裕なんてテメエらにあらのか？　ジジイに優男、それに入相の悪い男一人。全員この俺があの世に送つてやるよ」

「ふあつふあつ、なかなかに血氣盛んな若者じやわい」

「ああ、しかも達人級ときたもんだ。ちつとは楽しめそうだな」

隼人が笑う。逆鬼も笑う。達人級、確かに強力な相手だ。だが、それは一般人やせいぜい弟子や妙手級ならの話。

目の前の男など、梁山泊の豪傑達には眼中になかった。

「……舐めてんのか

「滅相もない」

「ただ、青いなと思つただけじゃ」

「へへへ」

「やつぱり舐めているだろ？！　殺す！？」

隼人達の言葉が男の瘤に障る。青筋を浮かべた男は激情のままに突つ込んだ。

彼に与えられた任務は護衛の殺害。つまりは隼人達を殺すことであり、言葉を交わすよりも行動で示した方が早いと思つたからだ。それにこれ以上の会話は億劫で、考へることすら面倒になつたためにただ闇雲に突つ込んだ。それがどんなに愚かなことだろう？

「おせHー！」

「がふつー？」

それを理解するのは逆鬼の拳が顔面に直撃し、意識を手放し、次に男が目覚める時のことだった。

「……はぐれた」

織斑一夏は現在、迷子だった。トイレを探して席を立つた時にしぐれ達とはぐれてしまい、一夏は内心でダラダラと汗を搔く。

「やっぱくないか、これマジで。こんな時に俺一人つて……、つわつ、どつしそう」

いまいち状況は理解できていないが、この場所はどうにも危険らしい。

少なくともしぐれが一夏に護身用の武器を渡すほどにだ。いくら逆刃刀とはいえ流石にそのまで持ち歩くわけにはいかず、今は刀袋に入れて持ち歩いている。

「とにかくホテルに戻らないと……道が、いや、わかっていてわかりにくいな」

とりあえずは宿泊先のホテルに戻らうと考へる一夏。そこには隼人達がいるはずだ。

だが、そのホテルまでの道順がわからない。先ほども言つたが一夏は迷子である。

「誰かに道を聞けば……つて、俺、あんまり英語得意じゃないんだけど。そもそもこの国の言語のイギリス英語つてなんだよ？ 普通の英語じゃダメなのかよ。ああもうつ、こんな時に逆鬼さんか岬越寺さんがいれば……」

考え事をしながら一夏は歩いていく。彼は意識していないが、次第に人通りの少ない裏路地に向けてだ。それがまさか、人生のターニングポイントになるなど一夏は思いもしなかつた。

「とりあえず、話しかけてみないことには始まらないよな……うん。誰に声をかけよう? あ、あの子とかいいかな?」

裏路地で見つけた、1人の少女。他に人影もなく、歳も近そうだったからなんの警戒心も抱かずに一夏は声をかけた。

少女は鮮やかな金髪の長い髪を持ち、それを青のヘアバンドで止めている。それと同色の透き通るようなブルーの瞳。十人中十人が美少女と答える容姿の彼女に向け、一夏はなけなしの知識からひねり出した英語で話しかけた。

「え、エクスキューズミー……」

「だ、誰です!?」

話しかけられた少女は驚きの声を上げる。その反応に疑問を浮かべる一夏だったが、返ってきた流暢な日本語にほつと一息をつく。

「なんだ、日本語しゃべれるんですか。それは助かります。えっと、俺は織斑一夏と言つんですが、道を……」

「どなたか存じませんが、今はそれどころではないんです。早々にここから退散しなさい!」

「いや、そうしたいのは山々なんですが道が……」

道を尋ねようとする一夏だが、少女は慌てた様子で遮る。

一夏としてもこんなところにいたくなかったが、帰る道がわからなかったために「どうしようもない」。

少女を宥め、もう一度訪ねようとする一夏だが、

『ターゲットみつけ！ これで僕が始末したら先生に褒められるぞ』

聞きなれない言語で、軽い感じの声がかけられてきた。

『あ、あなたは……』

「ん？」

その声の主に、少女も一夏が聞きなれない言語で話をする。おそらくはこれがこの国の言語なのだろう。一夏にはまったく理解できない。

2人は一夏を他所に、なんらかの会話をする。

『ちよろちよろ逃げ回つてわあ、めんどりだからとと死んでくれない？』

『誰が死にますか。あなた方の思い通りになるとは思わない』
すわ！』

声の主は男だ。一夏や少女とあまり都市の変わらない少年・その手にはトンファーが握られており、黒のコートを着ている。一瞬、先ほどしぐれが持っていたどこの機関員のような印象を受けたが、色は同じでもデザインが違っていた。

『虚勢張つちやつて、可愛いねえ。でもさ、どうするの？ いかに君が代表候補生とはいえ、ISがないんじゃどこにでもいる普通の女の子だ。そんな君が僕に勝てると思つていいの？』

『…………』

『確かにISができてから世界は変わった。今の時代、女尊男卑が当たり前なんだろうね。でも僕は思うんだよ、凄いのは女性ではなくISと言う兵器だ。けど、たかが500にも満たない兵器で女性全員が偉そうにするのは気に入らない。だから教えてあげるよ。兵器は、武器はISだけじゃないってことをね。攻守に優れたトンファーこそが最強なんだ！』

宣言と共に少年が少女に襲い掛かる。トンファーを振り回し、田にも止まぬ速さで突っ込んだ。

獣のように荒々しく、雄々しい動き。振り回されるトンファーの一撃は強烈で、直撃すれば人間の頭部を粉碎するには十分だろう。もつともそれは、攻撃が当たればの話だが。

「つおわつ……」

『つ……？』

一夏が間に入り、トンファーの一撃を刀袋に入つたままの逆刃刀で受け止める。

あまりの威力に一夏自身が吹き飛びそうになつたが、踏ん張ることによつて耐え抜く。

トンファーという重量のある武器を逆刃刀で真正面から受け止めたことから強度による不安があつたが、逆刃刀も一夏同様に無傷だつた。

「なんだかんだでしぐれさんが用意してくれた武器。流石だな……
鞘も鉄！」しゃらしゃら

『くつ、なんなんだよお前！？　何で僕の邪魔をする……。』

「英語？　まあ、どのみち外国語は中国語以外わかんないからどうでもいいけどさ、今、お前がなんて言ったのかは予想できるわ。何で邪魔をしたのか、か？」

声を荒らげる少年に対し、一夏はあくまで冷静だった。
少女を少年から庇う位置に立ち、刀袋から逆刃刀を取り出しながら述べた。

「女の子を襲う暴漢を見かけたんだ。そりや助けるのが男として、いや、人として当然だろ？　何がなんだか状況がさっぱり理解できないけど、邪魔をさせてもらひや」

「ちよつと待ちなさい！　あなたには何も関係ないでしょう。早くここから離れなさい！……」

だが、一夏のとおうとした行動。それを拒否したのはよつよつて命を狙われた少女だった。

「せっかく助けてやつたのに、その言い方つてないだろ？』

「誰も頼んでもせんわ！」

『なに言つてるのかわからぬけどさ、いいよ。邪魔をするつて言うなら君も一緒に殺す！』

けど、そんなこと少年にはビビリもよかつた。邪魔者はまとめて処分する。そんな短絡的な思考で、今度は一夏に襲い掛かる。

「速いな。けど、その分直線的でわかりやすい」

獣のように荒々しく、雄々しい動き。だけどそれ故に素直で、動きを予測することは簡単だった。

一夏はステップを踏むように少年の動きを避ける。その場で更なるステップ。ダンスのように回転し、遠心力を載せた逆刃刀の一撃を少年の背中に放つ。

『がはつ……』

その一撃で勝負は決まる。少年は前のめりに地面に倒れ、ぴくぴくと痙攣していた。

逆刃刀だから切れず、死ぬことはないだらうと思つが油断はできない。こんな得物でも骨を碎くことは十分に可能であり、当たり所が悪ければ最悪死ぬ。

打った場所が頭部ではなく背中だつたことからその心配はないだろうが、少年はしばらく起き上がるとはないだらう。それほどまでに強烈で良い一撃が入ってしまった。

「あなた……まずいですわよ」

「まずいって何が?」

少年が一夏によつて撃退された。だと言つのに少女はあまりこも思わしくない顔色をしている。

それを不審に思う一夏に対し、小序は悲痛な声を上げた。

「彼らに田を付けられてしまいますわ！　ああ、なんじことじょうう。無関係の人を巻き込んでしまいましたわ」

「ちよ、落ち着け。彼らって誰だよ？　お前を狙っている奴が他にもいるのか？」

取り乱す少女と、状況を整理しようとする一夏。その時に感じてしまった。背筋を震わせる、ぞわりとした感覚。あまりにも強大で、強力な気配。冷や汗が止まらない。ガタガタと体が震え、一夏の感覚すべてが警告音を鳴らしている。

「おいおこ、マジかよ。あいつの弟子がやられたのか」

新たな男の声。日本語で、一夏にも意味を理解することができた。けど、安心はできない。何故なら一夏が警戒しているのはこの男が原因だからだ。

「坊主、少しほどきるみたいだな。だがそこまでだ、その女を置いてとつと立ち去るなら見逃してやる。わかるだろ？　俺はそこで寝ているガキとは桁が違う。坊主が逆立ちしようと勝てない相手だ」

黒い髪とサングラス。いかつい表情には生々しい傷がいくつもあつた。

その男の手には巨大な槍、ランスという武器が握られており、屈強な肉体はそれを難なく振り回すことが可能だろ。そんな男の姿を確認し、一夏は確信する。自分では絶対に勝てない相手だということ。

達人級。梁山泊の豪傑ほどではないだろうが、男は一夏がどう足搔

いても手の届かない次元の存在だつた。

まさに絶体絶命。緊張でカラカラになつた喉を潤すためにじくじくと生唾を飲み、この状況をどう打破すべきか思考を巡らせ、答えはすぐに出た。

+++

「アバ、カレーを食べてたらいつの間にか一夏がいなくなってるよ」

「なに、ホントね？」

一夏がいなくなつてていることに気がつく馬達。

アパチャイはカレーを頬張り、馬は美しいイギリス人女性を見つけては声をかけていた。

「アバ、まずいよ。いや、カレーは美味しいよ。けどまずいよ」

「秋雨どん達になんて言えばいいね？ くう、いっちゃんもいい年して迷子になるとは……」

その間に一夏の姿が消えており、馬とアパチャイは多少の焦りを見せる。

状況が状況なだけに、万が一という可能性もあるのだ。一夏と美羽のことを任されていたのに見失つたでは秋雨達に申し訳が立たない。

「だいじょうぶ」

「ふえ？」

そんな2人に向け、しぐれがどこか得意げに言つ。美羽はピザを口にしながら首をかしげていた。

「鬪忠丸が一緒……だ。なにかあつても平氣」

「そういうことね。なら大丈夫ね」

「アパパ」

織斑一夏、彼の命運は一匹のネズミが握っていた。

「戦略的撤退！」

「きやあ！？ ちょ、あなた！ なにをするんですの！？」

「黙つてろ！ 舌を噛むぞ」

達人級を前にし、一夏は逃走した。少女を抱えて脱兎の「」とく逃げ出す。

いくら一夏がしぐれに剣術を教わっているとはいえ、達人級の武器使いに勝てるわけがなかつた。戦えばほぼ確実に命を落とす。故に戦わない。達人級の恐ろしさは誰よりも理解しているつもりだ。

「なんですか……あなたには何も関係ありませんのに」

「だから黙つてろ。そもそも、放つておけるわけないだろ」

達人級の男の狙いはこの少女のようだ。男はこの件に関わらないなら見逃すと言つている。言われたとおりにすれば一夏に危害が及ぶことはないだろう。

けど、それは少女を見捨てるということだ。たまたまこの騒動に遭遇しただけの一夏だつたが、襲われている少女を放つておくことなどできなかつた。

「事情は飲み込めないけど、俺がお前を守つてやるよ。奴には指一本触れさせない」

「…………」

一夏は走り続ける。少女を抱えたまま、常人では考えられない速度で疾走していた。

一般的に知られている百メートル走の世界記録。一夏はそれを人を抱えた状態で更新している。

「……せめて、この抱え方は何とかなりませんの？」

「これが一番抱えやすいんだよ」

現在、少女は一夏によつて『横抱き』、通称お姫様抱っこをされていた。

両手はふさがれるが走りやすく、逃げるためにはこれ以上最適な抱き方はない。ただ、流石に逆刃刀まで持つてくる余裕はなく、その場に捨ててきてしまった。

せっかくしぐれが用意してくれたものだが、持つても邪魔になるし、そもそも達人級相手に戦うことが無謀なのでこの選択に迷いはない。

今は逸早く、この場から退散するべきだ。人通りの多いところに出れば相手は目立つのを避けるだろう。もしくは梁山泊の者達に合流する。梁山泊の豪傑に勝てる存在などほぼ皆無だ。合流されれば一夏の勝ちだ。

「なるほど……いい判断だ」

「なつ！？」

が、その考えは真横から聞こえてきた声によつて粉々に粉砕される。

声の主、一夏の真横を並走していたのはさつきの達人級の男。

いくら一夏が少女を抱えているとはい、世界記録を更新するほど

の速度で走っているというのに、男は数十キロはありそうな得物を持つて、涼しい顔を浮かべて走っていた。

「勝てないとみて、逃げに専念するか。少しでも軽く、そして走りやすくなるために武器も捨てる。それにいい足腰をしている。確かに並みの者が相手なら十分に逃げ切ることができただろうな」

「くつ……」

「さやつー!?」

加速。一夏は更に速度を上げ、アスリートを置き去りにする速度で走つた。だがそれでも男は慌てず、不敵な笑みを浮かべてつぶやく。

「鬼ごっこ……やつたのはガキのころ以来か？　いいだろう、少しだけ付き合つてやるよ」

男も速度を上げた。捕まれば死のリアル鬼ごっこ。

一夏は生き残るために必死で走つた。

「チューー」

それを見守る……一匹のネズミ。しぐれのペットである鬪忠丸だ。

鬪忠丸は裏路地にある建物の屋根に上り、どこからか口ケット花火とマッチを取り出す。

とてもネズミとは思えない器用さでマッチを擦り、口ケット花火導火線に点火する。

導火線が燃え尽き、火薬に火が引火した。笛のような音が響き口ケット花火が打ち上げられ、遙か上空で『パーン』と乾いた音を立てる。

「.....」

それを離れた場所で見るものがあった。鬪忠丸の「」主人、剣と兵器の申し子、香坂しぐれ。

「アパチャイ.....馬.....みつけた」

梁山泊の豪傑達が動く。

+++

「ハア、ハア.....ゲホッ、ゲホッ.....撒いたか？」

達人級から逃げるために限界を超えて走った反動か、一夏は辛そうに咳き込んでいた。

ここはある廃墟の建物内部。人通りの多い場所に逃げれば如何に達人級とはいえ手を出せないだろうと踏んだが、それは男も十分に承知しているようだった。

一夏を人通りの多い場所に逃さないよう回り込み、追い詰め、更に人気のない場所へと誘導していく。

逃げることができず、戦うことなどもってのほか現状で体力の限界を迎えた一夏は身を隠すことを選択し、建物の中に身を隠していった。

「.....で、一体どうゆう状況なんだ？」

「.....」

少女を助ける選択はしたものの、一夏は未だに状況を理解していない。

ただ放つておけなかつたから、それだけの理由で少女を連れ出し、男から逃げていた。

自分に危害が及ぶかもしれないから、相手は達人級だ。最悪死ぬかもしれない。それでも一夏に少女を見捨てる選択肢はない。おそらく、梁山泊の者の誰もが一夏と同じで、少女を助けようとするだろうから。

「そういえば、まだ名前も聞いていなかつたな。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ。君は？」

とりあえずは状況の整理も必要だと考え、少女に状況の説明をしてもらひうのは諦める。

未だに少女の名前を聞いていなかつたことを思い出し、まずは軽い自己紹介を交わした。

「……セシリ亞、セシリ亞・オルゴットですわ

「そりが。セシリ亞って言つんだな。それにしても危なかつたな。なんなんだよあいつら？ いきなり襲い掛かってきやがつて」

「彼らは『闇』ですわ」

「闇？」

闇といひ単語。その言葉の意味がわからず、一夏は首を傾げるだけだった。

そんな一夏に、セシリ亞は闇のことを説明する。

「簡単に言つてしまえば最低最悪の殺人集団ですわ。政財界に通じた者も多く、かなりの影響力を持つています。主に暗殺、諜報、誘拐、護衛、窃盗、傭兵派遣などの依頼を請負、遂行しているとか」

「マジ……映画とかじゃなくて、そんな組織が本当に存在するのかよ？」

「ええ……それではあなたは、そんな組織である闇に関わってしまったわ」

「そうだよ！ 思いつきり関わっちゃったよーー！ つわー、なにしてんだ俺！？」

トンファーを持った少年を倒し、ターゲットのセシリ亞を搔つ攫つて逃げ出した。一夏はこれ以上ないほどに闇に関わってしまった。達人級の男達、闇の狙いはセシリ亞らしいのでまた襲つてくることは確実だろう。関わってしまった一夏もまた、彼らに狙われるかもしれない。

「本当にあなたは余計なことをしましたわ。誰も助けてくれだなんて頼んでいませんのに」

「ははは、手厳しいな」

せめてもの虚勢で乾いた笑みを浮かべるが、一夏からは嫌な汗が止まらなかつた。

どうやってこの状況を打破するべきか？ 一夏は冷静に考え、あるものを取り出した。

「そつだ、電話だ！」

「警察にでも連絡する気ですか？ 無駄ですか」

携帯電話を取り出した一夏に、セシリ亞の冷たい声が響く。なにもかも諦めたようで、感情を感じさせない声だった。

「先ほども言いましたが、闇は強大な力を持つていますわ。警察ごときに何かできるわけ……」

「違う違う。闇のことは知らないけど、俺だって達人級を警察が何とかできるなんて思ってねえよ。達人級には達人級。今、その人達に連絡を……」

セシリ亞の疑問に返答し、一夏は携帯を操作する。アパチャイヤしぐれは携帯を所持していなくとも、馬は持っているはずだ。それも最新型の物を。

だが耳元に当て、呼び出し音を聞いたところでの、一夏の携帯は粉々に粉碎された。

「へっ、あ……俺の携帯が……！」

「いつから鬼！」こがかくれんぼに変わったんだ？」

「つー？」

それを成したのは達人級の男。気配を押し殺し、気づかれないように一夏とセシリ亞の元に接近した上で、あの巨大なランスで一夏の携帯のみを破壊していた。

「くそつ、俺の携帯が！」

「きやあーー？」

悪態を吐き、一夏は再びセシリ亞を抱えて走り出す。戦闘は無謀。故にこれしか手段がない。唯一の活路、梁山泊の者達への連絡手段は男によつて断たれてしまつた。それでも一夏は考える、希望を見出す。この状況をどう打破すべきか？

「もう遊びには十分付き合ひてやつただらつ。終わりだ

「あがつ、あ、あああああつーー！」

「あつ……」

だが、その僅かな希望すら摘まれてしまつた。ランスの先端が一夏の右足、太ももの辺りに突き刺さつた。骨が断たれ、大量の血が流れる。倒れる一夏。投げ出されたセシリ亞は床を転がり、体を強打した。

こんな負傷をしたら、セシリ亞を抱えて走れるわけがない。

「つ、つ……一体なにを、きやあああつーー？」

一夏に抱えられていたセシリ亞は状況を理解することが遅れ、投げ出されたことに対する抗議をしようとしたところで状況を把握した。足を押さえ、蹲る一夏。彼の右足は真つ赤に染まっていた。

「一般人がこっちの世界に足を突つ込むからそつなるんだ。高い授業料だと思ひな、坊主」

男の嘲笑氣味の言葉が耳を打つ。聞き分けのない子供を咎めるような声だった。

だけど状況はそれほど微笑ましいものではなく、緊迫し、重苦しい雰囲気が充満していた。

「さて、それじゃあとひとつターゲットの始末を……ん？」

男は蹲つてゐる一夏の横を通り抜け、青白い顔をしているセシリシアを始末しようとした。

男の接近に気つき、セシリシアが『ひつ』と小さな悲鳴を上げた。けど、彼女には抵抗する術がない。

今ので腰が抜けてしまい、恐れの混じつた表情で男を見ている」としかできなかつた。

ならば何故、男はその足を止めたのか？　それは、蹲つていた一夏が男の足をつかんだからだ。

「待て、よ……」

「おいおい、タフだな。肉体的にも、精神的にも

これほどの目に遭つても畏縮しない一夏に、男は感心する。武術に多少の心得があるのなら対峙するまでもなく実力差を知り、臆してしまつことだらけ。そんな中でも一夏は冷静な判断を下し、またこのように負傷しても諦める気配はなかつた。

一夏は男を睨み殺すような視線で見つめ、問い合わせる。

「なんで、殺そつとする。セシリシアが……なにをしたつて言つんだ？」

「別に何もしてねえよ。ただ、仕事だからやつてるんだ」

「仕事……？」

「というか、事情を知らないのになんなことをしたのか？ 隨分なお人好しだな、坊主。いいぜ、教えてやるよ」

いくら視線が鋭くともあの怪我ではまともに動けないだろ？と判断し、油断し、男は一夏の問いに素直に答えた。

「こいつはある名門貴族のお嬢様だ。その上エスのイギリス代表候補生。そう聞くとなんの苦労もなく育つた才色兼備のお嬢様だが、実はそれなりに苦労してるんだよ。両親を事故で亡くして莫大な遺産を継ぐことになる。それ目当てに親族が歩み寄ってきたが、このお嬢様は猛勉強の末にそれを守り通した。凄いな、素晴らしいことだ。が、それで面白くないのは遺産を手に入れられなかつた親族達。歳若い小娘が遺産を独り占めするのが気に入らず、それを手に入れようとして躍起になつた。で、その中の誰かが言つたんだ。もしこのお嬢様が死ねば、遺産が自分達に回つてくるんじゃないかつてね」

男は笑う。失笑をこぼし、嫌悪感に染まつた表情だった。

「反吐が出そうな理由だろ？ つたぐ、人間つてのは口クなもんじやねえ。どいつもこいつも欲望に塗れてやがる」

「ふざ……けるな。お前もその口クでもない奴の一人じゃないのか！？ 人殺しなんてやつてる時点で！」

一夏の視線が更に鋭くなる。それを受けても男は飄々とし、軽い口調で答えた。

「ああ、そうだな。俺も口クでもない人間の一人だ、人殺しなんてやつてゐる時^点で。でも、そんなクソッタなことが俺の仕事なんだよ」

「ぐひつ……」

男が一夏の手を蹴り飛ばす。もはや遮るものは何もなく、男はセシリアと向き合つた。

「ひ、あ……」

セシリアの表情が恐怖に引き攣つっていた。いくら氣丈に振舞おうといざ死を目の前にすると誰でも臆するものだ。それは彼女も例外ではない。

恐怖し、畏縮し、絶望し、さまざまな負の感情に彩られた表情を見せる。更に一夏の足から流れる大量の血液が、セシリアの恐怖心に拍車をかけていた。

「せめてもの情けだ。安らかな死を……」

男は別に、セシリア自身に恨みがあるわけではない。仕事だからやるが、罪悪感を感じないというわけではないのだ。

歳若い少女を手にかけるのは若干の抵抗がある。故に責めて、自分にできる範疇としてセシリアを苦しませないよう、一撃で急所を断つて殺そうとした。

振り上げられる凶器。それが振り下ろされる前に、一夏が立ち上がつた。

「オオオオオオオオ……」

「おいおい、嘘だろ……」

立ち上がり、男に攻撃を仕掛ける。拳だ。正拳突きなんて上等なものではなく、ただ力任せに殴りかかっただけ。故に達人級の男には容易く避けられてしまうものの、男が驚愕したのは別のところにあった。

「その怪我で立つのか？ 普通立ち上がれないだろ？ 痛覚を感じていはないのか？」

骨を断たれ、大量の血を流したというのに一夏は立ち上がった。右足ががくがくと震え、膝が笑っている。先ほどの拳にだつて力が乗つていなかつた。それでも一夏は立つており、男を睨みつける。

「くっ、はつ……」ほつ、カハアアア

咳き込みながらも息を整える。視線の鋭さと共に威圧感が増し、その姿には達人級の男も背筋に薄ら寒さを感じるほどだつた。そして、理解する。

「そ、うか、そ、う、こ、と、か！ 坊主、お前は典型的な動のタイプなんだな？」

武術家には大きく分けて二つのタイプが存在する。

心を落ち着かせて闘争心を内に凝縮、冷静かつ計算ずくで戦う『静』のタイプと、感情を爆発させ、精神と肉体のリミッターを外して本能的に戦う『動』のタイプ。一夏は後者、典型的な動のタイプの武術家だということだ。

これらの属性に優劣の差があるわけではなく、個人の戦闘スタイルや性格的な向き不向きで決まる。

静は自身の実力を常に安定して発揮でき、力量が劣る相手との戦いで不覚を取ることは少ない。対して動はその時のテンション次第では実力以上の力を発揮できる場合もあり、時にはアドレナリンの大量分泌により痛みすら感じなくなる。今の一夏の状態がまさにそれだ。

「ウオラアアアアツ！？」

「ちいっ！？」

獣のような咆哮と共にまたも一夏が殴りかかる。基本もなにもなっていない、力任せに振るつただけのただの打撃。

大振りで隙だらけ。そんな拳など、達人級の男なら簡単に避けられるはずだった。だが避けられない。

「速つ……」

拳が男の顔にかかる。出鱈目なほどに速い拳。

一夏は肉体のリミッターをはずしているために、普段は無意識のうちにセーブされている力が解放された。

いわゆる火事場の馬鹿力状態。予想外の動きに不覚を取った男に、更なる一夏の追撃が加えられる。

「ウラア！」

「くつ……」

男の所有する武器はランス。必然的に攻撃方法は突きのみとなり、

拳が繰り出されるほどに接近されれば思わず振り回すことがで
きない。

再び飛び出す一夏の拳。今度はそれがクリーンヒットで顔面に当た
り、男のサングラスが砕け散つた。

「ぐう、坊主！」

「カヒュ

サングラスの破片で目元近くを切るも、男は怯まずにランスを振るつた。

先端で突くのではなく、丸みを帯びた横で薙ぎ払うように振るう。左の脇腹にランスの一撃を受け、変な呼吸音を鳴らす一夏。だが、それだけ。それだけでランスの薙ぎ払いに耐え、左腕でがつしりとつかむ。ランスを押さえつけられたことによつて身動きが取れない男に向け、右腕を振り上げた。

「香坂流、相剥ぎ斬り（あいはざめり）」

「ぐはあーーー！」

振り下ろす。手刀だ。刀を用いず、一夏は手刀で香坂流の剣技を再現してみせた。

刀を用いずに手で行つたために完全ではなく、練度もしぐれには遠く及ばない。それでも男にダメージを与えることはできたようで、男の肩口から腹部にかけて、衣服が刃物で切り裂かれたように破れている。晒される肌からは僅かに血すら滲んでいた。

攻撃の手は未だに收まらない。怯んだ男に向か、一夏は更なる追撃を放つていく。

暴れるように荒々しく、怒涛の攻め。あまりの猛攻に流石の男も成す術がないようだ。

「いい加減に……」

少なくとも一夏はそう思つていた。

「しゃがれえええええ……！」

男の怒りが爆発する。ほぼ密着状態では役に立たないランスを投げ捨て、一夏の拳をつかんだ。

振りほどこうとする一夏だつたが男はそんな暇をとれず、拳を握つたまま投げ飛ばした。

「「ふう……」

背中から壁に叩きつけられ、肺の中の空気を全て吐き出されてしまふ一夏。痛みを感じずとも流石にこれには堪らず、息苦しそうな表情を見せる。

「末恐ろしいな、坊主。油断しすぎていのをもうつちました」

倒れこんだ一夏に警戒しつつ、男は冷静に先ほど投げ捨てたランスを拾い上げる。

サングラスが割れた時の目元の傷、手刀による切り傷、一夏の猛攻を受けたというのにそれ以外目立つた外傷はなかつた。

「が、基本がなつちゃいないな。なんだあれ？ 剣以外素人か？」

せつかく筋がいいのに、無手の戦闘だとああもお粗末なんだな」

動として覚醒した一夏は確かに強かつた。並外れた身体能力を披露し、思わず男が不覚を取つたほどに。だが、基礎がなつていない。一夏が師事していたのはしぐれだけであり、剣術以外の修行をまともにやつたことはなかつた。無手の武術に関してはほぼ素人であり、高いだけの身体能力で暴れまわることしかできない。ましてや達人級に挑むこと自体が無謀である。

「ぐ、そ……」

「お、おこ、もつやめとけ。それ以上やつたら死ぬぞ」

尚も立ち上がりつゝする一夏に、男は呆れたように言つ。アドレナリンの多量分泌によって痛みを感じなかつた一夏だが、だからと言つて無傷というわけではない。むしろ怪我をしても痛みを感じることができないという、大変危険な状態なのだ。

一夏の場合は元から右足を負傷しており、それを無理に動かしたので酷いことになつてゐる。血が絶え間なく流れ続け、既に致死量一歩手前までに血液を失つていた。

痛みがどつこつという状態ではなく、意識が朦朧とし始めている。

「坊主、お前は生かしとしてやるから安心しな。もつ少し腕を上げて、また会う機会があつたらその時は殺してやるよ」

「ま、待て……」

この場は生き残れそうだった。だが、安心も安堵もまったくできない。

今日、偶然であつたばかりとはいえ、一夏は歳の近い少女が目の前で殺されるのを傍観できるタイプではない。放つて置くことができる

何とかして助けたいと思う。だが、これ以上は体が言つことを聞かなかつた。

むはー！？

そんな時、ふと男の動きが止まつた。一夏はなにもしていない。なにもしていななのに男が何かを感じ取り、その場に立ち止まつた。

「どうやら、一匹ネズミがいるようだな」

「は?

一夏には何のことだかわからない。が、男は冷静で、動きを止めた
原因、腕に刺さったものを引き抜く。
それは爪楊枝ほどの大きさの槍。おそらくは、これを投擲したのだ
う。

「暗器の類か？ 毒は塗つてないみたいだがいい腕だ。俺に気配を悟らせないとはな。だが、もう隠れても意味はない。姿を現せ！」

男の言葉に答え、姿を現したもの。それは……

「ヂユツ」

「……………はあ！？」

本物のネズミだつた。この展開には、流石の男もポカーンと口を開

けて固まってしまう。

「と、…… ちゅ つまる？」

「なんだ坊主。 ここのネズミはお前のペットか？」

そのネズミの正体は鬪忠丸。 一夏のペットではなく、じぐれのペットで友達。 そして彼（？）がどうしてここにいるのかといつと……

「弟子が世話になつた……な」

「つー？」

「じぐれ、さん……」

「主人様をここに案内してきたからだ。」

「おいおい、おいおいおい…… まったく氣配を感じなかつたぞ。 何者だ、小娘……」

男と一夏の間、その場所に突如現れた氣配と姿。 剣と兵器の申し子、香坂しぐれ。

彼女の登場に、男は激しい動搖を見せる。

「アパ、大丈夫かよ、一夏」

「むつ、これはいかんね。 急いで止血針を」

事態の変化はそれだけではない。 更に2人、男が氣配すら感じ取る

ことのできなかつたものが現れる。

いつの間にか、気づいたらそこにいたのだ。達人級である男がこの3人の者の気配にまったく気づけなかつた。そのことから考えられるのは一つだけ。

「達人級が3人？ しかも坊主、お前の身内か？ お前が一番なんなんだよ？ 何者なんだ！？」

男の技量を遥かに超える存在。男は達人級ではあるが、達人としての格付けは下の方、相撲で例えるなら幕下だ。だが、この3人は違う。男とは雲泥の差を持っている。遥か上位の存在、横綱とも言うべきか？

男の第六感が先ほどから絶え間なく悲鳴を上げている。

「人は斬らぬと……誓つた……が、一夏の敵だ。無事で済むと思つ……な」

「まずいな、こりや……」

立場が逆転し、絶望的な状況に追いやられる男。

3人の達人級を相手にし、生き残れる可能性はほほゼロといつてもいいだらう。

今度は男がこの状況を、どう打破するべきか考える番だつた。必死に考え、何か案をひねり出す。

この際ターゲットの始末を諦め、逃げ出すといつのも手だ。だが、あの3人の達人から無事に逃げ出せるか？

そう考えていると次の瞬間、建物の屋根がものすごい音と共に吹き飛んだ。

「あらあら、まだ手間取つていたんですか？ 相変わらずどんどんくさ

い

「ひつ……余計なお世話だ」

現れたのは二十代後半ほどの女。彼女は見晴らしのよくなつた上空で、クスクスと馬鹿にしたような笑みを浮かべていた。目を見張るべきはその身に纏つた武装。間違いなくあれば建物の屋根を跡形もなく吹き飛ばしたのだろう。それはIS。女性にしか扱えない史上最強の兵器。

「無能なのに口だけは達者ですね。これだから男といつものは」

女は女尊男卑を地で行くような性格で、言葉には男を馬鹿にした態度が十分に含まれていた。それに対して男も忌々しそうに舌を打つたことから、この2人の仲は良くないらしい。が、そんなことなど梁山泊の者には関係ない。男と女の仲などいつでもよいことだ。

ISは最強の兵器だ。故にそれを扱える女は自身がこの中では最強だと思つていいようだが、それは違う。彼女は知らない。武術を極めた者、達人の恐ろしさを。

「あいやー、今日はおいらちゃんとつてラッキーだーね。是非とも
縛札衣を使つね」

「アパチャイもやるよ。死んだ一夏の敵を取るよ

「アパチャイ、俺、死んでないから……」

テンションの上がる馬と、意氣込むアパチャイ。一夏はアパチャイ

の発言に突っ込みを入れる。

そんな中でしぐれだけ、真剣な面持ちで言葉を発する。

「妙……だな。お前達の狙いはあるの子一人……なんだらう？ それなのに達人級とＩＳ操縦者まで出てくるとは……随分ご執心なんだ……な」

しぐれの感じた疑問。今回、イギリスに来たのは少女を、セシリアを保護するため。

セシリアを襲う組織は闇の武器組。セシリアがいくらＩＳ操縦者で代表候補生とはいえ、現状はＩＳを持たない少女に達人級だけではなく、武器組みに所属するＩＳ操縦者までも出てくるのは予想外だった。

「別にそうでもないですよ。本来ならこの仕事は私が受ける予定だったんです。それなのに何の因果か、役立たずな男にも話が回つてしましてね。だから仕事を譲つてあげたんです。その際にサービスとしてその子のブルー・ティアーズというＩＳを点検中に搔つ攫つてきたのに、まだ始末できていなかつたから私が自ら出てきたんですよ」

「なつ、あなたがわたくしのブルー・ティアーズを……」

「ええ、拝見しましたが良い機体でしたね。あんなものを使われたらこの男には荷が重いと思ってのサービスだったんですけど、こうも期待はずれだと呆れるしかありません」

「けつ……」

要は仲間割れのようなもの。同じ武器組とはいえ、使う武器によつ

て不仲があるらしい。

ましてや女は高圧的な態度で男を馬鹿にしている。あれでは仲が悪くて当然だった。

「さて、おしゃべりは終わりにしましょうか。ここから先は私がやりますので、あなたは下がっていてください」

「……わかったよ」

女は男を下がらせる。素直に距離を取った男の姿を確認し、しぐれ達を見下したように呟つ。

「さて、あなた方は男ですが、せつかくの達人級とのことですからね。ここは私の弟子達に戦わせてみましょう」

いや、正確には馬とアパチャイをだ。余裕をかまし、そんなことを言つ。

その宣言と共に、上空から更に2人の少女が降りてきた。量産型だが、ISに身を纏つた十代半ばほどの少女。彼女達を馬とアパチャイに宛がうつもりなのだろう。

それが、どんなに無謀なことなのかも知らずに。

「いいねいいね、最高ね。全員おじちゃんが纏めて相手してあげるね」

「アパパパパ」

馬のテンションは鰻上りとなり、アパチャイは笑っていた。

そんな中、しぐれは冷静で、無表情で待機形態となっていた自身のISを起動させる。

しぐれの首飾りが光を発して形を変え、最強の兵器となつた。

その名は黒影。その名の通り、黒一色の刃だった。鎧のような装甲をしており、見た目どおりに強固な防御力を有している。腰にはしぐれの愛刀、『刃金の眞実』と呼ばれるものと酷似した刀が差されていた。

「馬、アパチャイ。あいつとそいつは……ボクの獲物だ。手を出す……な」

「あいや～、しぐれさんはいっちゃんをやられて随分お怒りのようね。わかったね、おいちやんは弟子の女子だけで我慢するね」

「オーケー牧場よ」

しぐれの言葉に頷く馬とアパチャイ。イギリスでの騒動を締めくくる戦闘が始まろうとしていた。

「十九、十九十九……」

圧倒的だつた。あまりにも圧倒的過ぎてもはや笑いしか出て来ない。達人級の男は乾いた笑みを浮かべ、目の前の光景に見入つていた。

「馬家 紋縛札衣！」

馬と相対した少女が悲鳴を上げる。何が起きたのかわからない。気が付いたら身に纏っていたISが解除され、さらにはその下に着て

脱がされたエスースは手足を拘束するように巻きついており、少女は身動きひとつ取ることができない。

「武術と服には密接な関係があるね。中国拳法には袖を取る型が多くあり、柔術は和服を基本としてつくられ、ローマの格闘技では公平をきすため全裸で行われた。つまり、服を用いて無傷で制す……この技も活人拳の極みのひとつね！」

真顔でもつともそうなことを言ひ馬。仮にそうだとしても、まさか実戦であんな技を使うとは思つまい。

まだ少女ゆえにこれから成長に期待だが、晒された乳房が工口い。これは見事な眼福だつた。

「イヤバダバドウツッ!!

「？」
「！」
「？」
「！」

男が少女に気を取られた一瞬、その間にもう片方の少女の方の決着も付いた。

シーリトハリテー 純文院徹 なはそれ 美咲しいの
フペニアーンのパソニ。パソニペソニの重丁。ニルニサガト

れだけでISの防御が打ち破られた。

となつたものの流石はＩＳといったところか、少女はかるうじて生きていた。目立つた外傷は見当たらぬが、ぴくぴくと痙攣し、完全に気を失つてゐる。

（圧倒的過ぎるだらけ……）

男も達人だ。ISは確かに強力な兵器だが、扱う者が並みの者なら互角以上にやりあう自身はある。そう思っているが、だからと言って馬とアパチャイに勝てる気はまったくしなかつた。

「ふう……」

「な、なんで……」

しぐれと女との決着も付いた。これまで一瞬であり、到底戦闘なんて呼べぬものではない。

一回の交錯、たったの一太刀によつて女は敗れた。本当はもつと刀

が振るわれたかもしれないが、男では一太刀にしか見えなかつた。それほどまでにしぐれの剣速が早く、そして見事だつた。

ISが両断される。細切れとなり、金属の破片が辺りに散らばつた。それと同時に女のISスースも細切れとなつており、布切れが宙を舞う。ISと衣服の切断。だと言つのに女には切り傷一つない。ISと衣服のみを切断しただけであり、その上峰打ちを叩き込んだのだろう。しぐれの技量に男はただただ驚くばかり。

「は、ははは……はははは」

もはや笑うしかなかつた。女のことは氣に入らなかつたが、それでも実力は認めている。だからこそ冷静に状況を分析し、現状を理解する。

打つ手なし、お手上げ、詰み。こんな状況で任務を遂行できるわけがなく、だからと言つて逃げることすら叶わない。逃げたとしてもこの3人が相手ならすぐに捕まつてしまつ。

男の命は風前の灯。彼の運命は、しぐれ達が握つていた。

「さて、次はお前の番……だ」

しぐれが刀を男に向けて宣言する。その威圧感に思わず発狂してしまいそうだ。

男はランスを構え、ポソリと言つ。

「まあ、なんだ。俺もなんだかんだで武人でね。背中晒して逃げるなんてことはしたくなえ。もつとも逃げたところで、あんたらから逃げ切ることはできねえだらうがな」

選んだ道は対峙。それがどれほど無謀なことかは理解している。だが、逃げることすらできないと言うのなら、せめて華々しく散らう。

そう決意して、男はしぐれと向かい合つた。

「良い覚悟……だ。いくぞ」

しぐれが動く。男にはしぐれの体がISに溶け込み、同化したよう

に思えた。

ISも武器。武器とは空手家の拳、ムエタイ家の膝、己の体の一部であるも。それを武器使いの端くれとして理解している男だつたが、しぐれのそれは次元が違つた。

（ああ……勝てるわけねえよ）

悟ると同時に、男の意識が闇へと沈んでいく。ランスは真つ一つに両断され、男の腹部に峰打ちが叩き込まれる。胃液をぶちまけ、男はその場に崩れ落ちた。

「ははは……流石しぐれさん達。スゲーや」

一夏も笑つ。自分の今までの苦労はなんだったのだろうと思いつつ、改めて師との差を実感した。

「いや、あの……あれはそんな言葉で済まされるものですか？　と

いうかISを、世界最強の兵器を……殿方が素手で……」

セシリ亞は目の前の光景が信じられない様子だつた。それも当然だろつ。ISを素手で倒すなど誰が信じるだろつか。

だが、そんな規格外の者が存在するのも事実。それが達人なのだ。

「梁山泊に常識は通用しないんだよ……」

「つよひ…… もんぱく？」

「わい…… ひとつも頼りになる俺の家族だ」

子供が親の面倒をするより、一夏は笑っていた。笑い、意識が薄れていくことに気づかないほどに安らかな表情を浮かべている。

「ちょっと、あなた！？ しつかりしなさい」

「血を失いすぎたね、これは。早いところ輸血しないと大変なことになるね」

「アパ、アパチャイ一夏を病院に運ぶよ。それで万事休すよ」

「万事休すじや…… まづい」

一夏の変貌に慌てふためく者達。武術の心得はあるものの、馬以外は医療に関する知識はなかつた。

馬の行つた止血針を刺すという行為も、所詮は応急処置。出血を抑えるだけであり、失つた血は戻らない。

一夏は眠りに落ちるようになり田を開じ、そのまま意識を失つた。

+++

「わい…… ？」

田を覚ました時一夏がいたのは、知らない天井の部屋だった。もつともここはイギリスなので、どこでも知らない部屋なのだが。

天井と同様、真っ白な壁とシーツ。一夏はベットに寝かされており、腕には点滴用のチューブが付いていた。おそらく、ここは病院なのだろう。

「田が覚めたかね？」

「秋雨…… もん」

田が覚めた一夏が最初に見た人物は秋雨。この病室には一夏の他に彼しかいなかつた。

病室特有の殺風景な景色と相成つてか少し寂しげな印象を受ける。

「外傷は右足だけだね。骨が断たれているから暫くは絶対安静。しぐれとの修行も暫くは休みだ。それと出血が酷かつたが、それについては既に輸血を済ませてある。馬の止血がなければ出血多量で死んでいるところだったよ」

「はあ…… そ、うなんですか。危なかつたんですね」

「まつたくだ」

死んでいたかもしないと言つことに僅かな驚きを受けるが、それだけだつた。いまいち実感がわからず、現実的に受け止めることができなかつた。

そんな一夏に、秋雨が呆れたよつて言つて。

「さて、一夏君。君とましつかりと話しあつておかねばならぬ」とがある

「えつ？」

呆れてはいたが、秋雨の表情はいつになく真剣だった。ベットから起きられない状況だったが、思わず一夏の背筋が伸びる。秋雨のその言葉に梁山泊の豪傑達、隼人、逆鬼、馬、しぐれ、アパチャイと全員が入ってきた。

皆堅苦しい表情で、中心にいる一夏を見つめている。

「織斑一夏」

その中を代表して、隼人が口を開いた。いつもはいつくんなどと茶目つ氣たつふりに一夏を呼ぶのに、今の言葉にそんな軽い感じは微塵もない。

畏まり、一夏のことをフルネームで呼んでいた。

「達人級を前に戦いを挑むとは何事じゃ！！ 愚か者め！！」

「う……！？」

「ここが病室だと叫つことも構わずに叫び声を上げる。

隼人に怒鳴られ、一夏はいろんな意味で驚きを感じていた。こんなことは初めてだ。いつもは飄々とし、豪快だがなんだかんだで優しい隼人が怒鳴り声を上げ、一夏を叱っている。

隼人に初めて起こられた一夏は体をびくりと震わせ、呆然としながら続けられる言葉を聞いた。

「たまたま生き延びたから良いものの、命を失う可能性がほぼ確実じゃつことは普段、わしらと生活しておるお主ならわかっていたはずじゃ！！」

確かに一夏は達人級の恐ろしさを嫌と言つほど理解している。

だから当初はセシリ亞を連れ、その場から逃げようとしていた。だが、逃げられる状況ではなかつた。男はセシリ亞を狙つており、一夏が逃げれば彼女は殺されていただろう。そんな状況だつたと、一夏は言おうとした。

だけど、憤怒する隼人を前にしてそう言つことができなかつた。

「確實に死ぬとわかつていて立ち向かうのは自殺と変わらぬ……一夏、お主が死ぬことで悲しむ者が何人あると思う……？」

隼人の真剣な言葉が一夏を打つ。一夏は自分が、どれほどの心配をかけてしまつたのか理解した。

もし、自分が死んだりしたら千冬が悲しむだろう。梁山泊の者達もだ。弾も涙くらいなら流してくれるかもしれない。鈴も泣いてくれるだろうか？

想像し、彼女なら悪態を吐きながらも泣きじやくるだつと結論付けた。鈴が泣く姿は、正直あまり見たくない。もう会えないかもしれない幼馴染のことを考え、胸が締め付けられるような痛みを感じた。

「そのことを考え、しかと反省せよ」

延々と説教を受け、最後にそう締めくくつて隼人達が病室を出て行く。

一夏は一人部屋に取り残され、思考を巡らせた。

（確かに達人級に挑んだのは無謀だった……けど、逃げられる状況じゃなかつたんだよなあ）

最初は逃げようとした。達人級相手に戦うのが無謀だなんて百も承知だからだ。

だが、足を負傷し、逃げられる状況ではなくなつてしまつた。

(セシリアを見捨てれば逃げられた? [冗談、そんな選択死んでも
「めんだ」)

今日であつたばかりの赤の他人。それでも一夏にセシリアを見捨て
るなんて選択肢は最初から存在しなかつた。

自身の信念を貫き、死ぬのならそれも仕方ないと思つていた。

(でも、それだと……)

だが、もしそうなつてしまつたら隼人の言つとおり、何人の人が
悲しんだかもしれない。

一夏は知り合いに恵まれていてことを実感し、怒られはしたもの
梁山泊の優しさに感謝する。

(ああ、くそつ……わかんねえよ! -)

それでもあの状況で、セシリアを見捨てることが正しかつたとは思
えない。

頭を搔き鳴り、一夏は唸つていた。そんな彼の病室に、再度人が訪
れる。

「あの……失礼します」

「え、セシリアア?」

「はい……」

部屋を訪れてきたのは、一夏が悩んでいる原因であるセシリア・オ

ルコットの人。

ベットの側まで歩み寄り、申し訳なさそうに一夏に問いかけた。

「……お怪我の方は大丈夫ですか？」

「あ、ああ……まあな。右足が動かせないのは辛いけど、もう痛みはないよ。治療が適切だったんだろうな」

「そうですね……」

セシリ亞は暗く、会話が弾まない。負い田のよつなものを感じており、一夏のことを直視できないでいた。

それでも何とか言葉を紡ごうと、必死に発する言葉を探した。

「あの、その……申し訳ありませんでした」

そしてでてきたのが、謝罪の言葉。

「結果的に巻き込んでしまつ形になつて……このセシリ亞・オルコット一生の不覚ですわ」

発端は身内の陰謀。セシリ亞はそれに無関係な一夏を巻き込んでしまつたことを申し訳なく思つていた。

さらに一夏がいなければ、自分はあの男によつて殺されてしまう。一夏はセシリ亞にとつて正真正銘の命の恩人だ。とても頭が上がらない。

「いや、一生の不覚つて大げさな……それにセシリ亞が悪いわけじゃないだろう?」

「ですが……」

「あ～もう、暗い話は勘弁してくれ。ただでさえ、長老に怒られて
へこんでるんだ」

「それに関しても……申し訳ありませんでした」

その態度は一夏にとつて気持ちの良いものではなかつた。愚まられるのはどうも苦手だ。

この空気を一変するために隼人のことを引き合いで出す一夏だつたが、一夏が怒られたのは自身が関係しているからだと余計に卑屈になつてしまつたセシリ亞。

一夏はボリボリと頭を搔き、深いため息を吐いた。

「あ～、だから……な。セシリ亞がなにも気にする必要はないって。怪我したのだつて俺が至らないからで……」

「…………」

「まあ、その、なんだ……俺はまだまだ未熟だけど、それでもセシリ亞を守れてよかつたよ」

「え……？」

「今の時代、確かに女尊男卑の世の中だけさ、それとは関係ないつて言うか、男が女を守るのは責務つていうか……要するに俺のくだらない意地の問題だけど、それでもセシリ亞を守れてよかつたと思つてゐる。だから、自分を責めないでくれ」

確かに隼人の言つたとおり、一夏は愚かなことをしたかもしない。

それでも、この選択が間違いだったとは思えない。

セシリ亞は助かつた。その事実があれば、一夏は胸を張ることができる。だからいつまでもぐじぐじ、暗に今までいられるのは正直辛い。

「俺は……ん？」

「あ、うう……」

「あれ、どうした？ なんか顔が赤いぞ」

一夏は言葉を切ったところでの、セシリ亞の異変に気づく。彼女の顔は赤かった。

発熱でもしたかのように顔が赤くなり、わたわたと慌てふためいているように見える。落ち着きがなく、その様子が一夏を心配させる。

「な、なんでもありませんわ！」

「や、そうか……」

「お、思つたより元気そうで安心しましたわ。その……お体に障るでしうからわたくしはこれで失礼いたします！」

「あ、ああ……」

「ではっ！」

セシリ亞は顔が赤いまま、慌てながら病室を出て行った。
理由をまったく把握できていない一夏に対し、今度は病室の扉ではなく窓側から声がかかってくる。

「前々から思つていましたが、一夏さんは女性の敵ですわね」

「人聞きが悪い。なんなんだよ美羽。つてか、ここ何階だけ？」

「5階ですか？」

「そうか……」

窓側から入ってきたのは美羽だ。その登場に特に驚くこともなく、むしろ呆れて、一夏は聞き捨てならない台詞に突っ込みを入れる。

「鈴ちゃんも大変ですか？」

「そこ」で鈴が出て来る意味がわからないんだが……あいつ、今頃は中国に着いてるんだよな。ちゃんとやつていけるかな？」

「ええ、きっと大丈夫ですか。なんたつて鈴ちゃんですもの」

中国に帰った鈴のことを思い、一夏は考え深い気持ちになる。よく考えてみれば鈴と別れて、まだ数日と経っていない。昨日日本を発つたので、実質一日ほどだ。それなのにもう何ヶ月も、何年も離れ離れになつた気持ちにさせられる。いつも顔を合わせていた幼馴染がいなくなるのが、こんなにも違和感を生み出させるとは思わなかつた。

「はあ……酢豚食べたいなあ」

「つぶふ、今度作つて差し上げますわ」

「ありがとう、美羽」

美羽の気遣いに一夏は微笑みを浮かべる。それに対しても美羽も笑みを浮かべ、思い出したように言った。

「ううう、先ほどのおじい様のお話ですが、あんまり気にしない方がいいですわよー」

「く……？」

「では」

「あ……」

それだけを言つて、美羽は病室を出て行く。窓から飛び降りる姿を見て、内心では扉を使えと突っ込みを入れる。美羽の言つたことを理解できない一夏は、ベットに横になりながら天井の染みを数えることにした。

+++

「ガハハハ！！ しかし一夏の奴、よく頑張ったじゃねえか。命を懸けて立ち向かうたあてーしたもんだ」

「逆鬼どん、ここは病院ね。けど逆鬼どんが寝める気持ちもわかるね。いつちゃんはよくやつたね」

病室の廊下、そこで愉快そうに笑う逆鬼。馬はそれを咎めるが、彼

の表情もまた緩んでいた。

「命を賭して人を守る。まさに梁山泊にふさわしい行動じゃ！！」

「今夜は赤飯炊かな…… わや」

一夏のことを怒鳴り飛ばした隼人も今では柔らかな笑みを浮かべ、褒め称えていた。

しぐれは無表情だったが、ほんの僅か、確かに笑っていた。

「おつと、そんなこと、彼の前では口が裂けても言つてはいけませんよ。ここにいる誰もが通つた道とはいえ、褒めたら彼の死期を早めかねない」

秋雨が釘を刺すように注意する。だが、彼も内心では一夏の行動を喜んでいるのだろう。

これまた僅かだが、口元がほころんでいた。

「うわっはっはー！ 一夏は死なねーよ」

「そりよ、もしかんかあつても一夏はアパチャイが殺しても守るよ」

「殺しちゃ駄目だろ？」

アパチャイまでも、みんながみんな笑っている。一夏の成長。それを自分のことのように心から喜んでいる。

だが、一夏のためを思つてか面と向かつて褒めることができない。実力を過信することは大変危険だ。引き際を誤れば死ぬ危険性もある。

だから一夏は心を鬼にし、一夏を叱ると叫ぶのが梁山泊の者達の同

意だった。

「へへ……いつの間にか……たくましくなりやがって……」

「なんね逆鬼どん、感動して泣いてるね？」

「アパパパパ！…」

彼らは一夏のことを小さなこころから知っている。そんな彼の成長に喜ぶなと云つのが無理な話であり、思わずホロリと涙を流してしまつほどだ。

逆鬼の涙腺が緩み、馬も逆鬼のことを指摘しているが、その瞳からは一筋の嬉し涙が溢れていた。

「つむ、一夏君は確かに成長した。たくましくもなつたね。これもしぐれの指導の賜物だろ？」「

「え……へん」

秋雨の言葉にしぐれは胸を張る。が、続いて告げられた彼の言葉には顔を顰めた。

「だが、少々武器に頼りすぎる傾向があるね。剣技ばかりで、素手での戦闘は随分おろそかだ」

「む……」

「「」はははうだね……一夏君を徹底的に鍛えてみないかい？」

秋雨が笑う。優しい、死神のような笑顔だった。

「それはいいね。剣で戦い、時には柔術、拳法を使つ達人……育て
甲斐がありそうね」

「さりにムエタイも加えれば最強よー。」

馬が便乗し、アパチャイも乗つ氣だ。秋雨はあいこ声を並べ、考
るじぐさを取つた。

「さうか、君は弟子を取つたことなかつたつけ」

「そうよ、何事も経験よ」

「しかしアパチャイは手加減を知らないからね。一歩間違えばいつ
ちゃんが死ぬね」

「アパ、『テカゲン』って何よ。日本語むずかしいよー。」

「アパチャイにだけはやらせちゃいけない氣がしたね……もっとも、
潰れたら所詮はそこまでと諦めはつべきだね」

今までの気遣いはなんだつたのかといふ会話が平然と交わされる。
悪巧みをするように計画を企て、彼らはとても楽しそうだった。

「一夏はボクの弟子……だい」

「じぐれどん、嫉妬かね？ けど、こっちゃんのやうな才ある子を
独り占めするのほんと少しずるいね」

「ふおつふおつふお、確かにこっくんは才能豊かじゃからな

しぐれは嫉妬し、むくれてているが、もししぐれほどの達人達が一夏を鍛えたら凄いことになるだろ？

それを想像するだけで、本当に面白い。

「逆鬼どんも加わらんね？ いつちゃんの改造計画」

「けつ、俺は弟子は取らねえ主義だ」

「なら仕方ないね」

逆鬼はどうも素直になれないようだ。馬はあつさうとその言葉を受け入れ、これから修行の計画を立てる。

「一夏はボクの弟子……なんだい」

「そうだね、一夏君はしぐれの弟子だ。それに加えて少々、私達が面倒を見るだけだよ」

「腕が鳴るね」

織斑一夏。彼には知らぬ間に茨の道が用意されていた。

BATTLE 5 入学

（なんでこうなった……）

暫しの時が流れ、一夏は現在高校生。今日がその入学式であり、新しい世界の幕開けだった。

それ自体は別にいい。むしろ喜ぶべきことなのだろう。だが、一夏は素直に喜ぶことができないでいた。

何故なら、このクラスに男は一夏一人。残り一十九名は全員女だったからだ。

（弾に馬さんは羨ましがってたけどさ、これってめちゃくちゃ辛い……ってか、何で俺の席がこんな特等席なんだよ？ いい注目の的じゃねえか）

一夏は冷や汗をだらだらと流し、緊張していた。自意識過剰や思い上がりではなく、本当にこのクラス全員の視線を感じていたからだ。その上一夏の席は真ん中の最前列。嫌でも目立つ場所であり、これが一夏の精神を蝕む原因のひとつでもあった。

（助けてくれ、弾……）

心の中で叫び、一夏は六年ぶりに会つた幼馴染、篠ノ之弾に視線を向ける。が、彼女は救いを求めるような一夏の視線に対し、窓側に顔をそらすことで答えた。

（弾イイ！ あれつ、なんか怒つてない？ 感動の再開のはずだよな！？ 六年ぶりなのに……もしかして俺つて嫌われてる？）

す「」へ憂鬱になってしまった。心が重くなり、今にも挫けてしまった。。

それでも救いを求めて、一夏は今度は後ろの方の席に視線を向ける。一夏が後ろを向いたことで女子達の注目をさらに集めてしまったが、その先に目当ての人物はいた。

セシリア・オルコット。イギリスに行つた時、ある騒動で出会った少女だ。

一夏の下宿している道場、梁山泊は彼女を保護することとなり、ごたごたが終わるまで匿つたことがあった。

その期間は一月にも満たなかつたが、その短い間共に過ぐした少女。付き合いは浅くとも、友と呼んでも遜色ない間柄だ。

そんなわけで一夏はセシリアに助けを求めた。が、彼女は曖昧な笑顔を浮かべて手を振るだけ。頑張れと励ましてくれているようだが、それ以上はしてくれなかつた。

いや、できないというのが正しいのか。

「……くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいー？」

何故なら今は自己紹介中だ。入学式初日、クラスメイト達はほぼ全員が初顔合わせ。故に自己紹介。

そんな中席を立つたり、面と向かつて声をかけたりすることなどできるわけがない。

副担任の呼びかけに驚き、一夏は裏返つた声で返事をしてしまひ。その様子にくすくすと女子達の笑い声が聞こえてきた。

「あつ、あの、お、大声出しちゃつてごめんなさい。お、怒つてる？　怒つてるかな？　ゴメンね、ゴメンね！　でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まつて今『お』の織斑くんなんだよね。だか

らね、」、「メンね？ 自己紹介してくれるかな？ だ、ダメかな？」

副担任の名は山田真耶。その山田先生が「」の方が申し訳なくな
るくらいにぺこぺこと頭を下してきた。

身長はやや低めで、女生徒のそれとほとんど変わらない。服はサイ
ズが合っていないのかだぼつとしており、眼鏡も大きめなためか少し
ずれている。

そのために見た目以上に小さく見え、生徒といわれても疑わないほ
どに幼い容姿をした女性だった。

若干頼りない印象を受けつつ、一夏は申し訳ない気持ちで返答した。
「いや、あの、そんなに謝らなくても…… つていうか自己紹介しま
すから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？ 本当ですか？ 本当ですね？ や、約束ですよ。絶
対ですよ！」

がばつと顔を上げ、一夏の手を取り、熱心に詰め寄る山田先生。そ
の行為でまたも注目を浴び、これ以上ない居心地の悪さを感じる一
夏。

それでも何とか立ち直り、自己紹介しようと席を立つ。やはり何事
も第一印象が大事だ。既に手遅れな気もするが……

（うう……）

今まで以上に視線が集まるのを自覚する。一夏を見捨てた算までも
が横目で見ているのだから尚更だ。

別に上がり症ではなく、特に女子に苦手意識なんてものは持つてい
ないが、このように視線が集中したらたじろぐのも無理はない。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願ひしますわ」

ペコリと頭を下げ、完結に自己紹介を終える。だが、それだけではクラスメイト達は納得してくれそうになかった。

期待のこもった視線が一夏に向けられ、集中する。それに無言の圧力があった。

（いかん、マズイ。このままだと『暗い奴』のレッテルを貼られてしまつ）

このまま黙っているのは良くないと判断した一夏は、一度深呼吸をし、思い切って口を開いた。

「以上です」

がたたつ、と音を立て、思わずすつこける女子数名。その中にセシリアもいたのが印象的だった。

「あ、あのー……」

背後からかけられる、山田先生の悲しそうな声。

一夏に悪いことをしたと前の認識はないが、それを聞くとどうも罪悪感が芽生えてしまう。

すると……

「……？」

パンツ、と乾いた音が鳴り響き、一夏は自分の頭が叩かれたのだと理解する。

この叩き方、威力といい、角度といい、速度といい、一夏にとってとても身に覚えがある者の仕業だった。

一夏はおやおやすると振り返り、そこにいた者が予想通りの人物だと理解する。

「げえっ、アクア！」

「ウーン……って、なにをやらせる……」

もう一度叩かれそうになる。一夏の頭を叩いたのは彼女が持っていた出席簿だ。それが一夏の頭に直撃する寸前、一夏は両の手で挟んで受け止めた。これぞ真剣白羽取り。

「ほひ、少しばやるよひになつたな」

「くくっ」

向かい合ひ2人。一夏の正面にいたのは実姉、織斑千冬だった。出席簿を受け止めた一夏に感心したそぶりを見せ、次にニヤリと獰猛そうな笑みを浮かべた。

「だが、甘い」

「えつ、ちょっと待つて。それは……」

出席簿を持つていない、千冬の空いてる腕が一夏の頭部に伸びる。出席簿を抑えている一夏はその腕を払うことができないでいた。顔面がつかまれる。そのまま力が込められた。

「あたたたた！ ギブ、ギブアップ！ ちよ、タンスマ。マジでタン

「マアア……」

アイアンクロー。正式名称はブレーン・クロー。別名、束殺し。戯れる姉弟の姿に、周囲が引いているのがわかる。横目で見てみると、セシリアも引き攣つた笑みを浮かべていた。

「お、織斑先生……もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田先生。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

「…………」

山田先生の言葉に、千冬がやつと一夏を開放する。

自由になつた一夏は力なく崩れ落ち、頭を痛そうに抑えていた。そんな彼には田もくれず、千冬はクラス全員に堂々と宣言した。

「諸君、私が織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言つことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は若干十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らつてもいいが、私の言つことは聞け。いいな」

そんな千冬の発言に対する、クラスメイト達の返答は黄色い声。

「キヤー———— 千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんですー 北九州からー」

「あの千冬様に『」指導いただけるなんて嬉しいですー。」

「私、お姉様のためなら死ねますー。」

きやいきやいと騒ぐ女子達。一夏は改めて千冬の人気の高さを知つたが、当の千冬はとても鬱陶しそうな表情をしていた。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられer。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

「あやああああー！お姉様！もつと叱つて！罵つてー！」

「でも時には優しくしてー！」

「やしてつけあがらないよつて隠をしてー。」

これには流石の一夏も引いた。このクラスには云々氣のある変態が何人いるのだろうと本気で頭を抱える。もつとも頭がいたいのは、先ほど千冬にやられたアイアンクローが原因だが。

「で？挨拶も満足に出来んのか、お前は」

やつと女子達は落ち着きを取り戻し、千冬が一夏に手厳しい言葉を投げかけた。

「いや、千冬姉、俺は……」

再び出席簿が振り下ろされる。一夏は同じ轍は踏まない。今度は避

けた。

「甘いー。」

「なつ……」

一夏の避けた方向に、回り込むようにして出席簿が迫る。

この技を、この剣技を一夏は知っていた。あの宮本武蔵と並び称され、日本人なら誰もが知っている剣士、佐々木小次郎が得意とした必殺の剣技、燕返し。

避けることなど叶わず、一夏の顔面に出席簿が叩き込まれた。

「織斑先生と呼べ」

「ふあー……おりむりや くんへい（織斑先生）」

鼻を押さえ、一夏は痛そうに呻つ。そのやり取りが原因で、どうにもばれたらしい。

「え……？ 織斑君つて、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ。世界で唯一男手EISが使えるつていつのも、それが関係して……」

「ああっ、いいなあっ。代わつて欲しいなあっ」

さて、今更だがどうして一夏がここ、『EIS学園』にいるのか？ それは一夏が世界で唯一EISを使える男として認知されてしまったからだ。

あれはそう、今年の一月、受験シーズン真っ只中の時。その時はま

だ、I.S学園に通うなんてことは決まっていなかつた。

学費が安く、就職率も高い私立藍越学園を受けようと思つていた。なのに試験会場で迷つてしまい、何の因果かI.S学園の試験場所に到着。そこでI.Sを起動してしまい、世界で唯一I.Sを動かせる男としてここ、I.Sの操縦者育成を目的としたI.S学園に入学をせらりてしまつたのだ。

そのことを梁山泊の者達に話したら爆笑された。ドジだの間抜けだの言われ、存分に馬鹿にされた。

そんなこんなで一夏は現在、ここにいるわけなのだが、……まさか姉である千冬がI.S学園で教師をしているとは知らなかつた。おそらく隼人辺りは知つていたのだろうが、もしそうだつたら別に教えてくれてもいいのこと内心でぼやく。

「さあ。SHRは終わりだ。諸君らにはこれからI.Sの基礎知識を半月で覚えてもらつ。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ。」

なんだかんだで自己紹介も終わり、チャイムがSHRの終わりを告げる。

千冬の暴君のような発言に呆れつつ、一夏は小さなため息を吐いた。

+++

「これは辛い……」

「大丈夫ですか？ 一夏さん」

「セシリアが普通に接してくれるのが唯一の救いだ……」

「まあ」

「一、一時間目の授業が終わり、現在は休み時間。今日が入学式初日だと言うのに、IIS学園では普通に授業が行われていた。短縮とか、毎までなんて甘くはない。学内の案内などもなく、自分で地図を見ると投げやりな状況だった。その分みつちりと授業が行われるので、一夏からすれば溜まつたものではない。

「専門用語ばっかりで、まったくわからんねーよ！ なにあれ、呪文！？」

「入学前に必読の参考書が届けられているのですが……まさかそれを捨てたとは思いませんでしたわ」

「はつはつは、酢豚」ぼしてばっちくなつたから古い電話帳と間違えて捨てた」

「威張ることじやありませんわよ」

セシリ亞の呆れた視線が一夏に突き刺さる。だがそんなもの、今の一夏からすれば些細なものだ。

なぜなら常に、一夏には熱烈な視線が向けられていたからだ。動物園のパンダなんかはこんな感じなのだろう。

世界で唯一IIS使える男と言つのが珍しく、このクラスの者だけではなく、他のクラスの者、一、二年生先輩などが詰め掛けている。そんな中、一夏曰くファースト幼馴染の第が物凄い視線で睨んでいる気がするが、気のせいだと思ったかった。

「一夏さん、の方に睨まれているようですが、何かしたんですの？」

「気のせいだと思ったかったのに……やっぱりあれか？ 僕って篠に嫌われてるのか？」

思いたかったが、篠の視線に気づいたセシリアがそうはさせてくれなかつた。

現実逃避すら許されない現状に、一夏は心身ともに参つてしまつ。この状況を打破するためには、一刻も早く授業を再開して欲しかつた。

そうすれば少なくとも、教室の外から視線を向ける他クラスの者、先輩方の視線から開放されるからだ。

そう思つていると、一夏の希望通りに休み時間の終わりを告げるチャイムが鳴つた。

「では一夏さん、また次の休み時間に」

「ああ」

セシリアは自分の席に戻り、廊下にいた者達も自分のクラスに戻つていく。

未だにクラス内の者からは視線を感じるもののだいぶマシになり、一夏はやつと一息ついた。

「それでは、この時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

一、二時間目は山田先生が教壇に立つていたのだが、今は一夏の姉、千冬が教壇に立つていた。

「ああ、その前に再来週行われるクラス代表戦に出る代表者を決めるといけない」

「ふと、千冬が思い出したように言つ。だが、一夏にはそれが何のことなのかまったく理解できなかつた。

「クラス代表者はそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点ではたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間は変更がないからそのつもりで」

千冬の説明だとそういうことらしい。もつとも、男と言うだけでこの学園に入れられ、知識に乏しい一夏にはまったく関係のないことだが。

そんな彼にクラス長が勤まるわけがない。クラス長になつた者はたぶん、面倒な仕事を押し付けられるのだろうと他人事のように考えていると……

「はいっ。織斑君を推薦します！」

そんな意見が上がつた。

（え、なに？ このクラスには織斑つてもう一人いるのか？ そいつは奇遇だな）

「私もそれが良いと思いますー」

（おう、俺も俺以外がなるのなら誰でも……）

「では、候補者は織斑一夏……他にないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

（ほうほつ、織斑一夏つてこのクラスにはもう一人……つてそんなわけあるかー）

一夏は勢いよく立ち上がる。自分で自分を指差し、素つ頬狂な声を上げた。

「お、俺！？」

向けられる視線の一斉射撃。あまりにも無責任な期待の込められた眼差しが一夏に集中し、一夏は慌てふためいた。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？ いないなら無投票当選だぞ」

「ちよ、ちよっと待つたー。俺はそんなものやらな……」

「自薦他薦は問わないと言つた。他薦された者に投票権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

「ぐつ……じや、じやあ、俺はセシリ亞を推薦します！」

千冬は一夏に反論を許さなかつた。ならば一夏は、セシリ亞を推薦してクラス長を押し付けることにした。

「流石一夏さん、よくわかつてますわね」

得意げにセシリ亞が言つ。『うつたことは嫌いではなく、彼女も満更ではなさそうだった。

一夏はもう一押しすることにした。

「セシリ亞はイギリス代表候補生ですし、俺なんかよつよつほど適任だと思います」

「ふむ、やうか。ならまあ多数決を取るとしよう。セシリ亞・オルコットが良いと思つ者へ。」

「はいっ。」

千冬の言葉に一夏は、勢いよく手を上げて返事をする。だが、それだけだった。結果は一人。

「…………」「…………」

一夏とセシリ亞の表情が引き攣る。

「もはややるまでもないが、織斑一夏が良いと思つ者へ。」

一斉に女子達の手が上がった。

「決定だな」

「なんでだよー!?」

「うるさい。静かにしや」

「あがつ」

圧倒的多数。その結果に思わず絶叫を上げる一夏。

そんな彼に千冬の出席簿が叩き込まれ、パンと乾いた音が教室内に響き渡った。

+++

「まあ、前向きに考えよう。IS学園に入学して散々な目にあったけど、良いこともあった」

放課後。クラス長を務める羽田になり、肩を落とす一夏。セシリアはショックだつたのか落ち込んでおり、元気がなかつた。彼女はプライドが高いので、ああも極端に差をつけられてしまつては仕方がないだろう。

「それは梁山泊（修行）から開放されたことだ！ イエイエイ！ あそこは人権がないからな、マジで……」

それよりも今、一夏の気分は有頂天だった。IS学園は全寮制。それは男である一夏も例外ではない。

それは梁山泊の非人道的な修行から解放されることを意味しており、一夏の足が浮き足立つても仕方のないことだった。

一夏の正式な師はしぐれただ一人。が、面白そうという理由で秋雨に基礎体力作り、そして柔術を仕込まれている。馬には内攻を鍛えられ、時には中国拳法を仕込まれていた。

その修行方法が問題であり、しぐれには主に恐怖を植えつけられる。秋雨はさまざまなトレーニング機材を作り出し、その実験台に一夏を使用する。馬は怪しげな漢方を一夏に飲ませたり。前に間違つ

て秘伝の精力剤を飲まされた時は大変な目に遭つた。

逆鬼は弟子を取らない主義らしいので指導を受けたことはなく、それでも時折羨ましそうな視線で見られてことがある。アパチャイはムエタイを教えようと躍起になつていてが、一度一夏が死に掛け、それ以来しぐれが一夏に教えるのを許可しなかつた。

現在、アパチャイはてつかめんの練習中だとか。その前にまず、『手加減』と言う日本語を覚えて欲しいと思う。

なんにせよ、あのまま梁山泊にいればいつか命を失つていた。洒落や冗談ではなく、割と本気で。故にそれから開放される寮という存在は一夏にとつてとても魅力的だつた。

当初は急な話で一夏の部屋はまだ決まっておらず、一週間ほどは梁山泊からの通いとなつていたはずだが、副担任の山田先生の話では事情が事情なので部屋割りを無理やり変更したのだとか。政府のお達しとのことだ。

いきなりのことだったが梁山泊から解放されることが嬉しく、深く考えずに部屋へと向かう一夏。その手には山田先生から受け取つたルームキーを握つている。

そんなお氣楽思考の一夏に、背後から声がかけられた。

「織斑」

「千ふ……織斑先生、なんですか？」

声をかけてきた人物は千冬だ。千冬姉と呼ぼうとし、再び出席簿が振り上げられたので慌てて呼び直す。

下ろされた出席簿を見て、一夏はほつと一息をついた。

「いや、なに。お前の荷物のことだ。着替えと携帯電話の充電器は私が用意してやつたが、秋雨さんからお前宛に荷物が届いていてな。職員室に置いてあるから取りに来い」

「秋雨さんか、ひ……？」

話を聽き、嫌な予感しかしない。あの秋雨から、一体どんな荷物が届けられたといつのだらう。

「それから、お前が工芸学園に在籍している間は私がお前の修行を監視することになった。これまた秋雨さんから修行メニューをもらつてこい」

「ええつーー？」

「サボると思つたか、愚か者め。それと休日には梁山泊に顔を出すよつことのことだ。良かつたな、織斑」

梁山泊からは逃げられない。一夏ひとつて、秋雨は魔王のよつて思えた。

案外、的を射ているかもしれない……

「あ、荷物……つて、千冬姉それだけしか持つてきてな……いたつ

「織斑先生だ。つたく、いい加減慣れる。荷物はそれだけあれば十分だらう」「

結局、出席簿はまたも振り下ろされてしまった。

頭を押さえむ一夏は恨めしそうに千冬を見つめ、自分の言つたいことを言ひ。

「いやいや、男にはそれ以外にも必要なものがありまして……その、なんといつか……」

「お前の部屋にあつた工口本なら」の際に全部捨てたぞ」

1 ZOOOOO...-1

一夏は魂からの叫びを上げる。血涙を流す勢いで、心の底から叫んだ。

「馬さんの影響か？ あの人影響を受けると碌な大人にならないぞ。しかも中国人の貧乳ものとは趣味が悪い」

「俺の勝手だよね？」
つてか見たの、見たんだな千冬姉え！？」

「弟のことを把握するのは姉の責務だ」

「そんなことは把握しないでいいから、マジで……」

場所も構わず、一夏は床に四つんばいになつて落ち込む。馬経由で集めたお宝、それを処分されて相当ショックだったのだろう。

「じゃあ写真はー!? 俺の部屋にあつた中学の時の写真!」

それと同じくらい、いや、それ以上に大切なものを思ひ出して一夏
は叫ぶ。

梁山泊の一夏の部屋に飾つてあつた大切な写真のことだ。

「ああ、あれか？ あれも捨てた」

「千冬、姉ええ！！」

その言葉に流石の一夏も激怒する。姉とこうじとすら関係なく、胸倉をつかみかかるんほどの勢いだ。

「まあ、それは流石に冗談だがな」

もつともそれは冗談であり、千冬はあっさりとその写真を取り出した。

写真立てに入れられ、大事に保管されていた一枚の写真。それを目の前に差し出され、一夏は落ち着きを取り戻す。

「心臓に悪いよ……」

「すまんな、ちょっとからかい過ぎた」

冗談だったが、そんなことを言つ千冬も珍しい。写真を受け取つた一夏は大事にそれを仕舞つた。

「ここでは先生だが、やはり姉としては焼けるものだ。そんなにその写真に写つている幼馴染が大事か?」

「関係ないじゃん……」

「まあ、それはそうだがな」

千冬は小さく笑い、意地の悪そうな表情で一夏を見ていた。

「ただ、条件がある。お前の嫁になる者は私を倒すことが条件だ」

「ちょ、それなんて無理ゲーなんだよー。俺の嫁になる奴大変だな

……

「せうだな。さて、私は会議があるのでこれで失礼する。荷物はちゃんと取りに来い」

「あ、ああ……」

一夏の突っ込みをせりと受け流し、千冬は会議へと向かう。取り残された一夏は、荷物を受け取るために職員室へと向かつた。

「い、これは……」

そして現在、その荷物を持つて今度こそ部屋へと向かう。だが、その前に、届いた荷物についていろいろと突っ込みたかった。

「秋雨さん、こんな感性してんだよ……まさかエス学園で『これ』を見る破目になるとは思わなかつたぞ。つてか、これを部屋に運ぶつて……夜に動き出しそうで怖いな」

秋雨から届けられ、一夏が運んでいる荷物。それは『投げられ地蔵グレー』。

両手を突き出し、胴着を着たお地蔵さんであり、投げ技の練習、筋トレに大いに役立つ万能の地蔵だつた。

だが、それを運ぶ一夏の姿は異質だつた。寮内で地蔵を運ぶ姿はシユールなんてものではなく、ドン引きするレベルのものだ。

秋雨はこの投げられ地蔵を用いて修行しろとのことらしいが、正直あまりこれを使う気にはなれない。なんというか恥ずかしい。

捨てたり、置き去りにしたい気持ちは山々だったが、もしそんなことをすればどんな制裁を受けるのかわかつたものじやない。一夏は

いろいろと詰め、投げられ地蔵を部屋へと運ぶことにした。

「エリが俺の部屋か……」

やつと着いたのが1025室と書かれた部屋の前。

部屋番号を確認した一夏はキーを差し込むが、最初から開いてる！
とに気がついた。

「無用心な……」

部屋に入り、内装を眺める。まず目に入つたのが大きめのベッド一
つ。

高級そうな家具がそろつており、下手なホテルなんかより上だった。
流石はエリ学園といったところか。

「つおつ、柔らかえ」

荷物を置き、投げられ地蔵を立て、千冬から受け取った写真立てを
机の上に置いた一夏はベットにダイブする。

ふわふわ、もふもふした最高級の肌触り。これはきっと高価な羽毛
布団なのだろう。

「誰かいるのが？」

その柔らかさを堪能していると、突然奥の方から声が聞こえてきた。
シャワー室の方からだ。

全室にシャワーがあるとのことだったの、後から使おうと思つて
いた矢先のことだ。

「ん？」

そして、一夏は異変に気づく。既に人がいる？もしかして同室？となると、ここはHS学園だ。すると生徒は女子しかいないわけだ……

「ああ、同室になつた者か。これから一年よろしく頼むぞ」

一夏の予想は当たつた。シャワー室から出てきたのは、一人の女子。

「こんな格好ですまないな。シャワーを使つていた。私は篠ノ之……」

「篠……？」

「い、い、いちか……？」

その人物はファースト幼馴染の篠。シャワーを浴びていたために肌と髪が濡れており、バスタオル一枚で姿を現す。

止まる時間。無音の世界。一夏のHS学園初日は、波乱の幕開けだった。

BATTLE 6 ファースト幼馴染

六年ぶりに再会し、いつやつて面と向かい合つた幼馴染。だが、タイミングがあまりにも悪かつた。

誰がシャワーを浴びていたと思うだろつか？　いや、そもそも、いくら幼馴染とはいえ女子と同室なんて思にもしなかった。一夏は呆け、ベットに座つたまま固まつていた。

篠は壁に立てかけてあつた木刀を取り、一夏に殴りかかつてくる。基本的に忠実な鋭い一撃だ。

「どわあつー？」

呆然とした状態から復活した一夏が、悲鳴染みた声を上げると同時に木刀を受け止める。千冬の出席簿をも受け止めた真剣白羽取りだ。ギリギリと鬪き合つ、息がかかるくらいに近い距離で向かい合つ一夏と篠。

篠は羞恥と怒りに染まつた真つ赤な表情で、一夏に問い合わせてきた。

「なぜ、お前がここにいるーーー？」

「いや、俺もこの部屋なんだけど……」

「はあー？」

一夏の返答に篠が意味がわからないという顔をした。一夏もまつたく同じ心境だった。

「お前が、私の同居人だといふのか？」

「お、おひ。やうじこわ」

「じ、じうじうせうだ

「へ？」

「じうじうもうだと聞いてるわー。男七歳にして同衾せず！
常識だー！」

一夏はいつの時代の常識だと思った。だが、確かに15歳の男女が同じ部屋で生活するのは問題があると思う。
美羽や一時に一緒に暮らしていたセシリアとは事情が違つ。梁山泊とう道場で暮らしており、そもそも部屋が違つていた。

「お、お、お……」

「お？」

筈が意味を成さない言葉を発し、木刀を握る力が緩んだ気がした。
そのことに呆つとし、一夏も若干だが力を抜く。

「お前から、希望したのか……？ 私の部屋にしうと……」

「そんな馬鹿な」

が、次の瞬間には一気に筈の力が増した。先ほどよりも強い力。一夏は思わず木刀を手放してしまいそうになつた。
どうにも返答を間違つてしまつたらしく。

「お、落ち着け、筈！」

「馬鹿……馬鹿だと？ そうかそうか……」

怖かった。どれくらいかとこいつと、初めてじぐれに指導を受けた時
くらい怖かった。

鬼神の「ことく激昂した箒。だが、それよりも一夏は先ほどから気に
なっていたことを口にした。

「あの、箒さん……」

「……なんだ？」

「いや、そろそろ服を着ていただけとありがたいんですけど……」

「つー？」

箒はバスタオル一枚のままだった。その姿は男として田のやつぢに
ろに困る。

箒の体は最後に見た小学校4年生のころとは大違いで、凶悪なまで
に育つた二つの果実。それが激しい動きをしたためにぶるんぶるん
と揺れていた。

「み、見るなー。」

「は、はーつ」

やつとのことで木刀は手放され、一夏は慌てて後ろを向く。

箒はその間に急いで着替えをした。布の擦れる音が聴こえる。かす
かな音だが、一夏の鍛えられた感覚、聴力は嫌でもその音を拾つて
しまう。

「 もう、いいぞ…… 」

「 お、おひ 」

着替えが終わり、篠が声をかけた。一夏が振り向くと、そこに剣道着を身にまとった篠がいた。

傍にあり、すぐに着られる服がこれだったのだ。大急ぎで着たためか帯の締め方が甘かった。

「 わ、悪かったな、篠 」

「 いや、ひかりも少し感情的になつすぐた。すまない、一夏 」

まずは互い非を認め謝罪をする。着替えとこのワンアクションを挟み、冷静になつたのだろう。

冷えた頭で言葉を交えた後、篠から話題を振ってきた。

「 本当に久しぶりだな、一夏 」

「 ああ、六年ぶりだよな。教室で話しかけたかつたんだけど、状況が状況だつたし 」

「 災難だつたな……といひで一夏、ひとつこにか？ 」

「 ああ、なんだ？ 」

篠は一夏の私物を指差し、引き攣らせた表情で問いかける。

「 アレは……なんだ？ 」

「ああ、アレか？」

「ああ、アレだ」

篠が指差しているのは投げられ地蔵。部屋にあんな異物が運び込まれれば不審に思うのも当然だろ？

その辺のことは一夏も十分に承知しており、頬を搔きながら困ったように呟く。

「投げられ地蔵グレートだ」

「な、投げられ地蔵ぐれーとお？」

「まあ、なんだ。トレーニング器具なのかな？ 投げ技の練習、筋トレなんかに便利な秋雨さんの自信作だ」

「秋雨とは誰だ。いや、待て。その前に投げ技つて……一夏、お前剣道はどうじした？」

「えっ、こや、剣道ならだいぶ前にやめたけど

「やめただとー？」

激昂したように篠が怒鳴る。思わず怯んでしまつ一夏だったが、何とか取り繕つて篠を宥める。

「だから落ち着けつて。剣道はやめたけど、その後は剣術をやってたんだよ」

「剣術？」

「ああ、香坂流つて剣術をな」

「『『い』ひとか』流……聞かないな。で、まさかその『い』ひとか流とい
う剣術には投げ技があるというのか？」

「いや、投げ技に関しては柔術だ」

「柔術？」

「ああ、他にも拳法を少々……」

「つまりお前は、そんな軟弱な気持ちで、片手間で武術をやつてい
ると？」

宥めたはずが笄の怒氣が増した気がした。だが、片手間といわれた
ことに一夏も少なからず怒りを感じる。

「片手間？ とんでもない！ そんな覚悟であんなことできるか

「い、一夏？」

「俺は、最初は剣術だけのつもりだった。いや、その剣術も最初は
無理やりやらされたんだけどそれは別にいい、もう諦めた。なら剣
術を極めようと思ったわけだが、どういうわけかある日突然、柔術
と拳法を叩き込まれる羽目になつたんだ。笄、お前は死に掛けたこ
とがあるか？ 走馬灯を見たことはあるか？ 俺はあるぞ。何度も
死に掛けたし、何度も走馬灯を見た。や、やめつ……しぐれさん、
真剣での練習は洒落にならな……秋雨さん、なんですかそのからく

りは！？ 馬さん、それなに？ その怪しげな薬はなにイイー！
あ、アパ、アパチャイー！？ いや、俺はムエタイはやらな……ひい
いいいいいいいつー！

一夏は自分の主張をするが、それが後半になると体を震わせ、青白い表情で悲鳴を上げていた。

幼馴染の豹変に篠は動搖した。彼女は触れてしまつたのだ、一夏のトライアに。

い
死にかゝり死にかゝり死にかゝり死にかゝり死にかゝり死にか

「い、一夏、私が悪かつた。大丈夫、大丈夫だから落ち着け。なあ」

「はつ……俺は一体なにを?」

「覚えていないのか？ いや、それならいい。なにがあつたのかはわからないが、辛いことなら忘れてしまえ」

正気に戻った一夏に、筈は哀れみの視線を向けた。六年会わなかつた幼馴染に一体なにが起こつたのだろう？

気になるか
それがあえて聞かなし
その方が一夏のためな気が
したからだ。

「あ、そうそう、六年ぶりだつて話だつたよな。久しぶりだけど、
算つてすぐわかつたぞ」

先ほどの会話をなかつたことにし、一夏が口を開く。

「え……」

「まじり、髪型一緒に緒だし」

自分の頭を指差して一夏が言ひついで、簾は恥ずかしそうに自身のボーネールにした髪をいじりだした。

「よ、よくも覚えてこるものだな……」

「いや、忘れないだろ。幼馴染のことくひー

「…………」

ギロリと睨まれる。その理由が一夏にはわからない。まさか、自分は本当に簾に嫌われているのではないかと血口嫌悪に陥りつつ、何か話題を不老と必死に思考を巡らせた。

「そういえば、去年、剣道の全国大会で優勝したんだってな。おめでとう」

当たり障りのない話題を、簾を褒める言葉を選ぶ。だが、当の簾は何故か微妙そうな顔をしていた。

「なんでそんなことを知ってるんだ?」

「なんでって、新聞で見たし」

「な、なんで新聞なんか見てるんだっ

新聞くらい誰でも読むだろ?と一夏は思ひ。あまつとも理不尽、そして意味不明な言葉。

「これには筈も思つとこりがあつたのか、顔を赤くし、罰が悪そうと言つた。

「す、すまない。今のは忘れてくれ……」

「あ、ああ……」

「…………」

暫しの間、沈黙が流れる。一夏はそれに耐えられず、キヨロキヨロと視線をさせさせた。

窓の外、壁、天井、机といった順。机の上には先ほど置いた写真立てが置いてあり、無意識のうちにその写真を眺めていた。

「一夏。その写真は……」

「ん?」

すると、沈黙を破つて筈が口を開いた。一夏が眺めていたもの、写真を見て不安そうな声で問い合わせてくる。

その意図がまったく理解できていない一夏は、平然と筈の問いに答えた。

「ああ、これが? 中学の時の写真だ」

その写真に写つていた一夏は、地元の中学校の制服を着ていた。

「いや、それはわかるが……私が言いたいのはその隣に写つてある

女についてだ

「ん、ああ、鈴の」とか

「りん？」

その隣には、これまた中学校の制服に身を通した少女が写っている。ツインテールがトレードマークのとても可愛らしい少女だった。そんな少女がツーショットで一夏と共に写っている。篠が興味を抱いたのはそのことについてだ。

「ああ、篠が引っ越していくのが小四の終わりだつただろ？ そのあと、小五の頭に転校してきて仲良くなつたんだ。つまり幼馴染だな。篠がファーストで、鈴がサード幼馴染」

「ファースト、サード……？ 待て、セカンドはどうした？ 間が抜けてるぞ」

「セカンド幼馴染は美羽。俺がお世話になつてる道場主のお孫さんだ。歳も近いし、機会があれば紹介するよ」

「みつ……女か、また女なのかー？」

「美羽って名前が男のものに思えるのか？」

「わつにわつ」と言つてゐるんじゃない！ 一夏はまったく……

一夏には、篠がなにを怒つているのかまったく理解できていない。何故、機嫌が悪そうなのか、ぶつぶつぶやいているのかわからな
い。

不服そうな顔で、簾は思ひ出したよひと言ひ。

「そひいえば、教室でも親しそうに話していた女子がいたな。あれは誰だ？」

「セシリアのことか？ 自己紹介を聞いていなかつたのか？」

「そひいことじやない！」

「なんなんだよ……セシリアは一年前くらいに前に、イギリスに行つた時に知り合つた。その後なんだかんだあつて、一月ほど一緒に暮らした」

「一緒に暮らしたあ！？ 一夏、そこに直れ！ その腐りきつた根性、私が叩き直してやる！－！」

「なんでだよ！？」

正直に答えたのに、あまりにも理不尽な仕打ち。あくまで一夏の主観だったが。

簾は再び木刀を手に持ち、一夏に襲い掛かつた。一夏も負けじと、再び真剣白羽取りを決める。

入学初日の夜は、このように騒がしく更けていった。

「ふん！」

+++

まだほとんどの者が眠っている夜明け前、早朝の四時。一夏は日課となつた修行、トレーニングを始める。

短い呼氣。それと共に振り回される投げられ地蔵。使用する地蔵は三体。

一体の頭の上に片足立ちで立ち、バランス感覚を鍛える。その状態で左右の手には一本ずつの投げられ地蔵が握られており、それを振り回すことによって腕力を鍛えていた。

等身大の地蔵を片手で持ち上げる。一夏の筋力は常人のそれを遥かに凌駕するほどまでに鍛え上げられ、尚も進化を遂げていた。

「朝から精が出るな」

「千冬姉！」

「織斑先生だ。だが、まだ早朝で一人つきりだからそれでもいいだろ？」

そんな一夏の元に、千冬が顔を出す。ジャージを身にまとい、肩には一本の木刀が担がれていた。

「本当に遅くなつたな、一夏。まさかそれを振り回せるようになるとは思わなかつたぞ」

「鍛えているからな。これくらい当然だ」

一夏は一旦投げられ地蔵を地面に置き、一体の頭の上から飛び降りる。千冬と向かい合い、はにかんだ表情で笑つた。

「で、それを持つてゐる事は久しぶりにやるのか？」

「ああ、弟の成長を直に体験しようと思つてな」

千冬も不適に笑う。一夏は千冬から木刀を受け取り、互いに構えを取りつて向かい合つた。

「千冬姉と手合わせなんて久しぶりだな。ほとんどしぐれさんとばつかりだつたし」

「ふつ、本氣で来いよ。しぐれさんほどではないとはいえ、私も達人級だ」

「ああ、いわれなくつたつて！」

宣言すると共に一夏の姿が消える。否、消えたとしか思えない速度で動いたのだ。

一瞬で千冬の背後、死角に回り込み最速で刺突を放つ。常人なら成す術がなく、一撃で絶命するほどの威力だった。

もつとも、相手が常人ならの話だが。

「ほう、縮地か。見事だ。だが、まだ無駄な動きが多いぞ」

一夏は背後を取り、死角から刺突を放つた。だが、千冬は反応して見せ、一夏の刺突を木刀で弾く。

刺突が失敗したと理解すると同時に、一夏は背後に後退した。すると今まで一夏がいた場所に千冬の斬撃が走る。

一、二、三の連続攻撃。一瞬のうちに三太刀も木刀が振るわれた。

「危ねえ……死ぬかと思った」

「よく避けたな」

冷や汗を流す一夏と、純粹に弟の成長を喜ぶ千冬。
今のは決まつたと思ったのだが、一夏は見事に回避して見せた。その動きに惜しみのない賞賛を送る。

「やっぱ強いな、千冬姉は」

「当然だ。まだまだお前に遅れを取るわけには行かないからな」

会話を交わしつつ、互いに接近する。ぶつかり合う木刀と木刀。そのまま打ち合いを始め、木々がぶつかり合つ音が周囲に響く。

「それにしてもここで教師をしてるなんて知らなかつたぜ。なんで教えてくれなかつたんだよ?」

「贏つ必要がなかつたからな」

「なんだよそれ……あ、そういうえば千冬姉は昨日はどうしたんだ?」

「私は一年の寮長をしているからな。寮長室に泊まりだ」

「なるほど、それでなかなか帰つてこなかつたのか」

打ち合い、受け止め、時には流し、避ける。一瞬のうちに行われる数々の攻防。

激しい戦闘が行われているはずなのに互いの表情は緩みきつている。まるで姉弟が戯れている様子、そのままの光景だった。

「本当に強くなつたな、一夏」

「千冬姉に言わると照れるな……」

「だが、そもそも終わりにしよう」

その光景も終わりを迎える。千冬が後退し、距離を取った。一夏はすかさず距離を詰めようとした。だが、できない。一夏は近づかず、千冬と同じように距離を取つた。

理由は特はない。ただ、接近したらまずいと思つたからだ。背筋が震える。全身の感覚が警告音を鳴らす。

見える、理解できる。千冬の制空圏。そしてその巨大さ。武術の第一段階の『緊湊』に到達した者は、自身を中心とする全方位に『制空圏』と呼ばれる球状の空間を展開し、その領域を侵犯した敵に対して条件反射で迎撃行動を取ることが可能となる。

有効範囲は体得者の実力によって個人差があるが、真後ろなどの死角からの攻撃や、複数の敵による多角的な攻撃にも半ば自動的に反応し、回避、反撃することができる。いわば自分の領域、武力による結界だ。

一夏もそれは可能ではあるが、千冬とはその練度が違う。こちらは射程外なのに対し、一夏が現在千冬の領域、制空圏内にいる。このままではまずいと判断し、領域からの脱出を図つた。が、それが成功することはない、千冬の手によって一夏の意識は闇へと沈んだ。

「第、これうまいな」

+++

「……」

千冬に伸された一夏は田を覚ますと、ずいぶんと時間が経っているのに気づいた。修行を切り上げ、朝の準備を終えてから朝食を取ることにする。

時間は八時。寮だから校舎とは五十メートルも離れていないが、少し急がないとやばい時間だった。

同じ部屋のよしみでとやらで篠が隣にいるわけだが、どうにも彼女は昨夜から機嫌が悪い。やはり、昨日のやり取りが多かれ少なかれ関係しているのだろう。

「篠、まだ怒っているのか?」

「怒っていない」

「けど……」

「だから、怒っていないと言つてこむ」

篠はそういうが、それを言葉のとおりに受け止めるとはできない。明らかに怒っているような反応だった。

怒っている人物の怒っていないと云う言葉ほど信用できないうものはない。

「ねえねえ、彼が噂の男子だつて~」

「なんでも千冬お姉様の弟らしいわよ

「えー、姉弟揃つてTTS操縦者か。やっぱり彼も強いのかな?」

それはそうと、今日も相変わらずだった。周りでは女子達が一定の

距離を取り、好奇の視線を向けてくる。

動物園のパンダにでもなつた気持ちで、そんなに男が珍しいのかと一夏が考えていると、唐突に声がかけられた。

「お、織斑君。隣いいかなつ？」

「へ？」

見ると、朝食のトレーを持った女子が三日、一夏の反応を待ちわびるよう立っていた。

「ああ、別にいいけど」

それに対し、一夏はあつさりと頷く。その様子を見ていた周囲からは妙なざわめきが上がった。

「ああ～つ。私も早く声かけておけばよかつた……」

「まだ、まだ一日目。大丈夫、まだ焦る段階じゃないわ」

もつとも、そんなことは一夏には直接関係ないが。今は田の前の朝食を片付けることに集中する。

「うわ、織斑君つて朝すつ〜〜食べるんだー」

「お、男の子だねつ」

「ん、まあ、これくらい食べないと体が持たないんだよ。体を結構動かすしさ」

食事は体の資本であり、特に朝食は大事だ。梁山泊の修行は厳しく、故に食事をしつかり取らないと体が持たない。

アパチャイほどではないにしろ、一夏はよく食べる方だった。

「ていうか、女子って朝それだけしか食べないで平気なのか？」

三人組の女子は、それぞれトレーのメニューこそ違うが、飲み物一杯にパン一枚、おかずが一皿と明らかに少なめだった。
一緒に暮らしていた美羽はしつかりと食事を取つていたため、それが一夏には信じられない。

「わ、私達は、ねえ？」

「う、うん。平氣かなつ？」

「お菓子よく食べるしー」

のほほんとした雰囲気の少女に一夏は眉をひそめる。間食はあまり体によくはない。

梁山泊では栄養管理もしつかりとなされていたために一夏はそういつたことに過敏だった。

「……一夏、私は先に行くぞ」

「ん？ ああ、また後でな」

そんなことを考えていると、食事を終えた筈はむさと行つてしまふ。

そういうえば、セシリ亞はどうしたのだろうと思つ。もつ食事を済ませたのだろうか？ 食堂では姿を見かけない。

「織斑君つて篠ノ之さんと仲がいいの？」

「ああ、まあ、幼馴染だし」

「えー？」

篇とのやり取りを見て疑問に思ったのか、三人組の一人が一夏に問い合わせる。

それに正直に答えたわけだが、驚かれ、周囲には動搖が走った。

「それと同じ部屋だな。同室だと知ったときは戸惑つたけど、全然知らない子となるよりはよかつたよ」

さらにざわめく周囲。今度は別の三人組の一人が、一夏に質問を投げかけようとしたところで……

「いつまで食べている！ 食事は迅速に効率よく取れ！ 遅刻したらグランド十週させるぞ！」

寮長である千冬の声が響いた。そのとたん、食堂にいた全員が慌てて食べ始める。一夏も残りをかき込んだ。

確かに、IIS学園のグランドは一周五キロはあつたはずだ。それを十週、つまりは五十キロ。遅刻してフルマラソンを越える距離を走らされてはたまたものじゃない。

（なんだ、遅刻してもたつた十週でいいのか）

もっとも、梁山泊で厳しい修行を受けた一夏にとつてそんなものはどうつてことなかつた。だが、自ら進んで罰を受けたいと言つわけ

ではない。

食事を終え、授業を受けるべく教室へと向かった。

「……ギブアップ」

「だ、大丈夫ですか。一夏さん」

入学一田の休み時間。ISUに関する知識が絶対的に不足している一夏は、授業後に机に突つ伏していた。それを心配し、声をかけてくるセシリア。

「大丈夫なのか俺？ こんなんで本当に大丈夫なのか？ クラス代表にもなっちまつたし……セシリア、今からでも代わってくれ！」

慣れないことで心身ともに参つており、その上クラス代表という立場まで背負わされてしまった。

不安でいっぱいの一夏はがばつと起き上がり、セシリアの手を取つて懇願するように言ひ。

「い、一夏さん！？ か、顔が近い、近いです！ そ、その……代わると言つのでしたらわたくしも代わつて差し上げたいのですが、織斑先生がそれをお許しになられるかどうか……」

「そりなんだよなあ……千冬姉がなあ……」

セシリアが顔を赤らめていたが、一夏にはその理由がわからず、あつさりとスルーする。

手を離し、肩を落として深いため息をついた。最強無敵の姉、千冬。一夏にとつて、彼女はいろんな意味で鬼門だった。

「ねえねえ、織斑君わあー！」

「はーはーー、質問しつもーんー！」

「今日のお題ヒマ? 放課後ヒマ? 夜ヒマ?」

一夏が思考にふけっていると、こつの間にか周囲にはクラスの半数を超える女子が集まっていた。

一日が経ったが、やはりそれでも男という存在が珍しいのだろう。昨日のどこか牽制し合ひ動きがなくなっていたことに、一夏は気づいていなかつた。

「いや、一度に聞かれても……」

「せうですか。一夏さんのが困つたりしゃるでしょ?」

一斉に来た質問に困惑つてこむと、セシリアが助け舟を出してくれた。

「もひ、セシリアだけ抜け駆けずるーつて

「なつ、別にわたくしこそんなつもはー……」

「ねえねえ、随分仲が良さそつなんだけひれ、ひよつとじて一人つて付き合つひんの?」

「つ、付き合つてー? い、いえ、そういうわけでは……」

だが、新たに向けられた質問に顔を紅くし、おおおりと狼狽していだ。ハツキリ言つて使い物にならない。

「そりだぜ、そんなわけねえじやん。俺とセシリアは付き合つや
いないよ」

あつさりと否定をする一夏。その隣では何故かセシリアが恨めしい表情で睨んでいたが、その原因を特定することが出来ない。わけがわからずに、一夏は首をかしげていた。

「ねえねえ、織斑君つてば」

その間も質問攻めは終わらない。次々に飛び交つてくる一夏への質問。

十五分の休み時間はそれだけで終わるつとしていた。

「千冬お姉様つて白毛ではどんな感じなの！？」

一際興味深く、見れば質問してきた当人以外もううんと頷いて一夏に詰め寄つてきた質問。

やはり、憧れの人物の私生活といつものは気になるのだろう。

「え。案外だらしな……」

正直に答えようとした一夏。その直後、パンと乾いた音が教室中に響いた。

「う、うおおおつ……」

頭を抑えて悶絶する一夏。彼が気配を感じ取ることが出来ずに接近を許し、頭部を出席簿で殴打した人物。言うまでもなく実姉、織斑千冬その人である。

「休み時間は終わりだ。散れ」

個人情報を漏らされそうになつたからか、千冬の機嫌はかなり悪そ
うだった。

日本最強、いや、世界最強である千冬お姉様とやらが、自宅ではど
れほどだらしない生活を送つていてのつかこのクラスの女子達は想像
も出来ないだろう。

部屋を片付けられない、料理が出来ない。ISの才能はあつても家
事の才能は皆無。そのために一夏は家事が得意となり、梁山泊では
美羽と共に家事を担当していた。

「ところで織斑、お前のISだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

またも思考にふけつてると、授業の準備をしていた千冬が思い出
したように言つてきた。

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそつ
だ」

「マジで！？」

その言葉に一夏は驚愕する。教室中からもざわめきの声が上がり、
さまざま意見が飛び交つ。

「せ、専用機！？」

「一年のこの次期に…？」

「つまりそれって、政府からの支援が出てるって事で……」

「ああ～。いいなあ……私も早く専用機欲しいなあ」

専用機といつのは、いわゆるヒリートの証。

ISの心臓部、コアを作るのは篠ノ之博士だけ。けど、その博士は現在コアの開発をしておらず、ISは全世界でたった467機しか存在しない。

そのために国家、企業、組織、機関では、それぞれに割り振られたコアを使用して研究、開発、訓練を行っている。

それとコアの取引は、アラスカ条約第七項によつて全ての状況下で禁止されているようだ。

「つまりそういうことだ。本来なら、IS専用機は国家、あるいは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データー収集を目的として専用機が用意されることになつた」

「なるほど……」

つまり実験体といふことだ。だが、専用機といふ話は素直に嬉しい。一夏の知り合いで専用機を所持しているのはイギリスの代表候補であるセシリ亞と、師であるしぐれの二人だ。

ちなみに篠ノ之博士といふ人物だが……

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……？」

女子の一人がおずおずと挙手し、質問をした。篠ノ之といふ苗字がそうあるはずもなく、いつかはばれることだろうと一夏は思う。篠ノ之博士こと篠ノ之束。ISをたつた一人で作成、完成させた稀

代の天才。千冬の同級生で、篠の実姉だ。

ちなみに一夏の初恋の相手でもある。現在は、軽く自己嫌悪に陥ってしまいそうなくらい後悔しているが、子供のころの自分はなにを考えていたんだろうと本気で後悔したものだ。

それでも束が美人で、可愛らしい女性だということは否定しない。顔だけはいいのだ、顔だけは。性格も子供のころの一夏とは馬がつたのだろう。だから好きになった。

もつとも、気の迷いと言つてしまえばそれまでだが……

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

いつかはばれることだらうと思った。だが、あまりにもあつさりと個人情報をばらす千冬。先ほど叩いたのはなんだっのかと問い合わせたいほどだ。

束は全世界が行方を探つている超重要人物だ。消息を絶ち、両親とも連絡を取つていないらしい。

もつとも、束は千冬と篠のことをとても大事にしていたので、この二人とはなんらかの方法で連絡を取つているかもしれないが。

「ええええーつ！ す、凄い！ このクラス有名人の身内が二人もいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？ やっぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だつたりするの！？ 今度IFSの操縦教えてよっ」

クラスは盛り上がり、授業中だというのに篠の元にわらわらと人が集まっていた。

そんな中、筠の声が響く。

「あの人は関係ない！」

冷たく、拒絶するような大声。クラスメイト達は冷水を浴びせられたように静かになり、困惑した様子で筠を見ていた。

「……大声を出しません。だが、私はあの人じやない。教えられるようなことはなにもない」

そう言って、筠は窓の外に顔を向けてしまった。それ以来口を開こうとは市内。束は筠のことを大事にしているようだったが、筠本人は姉のことをあまり快く思つてはいらないらしい。そのことが、一夏はどうしても気になつた。

「さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令」

「は、はいっ！」

クラス内の困惑を千冬が締め、授業が開始される。

山田先生も戸惑いを見せ、筠のことが気になつてゐる様子だったが、そこはプロの教師。すぐに気を取り直し、ちゃんと授業を進めていた。

（後で筠に話を聞いてみるか……）

そう決意して、一夏は教科書を開いた。

「簾、飯食いに行こうぜ」

「勝手に行け」

いきなりだが心が折れそつた。昼休み。一夏は簾を誘つて学食に行こうとした。それを拒否する簾。明らかに機嫌が悪そうだ。

「他に誰か一緒に行かない?」

「おい、一夏」

が、その程度では一夏も引き下がらない。

先ほどの一件でクラスでは妙に簾が浮いており、それをフォローするためクラスメイトを何人か誘つてみる。

「わたくしも参りますわ」

「はいはいはいっ！」

「行くよー。ちょっと待つてー」

「お弁当作つてきてるけど行きますー。」

セシリ亞を始めとして入れ食い状態だった。やはり、クラスメイト同士仲良くなきたいのだろう。

一夏はあくまでそう思つてこない。

「だから、わたしはいいと……」

「まあ、やう言つな。ほら、立て立て。行くぞ」

「お、おこつ。私は行かないと……う、腕を組むなつ……」

篠を誘う時は行動で、多少強引に誘えばいい。六年振りとはいえ一夏と篠は幼馴染だ。

故に、こんな時の対策は万全である。

「なんだよ、歩きたくないのか？ おんぶしてやるつか？」

「なつ……！」

ボツと顔を赤くする篠。一夏も悪乗りをしていた。

一夏と篠は共に高校生。だと言つのに小学生の時と回りぶつな接し方をしている。これが間違いだった。

「は、離せつ……！」

「学食に着いたらな」

「い、今離せ！ ええいつ！」

篠は一夏が絡ませていた腕を取り、肘を中心に曲げて投げる。宙に浮く一夏の体。そのまま床に叩きつけられようとする一夏だが、床でバランスを立て直し、見事に着地した。

「あぶねつ……こくらなんでも幼馴染を投げるな！」

「ふん……お前が悪い」

なんだよその理屈……でも、腕を上げたな、第

「……」
「こんなものは剣術のおまけだ。だが、一夏、お前も腕を上げたな

「もう少し、そこまで

梁山泊ではおまけ程度ではなく、正真正銘、本物の柔術の使い手から毎日のように投げられていた。その成果とでも言つべきだろう。

ええと

私達に甘いもの

遠慮しておくれ……」

だが、このやりとりは周囲の者を引かせるには十分だつたらしい。蜘蛛の子を散らすように退散していくクラスメイト達。残つたのはセシリアだけだつた。

「わたくし、それでは参りましねいか」

—ああ、
そうだな

こんな時、セシリ亞の存在はありがたかった。一月に満たないとは
いえ、あの梁山泊の者達と共に過ごしたのだ。

「こういう騒動の耐性は高く、何事もなかつたよつて一夏に笑顔を向ける。

一夏は再び箒の腕をつかみ、学食へと向かった。

「お、おいつ。いい加減に……」

「黙つてついて来い」

「む……」

有無を言わせずに一夏が箒を引っ張る。その後は特に抵抗をせず、黙つて着いてきた。

そんなこんなで学食。お昼時のこの時間はやはり込むが、なんとか3人分の席を確保することは可能だろつ。

「箒、なんでもいいよな。なんでも食つよなお前」

「ひ、人を犬猫のように言つた。私にも好みがある」

「ふーん。あ、日替わり三枚買つたからこれでいいよな。鯖の塩焼き定食だつてよ」

箒の言葉を流し、一夏は販売機から日替わり定食三人前の食券を購入する。

「わたくしもですか？」

「ああ、悪い。セシリ亞はピザの方が良かつたか？ この魔女め」

「何故にその選択ですか！？ いえ、別にピザは嫌いではあります

んけど。そもそも魔女ってなんですか？」

「共犯者だ」

「お前達はなんの話をしているー? 」 といつが一夏、私の話を聞いてゐるのか?」

「聞いてねえよ。俺がさっきまでどんだけ緩和に接してやつてると
思つてんだ馬鹿。台無しにしやがつて。お前、友達できなかつたら
どうすんだよ。高校生活暗いとつまんないだろ」

「わ、私は別に……頼んだ覚えはない！」

「俺も頼まれた覚えがねえよ。あ、おばちゃん。口替わり三つで。食券はここでいいですよね?」

右手だけで食券をカウンターに置き、一夏は食堂のおばちゃんに問い合わせた。

左手は未だに簾をつかんだまま、放せは逃げてしまふかもしかない。それはもう、ばぐれメタル並みに。逃げられないようにし、一夏は言葉を続けた。

「いいか？ 頼まれたからって俺は「んな」と、普通はしないぞ？ 篠だからしてるんだぞ」

「な、なんだそれは……」

「一夏さん！ 先ほどから聞いていれば篠ノ之さんばかり……不公平です。わたくしとも手をつないでください……！」

「なんだだよ？ ややこしくなるからセシコアは黙つていろ。」

「…………」

セシコアはむくれてしまつた。何故だろ？
それはさておき、一夏は篠に向き直る。

「えつと、どうまで話したつた？…………ああ、そうやつ。なんだも
なにもあるか。おばさん達に世話をなつたし、幼馴染で同門なん
だ。」『れぐり』のお節介はやらせり

ある事情により、両親が存在しない一夏。そんな時に世話になつた
のが篠の両親だった。

また、篠の父親は道場も開いており、幼少期の一夏はそこで剣道を
していた。今は香坂流をやつてるので元同門となるが、この際、
そんな細かいことはどうでもいいだろ？

「や、その…………ありが……」

篠は多少、いや、かなりひねくれてるとこがあるのかもしれない。
そんな彼女でも、一夏にこう言われてお礼を言おうとした。
だが、あまりにもそのタイミングが悪かった。

「はー、口替わりつつお待り」

「あつがとつ、おばちゃん。おお、つまとうだ」

「つまとうだよ、つまこんだよ」

「やうなんだ。篠、テーブルどうか空いてないか？」

「…………」

「 篠？」

出来上がった定食。それに反応した一夏は、篠の言葉を完璧に聞き逃していた。

重たい沈黙。そして益々不機嫌そうな表情を浮かべる篠。

「…………向こうが空いている」

一夏の手を払い、自分の分の田替わり定食を手にすたすたと歩き出していく。

背後ではセシリ亞の大きなため息が聞こえる。

「一夏ちゃん、それはあつませんわ。本当にあつませんわ」

「えつ、なに？ 僕やつやつたの？ 篠を怒りやつやつた？」

「ええ、それはもう盛大に。少し、篠ノ丸ちゃんが可愛らしくなりましたわ」

毎度のことながら、一夏はなんで篠が怒ってしまったのかわからない。

が、セシリ亞にそういわれると無性に罪悪感が込み上げてくる。気まずい雰囲気で一夏とセシリ亞も田替わり定食を手にして、篠のいる席へと向かった。

「その、篠……『めん』

「別に怒つてはいない」

「いや、怒つてゐるつて」

「怒つていないと云つてゐるだらう。」

席で謝罪するも、篠はまともに取り合つてはくれなかつた。怒つていないと云つてゐるが、その反応は明らかに怒つてゐる時のそれだ。いつまで経つても平行線、話が進まないだらうと判断し、セシリアがフォローを入れる。

「とりあえず落ち着いてくださいな。篠ノ之さんも一夏さんとの付き合いが長いなら、一夏さんの不治の病くらい把握してますでしょう?」

「おこ、なんだよ不治の病つて? 僕は至つて健康だぜ」

「確かにそうだな……些細なことで怒つた私が馬鹿だつた」

「今ので云つたのか? なに、俺つて何の病氣? いつの間にか病に蝕まれていたのか!?」

「纂とセシリアが同時にため息をついた。一夏の病氣はまさに不治の病。完治の見込みはないらしい。」

「それにしてもクラス代表どうするかな……クラス対抗戦にも出ないといけないんだろ?」

話題が変わる。言葉どおりの意味で、クラスごとの対抗試合だ。クラス代表を務めることになつた一夏が試合に出ることが確定し

ており、それに頭を悩ませていた。

「やういえば一夏、お前はISをまともに起動させた」とはあるのか?」

「一応な。IS学園への入学が決まった時、しぐれさんが剣術のついでにISの指導をしてくれた。基本動作はマスターしたぜ。もつとも射撃戦はてんて黙田だ」

「しぐれ……か。そういうえば昨日もその名を聞いたが、誰なんだ?」

「剣術の師匠。ISの操縦技術も抜群なんだぜ。もつとも知識や理論より感覚つてタイプだから、ISに関する知識はまったく学べなかつたけどな」

ISの操縦は大雑把に言つてしまえばイメージで行つらし。

IS操縦の基本中の基本、飛ぶという行為。そのために必要な急上昇と急降下は『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』をするそうだ。

もつともそんな論理的なことは一夏には理解できず、イメージするならば鳥。しぐれもISで飛行する時は燕を意識しており、急上昇、急降下、旋回などを難なくこなす。

動物などの動きを真似るのは武術の基本でもあった。中国拳法の象形拳うけいけんを始め、古来より人は強さを野性の中から取り込もうと試みてきた。

空手にも猫足という構えがあり、その他にも動物の名前を冠する構えが無数に存在する。一夏の場合にはまさにそれだった。

「それならばIS操縦の訓練はあまり必要ないかもしませんわね。専用機が届きましたら、とりあえず一次移行を済ませましょ。そ

うすれば一夏さんなら後は大丈夫ですわね?」

「専用機があればある程度自由に訓練も出来るだろ? し、実際に乗つて慣らすよ。問題はやつぱり知識だよな……」

「なら、わたくしを頼つてくださいな。わたくしはイギリスの代表候補、セシリア・オルコットでしてよ」

「マジで助かるよ、セシリア。ありがとな」

一夏はセシリアに感謝の言葉を向ける。それに対してもセシリアがはにかんだ。

それを面白くなさそうに見つめる篝。

「一夏。HSもいいが、一度お前の腕を見てみたい」

「は?」

「今日の放課後、剣道場に来い。確かめてやる」

一夏を強引に誘う篝。それに異議を唱えたのがセシリアだった。

「あら、HSを使用しない訓練なんて時間の無駄ですわよ」

「なにを言つか! 剣の道はすなわち見けんといつ言葉を知らぬのか? 見とは全ての基本において……」

「いや、セシリアは日本人じゃないし当然じゃないか? そもそも俺も知らなかつたぞ」

「お前は黙つてろー」

「一夏さん、放課後はわたくしと一緒に授業のおわりをしましょ」

わいわい、がやがやと騒ぐ筈とセシリ亞。

その中心である一夏当人は、ずずずと味噌汁を啜り、平然と答えた。

「でも、筈の言い分もわかる。なんだかんだで工房は人が使う兵器だ。身体能力や技術も大事だよな」

「一夏」

「一夏さん……」

筈の声が弾み、セシリ亞の声が沈んでいく。

一夏はそれにも気づかず、自分の考えを続けて口にいた。

「それに俺、近接格闘型だし。さつきも言つたけど射撃なんてできねえよ。殴るか蹴るか、投げるか斬るかだからな」

剣術、柔術、中国拳法。さまざまな武術をやつている一夏だが、射撃などは流石に専門外だった。

しぐれなら武器と兵器はなんだつて扱えるのだらつ。なんたつて剣と兵器の申し子だ。彼女に扱えない得物などこの世には存在しない。

「もちろん、セシリ亞にもちゃんとお願いするぜ。ただ、今日は筈の言つとおりに剣道場にだな。久しぶりに会つたし、筈の腕も上がつたみたいだからちょっと試してみたいんだ。同門だしな」

「一夏さんがそう言つのでしたら……」

セシリ亞は渋々と同意し、箸を器用に使って鯖の身をほぐしていた。
梁山泊での生活もあり、育ちも良いために箸の扱いは日本人顔負け
だ。

なんにせよ、これで今日の放課後の予定は決まった。

「よつと」

「なつ！？」

幹竹割り一閃。一夏の竹刀が上段から勢いよく振り下ろされ、それを簫が竹刀で防御する。

だが、そんなことなど意味を成さなかつた。一夏の振り下ろした竹刀は簫の竹刀を容易く両断した。まるで真剣で斬つたかのような切り口だ。

一夏の竹刀はそのまま簫の首筋に突きつけられ、ぴたりと動きを止めた。あまりにもあつさつとした幕引きだつた。

「俺の勝ちだな」

「ああ……参つた」

勝ちを宣言する一夏と、それを認める簫。時間帯は放課後、場所は剣道場での出来事。

一夏と簫は久しぶりに手合わせを行い、今、その決着がついたところだ。

「本当に腕を上げたんだな、一夏。まさか竹刀で竹刀を両断することは思わなかつたぞ」

一夏の腕前に、簫は感心したよつた眼差しを向けてくる。

それに悪い氣はせず、むしろ氣分が良さそつて一夏は言つた。

「まあ、これも修行の成果かな？ とは言つてもじぐれさんと比べたらまだまだなんだけさ」

「ほひ、といひことはそのじぐれとか言つ人も竹刀での程度のこどがでれるひと言ひとか？」

「ああ、それどひかしゃ もじで斬鉄すらするどんでもない人だ」

「ぞ、斬鉄？ しゃもじで！？」

「嘘だと思つだろ？ 「冗談だと思つだろ？ それが本当なんだよなあ。俺じやしゃ もじで竹刀を斬る」としかできないのに」

「待て、斬れるのか？ しゃもじなんかで竹刀を斬れるのか！？」

本当か嘘かは定かではないが、一夏が「冗談を言つてこないよには見えない。

筈は幼馴染が人間をやめたのではないかと本気で心配になつた。

「お疲れ様です、一夏さん」

「ありがとう、セシリア」

手合わせを終えた一夏に、セシリアがタオルとドリンクを差し出してくる。

手合わせは一夏の圧勝で、すぐに決着がつてしまつたので特に疲れてはいないが、セシリアの好意を無碍にするのも気が引けたので、一夏は素直に受け取ることにした。

「それにしても悔しいな……少しは差が埋まつたかと思ったが、逆

に開いていた」

ドリンクで喉を潤している一夏に、篠が寂しそうに言つ。小学生のころ剣道を共にやつていた一人だが、当時も一夏は篠を圧倒していた。

しぐれ達が言うには一夏には才能があるらしいが、当時は剣道が楽しかつたので毎日練習を欠かさなかつた。その成果もあつてかそれなりの腕を有していた。

それが今は、梁山泊の者達による拷問のような扱い。いやいやながらにそれを受け、今の一夏は並みの者では太刀打ちできない域にまで達していた。

「いや、筈も腕は上がつてるつて。流石は中学の全国大会優勝者。ただ、俺の場合な……この力を手に入れるにはいろいろと大切なものを失つたわけで」

一夏の体がガタガタと震える。目が虚ろになり、霸気が消えた。顔面が蒼白となり、昨夜と酷似した状態になつてしまつ。スイッチが入つてしまつたのだ。一夏のトラウマスイッチが〇〇となる。

「い、一夏！？」

「一夏さん、落ち着いてください。ここはIS学園ですわ。大丈夫、あの方達はここにはいらっしゃいませんから」

昨夜と同じように豹変する一夏。その姿はあまりにも不憫で、簞を心配させるには十分だった。

セシリ亞は実際に梁山泊の豪傑達を知っているため、親身になつて一夏に接してくれた。それがとてもありがたかつた。

「いめん、取り乱した」

「いや、大丈夫ならいいが……一夏、苦労しているんだな」

正気に戻った一夏に簞の優しい言葉がかけられる。それに対しても一夏は泣いた。目に涙を滲ませ、感激していた。

このように心配されるのはいつ以来だろう？ 梁山泊ではあの非人道的な修行が日常化しているためこんなことはあまりなかつた。美羽によるフォローはあつたが、彼女もまた浮世離れした人物。どこかで常識や見解が違つており、すれ違つことが多々あつた。別に美羽が嫌いなわけではない。梁山泊の者達のことを嫌つてゐるわけではない。だが、ここには梁山泊の者はいない。一夏に理不尽な修行を強要する者がいない。

それは梁山泊からの解放を意味しており、一夏は自由だということだ。IS学園への入学は戸惑いを生んだが、これから訪れるであろう明るい未来に一夏は内心でガツツポーズを取る。

そんな、一夏の儂い希望は……

「織斑、ここにいたか。そろそろ秋雨さんから預かつてゐる修行メニューを始めるぞ」

「…………」

いつの間にか剣道場の出入り口前に立っていた、実姉の千冬によつて粉々に打ち砕かれてしまつた。

一夏は千冬が昨夜言つていた言葉を思い出す。IS学園にいる間は自分が一夏の修行を監視すると、確かにそう言つていた。

「は、はは……あはは……」

一夏は壊れたように笑う。梁山泊の魔の手からは、いや、秋雨からは逃げられない。ならば諦めて運命を受け入れるか？

否、一夏は諦めることが大嫌いだった。

「戦略的撤退イイ！？」

「あ、消えた！？」

故に逃げる。そのあまりの逃走スピードに筆が消えたと勘違いするほどだつた。

それも当然だらう。一夏が使つたのは縮地。あらゆる武術でも最高峰の歩法であり、目に映らぬ速さで聞合いを詰めたり、移動することが出来る。

それを逃走するためだけに使うという、無駄遣いも甚だしい一夏の使用方法。千冬は呆れていたが、あそこまで完成した縮地を見て感心もしていた。

「早朝も見たが、鍛度はなかなかだな。だが甘い！」

千冬は剣道場に立て掛けた竹刀を手に取つた。それを、窓を開けて逃げようとしていた一夏に向けて投擲する。

出入口には千冬が立っているのだ。ならば窓から逃げるしかない。そんな一夏に矢の「ごとく迫る竹刀。

「くつーー？」

一夏は手の甲、裏拳の要領で竹刀を弾いた。力を失い、地に落ちる竹刀。それにはっと一安心する暇など一夏には存在しなかった。

「油断大敵だな」

「つーー？」

いつの間にか背後に回っていた千冬。おそらくは一夏が竹刀を弾き、僅かに油断した隙に背後に回っていたのだろう。

流石は達人級と言つたところか。一夏は千冬に後ろ襟首をつかまれ、見事に捕まってしまう。

「さあ、修行を始めるぞ」

「は、はは……幕、セシリ亞。俺が生きてたらまた明日会おう」

「い、一夏……」

「一夏さん……」

そのまま千冬にぎゅるぎゅると引っ張られ、引き攣つた笑みで剣道場を退室していく一夏。

ドナドナの音楽がとても似合いそうであり、売られしていく子牛を見るような目で、幕とセシリ亞は一夏を見送った。

一週間後。

「生きてるよ。俺……ちゃんと生きてるよ」

「大袈裟……とも言えないな」

「一夏さん、よくぞ」無事で」

なんだかんだで一夏は生きていた。それどころかこの一週間、千冬の扱きを見事耐え抜いた。

流石に一週間ほどで何かが劇的に変わるということはないが、修行の壮絶さは籌達も目撃している。

あれはもはや拷問だった。一步間違えれば殺人未遂。それを耐え抜き、一夏はここにいる。そのことに籌とセシリアはある種の感動を抱いていた。

「来たか。織斑、お前の工事が届いてるぞ」

一夏を追い詰めた張本人、千冬が何事もなかつたかのように一夏に言つ。

ここはビット内。一夏の専用機が届き、今日はそれのお披露日の日だった。

「名は白式だ。^{ひやくしき} お前の専用工事となる。大切にしろよ」

千冬の言葉と共にビット搬入口が開く。斜めに噛み合つタイプの防

壁扉は、重い駆動音を響かせながらゆづくつと開いていった。

「『』が……」

そして……『白』が現れる。

白。真っ白。飾り気のない、無の色。まぶしこぼの純白を纏ったIISが、その装甲を解放して操縦者を待っていた。

「綺麗……ですわね」

セシリ亞がポツリと感想を漏らす。その言葉に一夏も内心で同意した。

世界で唯一IISを動かせる男、織斑一夏のためだけに用意されたIIS。特別に感じるのは当然であり、戸惑いながらも一夏はIISに触れる。

「あれ……？」

その瞬間、異変を感じる。初めてIISに触れた時には電流のような感覚を感じた。これには、白式にはそれなく、ただ、馴染む。理解できる。これがなんなのか。何のためにあるのか……わかる。

「背中を預けるよつに、ああやつだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化をする」

千冬の言葉に従い、一夏はIISを装着していく。受け止められるような感覚。一夏を包み込むようにIISが纏わりつき、装甲が閉じた。かしゅつ、かしゅつ、と空気を抜くような音が響く。生まれた時から『』の一部だったような一体感。最初から自分のためだけに存在し

ていたように、一夏と白式が繋がる。

解像度を一気に上げたかのようなクリアな感覚が司令を中心広がって、全身に行き渡る。武術を嗜んでいる一夏はそれなりに感覚に自信があるが、通常時とは非にならないほどの違いを感じる。各種センサーが告げてくる値は、どれも普段から見ていくように理解できた。

「I.Sのハイパーセンサーは間違いなく動いているな。よし、一夏

白式が戦闘待機状態のI.Sの反応を捉える。気が付くと、そこにはいつの間にかI.Sを展開した千冬が存在していた。

打鉄。純国産として定評のある第一世代型I.S。安定した性能を誇るガード型で、初心者でも扱いやすい。そのことから多くの企業並び国家、I.S学園においても訓練機として一般的に使われていた。武者鎧のような形態をしており、どこかしぐれのI.Sを思わせる。基本武装も同様に刀型近接ブレードであり、千冬はそれを手にひとつ雄々しく佇んでいた。

「えつと……千冬姉？」

「織斑先生と呼べ。学習しろ。そもそも死ね」

厳しい言葉が一夏に投げかけられる。出席簿を持つていなかったので叩かれるということはなかつたが、視線だけで人が殺せそうなほどに鋭いものを向けられてしまった。

それに思わず身震いをし、一夏は千冬の言葉に耳を傾ける。

「フォーマットとファイットングはこれからやる実戦でものこじる

「え、ちょっと待って織斑先生。実戦つて、相手はもしかして……」

「何のために私がE.I.Sを装備していると想つへ、つまつたつこつこつ」とだ

「これから千冬と戦えといつゝと。いくら専用機があるとほこえ、あの千冬と戦えといつのだ。

時雨という例外が存在するが、それでも世界最強といつぬの肩書きを持つE.I.S操縦者、織斑千冬との戦闘。いくら専用機があり、千冬のE.I.Sが訓練機の打鉄とはいえ、その間には圧倒的な差が存在した。主に経験による差。勝てるわけがない。一夏は内心で即答する。

「ちふ……織斑先生が一夏と戦つんですか！？」

「世界最強の称号、ブリュンヒルデ。その力をいの田で……」

驚愕する幕と、どこかキラキラした瞳で千冬を見つめるセシリア。いへりセシリアでも、代表候補として千冬にはどいかと思つといつがいるらしい。千冬曰く一部の馬鹿ほどではなくとも、世界最強といつ存在に少なからず憧れは抱いていた。だが、そんな想いなどこれから戦つ一夏からすればまつたく関係がない。

「いや、織斑先生。流石にいきなり実戦とまつのは……」

「何事も体で覚えるのが一番だ。お前はこつもせつじてきただろうつ？」

「せつじつ問題じや……そもそも俺はE.I.Sの初心者で……」

「つねに、黙れ。男がぐちぐち言つな

千冬との実戦を回避しようとする一夏だったが、暴君のよつた理論に押し込められてしまつ。なんだかんだ言つても、千冬には梁山泊の豪傑達より頭の上がらない一夏だった。

「一夏……死ぬな」

箒の言葉が身に染みる。一週間受けた扱きの中で、もつともハードな訓練がこれから始まるつとしていた。

BATTLE 8 血戻（後書き）

セシリアが既に落ちてるんでクラス代表決定戦はカットです。でも、
その代わりに千冬と戦つといつ無理ゲー……

一夏、がんばれ。

さて、これでは少し短いのでおまけの方を。

おまけ

五反田食堂営業中

「弾、ちゃん！」を頼む

「ねえよ馬鹿」

「なぬう、ちゃん！」がないだと…？ ちゃん！」へりへりこ置いておけ

「無茶を言つな！」

地元では評判の五反田食堂。弾の友人である千秋祐馬」とトールが訪れ、注文をしていた。

「ならば仕方ない。業火野菜炒めだ」

「はいよ」

トールは五反田食堂鉄板メニュー、業火野菜炒めを注文する。それを弾が厨房に通し、五反田食堂の大将である五反田巖が厨房で鍋を振るい始めた。

八十を超えているとは思えない筋肉隆々の肉体。その豪腕は巨大な中華鍋を一度に二つ振るほどに鍛え上げられており、それから繰り出される拳骨は弾やその関係者達を震え上がらせるほどだ。

誰かが言つた。五反田食堂の大将は達人級ではないかと。もっとも根の葉もない噂ではあるのだが。

「ラララ～。お久しぶりですね、だん……」

「つるせえ、ガキが！」

「へふつ！？」

歌いながら五反田食堂の中に入ってきた人物、九弦院響」とジークフリート。またはジーク。

そんな彼に厨房からおたまが投げつけられ、顔面に直撃した。

「こきなりおたまが飛んでくるとは思いませんでしたよ。相変わら

ずのようですね、大将」

「だからなんでお前はそんなに元気なんだよ？ 他のガキどもはこれを喰らつたら大抵大人しくなるって言うのに」

「それは私が不死身の作曲家だからです！ ああ、曲が、曲が浮かんできましたよ。ラララ～」

「だからやかましいわ！ 歌うなーー！」

「あがつーー？」

厨房から出てきた巖に直接殴られ、ジークは歌うのをやめる。殴つた巖はすぐに厨房に戻り、調理を再開した。

殴られてばたりと床に倒れるジークだったが、すぐにむくりと起き上がる。

「スフオルツィアンド（特に強く）。相変わらずお歳を感じさせない、良い一撃です」

「だからなんでお前はそんなにピンピンしてるんだよ？ 一夏と同様に人間やめてないか？」

弾の言葉などジークには届かない。ジークは平然とトールと同じ席に座り、メニューを注文した。

「カボチャ煮定食をひとつお願ひします

「よりによつてそれかよ。ぶっちゃけるとそのメニュー、あまり人気ないぞ。いつも売れ残つてるしな」

「私は好きですね、深い味わいがあって、良い品です。そう、一曲作りたいほどに」

「だからって歌うなよ。また拳が飛んでくるぞ」

ジークは相変わらずマイペースだ。武術、作曲などに天才的な才能を持つているが、天才には変人が多いとも聞く。ジークの場合はまさにそれだった。

別に変人なのは構わないが、振り回される方からすればたまたものではないというのも事実。弾は呆れたようなため息をついた。

「それにしてもうちの食堂に、七拳豪のうち一人がいるなんて何の冗談だ？」

「その七拳豪に関しても、最近では八拳豪になるのではと噂されますよね」

七拳豪とは、武闘派不良集団ラグナレクの称号。コードネームとして北欧神話にまつわる神などが使われ、第五拳豪のジークと第七拳豪のトールはそこからきている。

これに近々、新たな拳豪が加わるのではないかと噂されていた。候補は一人。一人はテコンドー使いの南條キサラ。そしてもう一人と言つのが……

「なに、おぬしなら大丈夫だ。秘めたる力を見せてやれ」

「ねえよ、そんなもん。そもそも拳豪に興味ねえって」

五反田弾その人。ジークやトールと接しているうち、流されるま

まにラグナレク入りしてしまった彼だった。

二人の拳豪と仲が良いことから幹部として扱われ、また拳豪候補に上がるほどの実力を有していることから注目度も高い。

もつとも本人は友達づきあいの延長でラグナレクに入つたため、拳豪なんてものに興味はなかつた。

「やあ、やつてるかな？」

「ああ、いらっしゃ……つて、ええつー？」

だからと黙つて無関心だとか、無知だつてわけではない。拳豪に関してははある程度の知識を持ち、全員の顔を知つてゐる。それも当然だろう、彼らはラグナレクの中核なのだから。

だからこそそのトップが、第一拳豪のオーディーンこと朝宮龍斗あさみやりゅうとが五反田食堂を訪れたことが意外だつた。

「おや、オーディーンですか。こんなところで奇遇ですね」

「ジーフリートか。トールもいるね。なに、近くを通つたから話題の食堂に来てみただけだよ。ここのは火野菜炒めが絶品らしいからね」

「はい、美味しいですよ。じいちゃん、は火野菜炒めもう一丁追加

「おつよ」

五反田食堂は今日も大繁盛だつた。

「では、これよりEISの基本的な飛行操縦を実践してもいい。織斑、オルコット。ためしに飛んでみせん」

四月も下旬。遅咲きの桜も全て散ったこと、今日のEIS学園、一年一組の授業は実践訓練だった。

一夏とセシリ亞は専用機持ちであるため、千冬に言われて生徒達に手本を見せることになる。

「早くしろ。熟練したEIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

急かされ、一夏は右腕のガントレットに視線を向けた。EISはフィットテングしたら、操縦者の体にアクセサリーとして待機する。その形状が一夏はガントレットであり、セシリ亞は左耳のイヤーカフスだった。

（普通はアクセサリーだよな？ なのに何故、俺のはガントレットなんだ？）

一夏は考える。ガントレットはアクセサリーではなく防具だ。

千冬との地獄の戦闘でフィットテングさせ、体でEISの操縦を覚えたのは別にいいが、何故このような形状をしているのだろう？

そんなどうでもいいことを考えていると、千冬から活が飛んできた。

「集中しろ」

（やばつ、次は叩かれる）

出席簿での殴打を予想し、一夏はすぐさま I-S を展開させる。右腕を突き出し、ガントレットを左腕でつかむ。まだまだ I-S には慣れていらない一夏は、このポーズが一番集中でき、I-S を展開するイメージを浮かべるのに適していた。

（来い、白式）

右手から全身に薄い膜が広がっていく感覚を味わう。約 0・7 秒の展開時間。一夏の体からは光の粒子が解放されるように溢れて、そして再集結するように纏まり、I-S 本体として形成される。白式。フィットネスが終わっているため、この機体は完全に一夏専用のものへとなっていた。

初めて白式を展開させた形状とは異なる。工業的な凹凸は消え、滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的だ。中世の鎧を思わせるデザイン。

そして、何より驚いたのが I-S の武装。近接特化ブレード一本と言うあんまりな装備だったが、その装備が問題だった。

雪片一型

雪片。それは、かつて千冬が振るつていた専用 I-S 装備の名称。刀に型成した形名。

世界最強の証であり、雪片の前にはあのしぐれでも苦戦したと言う。そんな刀が自分のものとなり、嬉しくて一晩中振つていたことを思い出す。もつとも徹夜をしてしまったため、翌日の授業は地獄だったと苦い思い出もあった。あの口は居眠りをし、何度も千冬に出席簿に叩かれたことか。

「よし、飛べ」

一夏が再び思考に耽つていると、千冬の指示が飛んだ。

セシリ亞は既にブルー・ティアーズ、その如の通り青く、ワイン・アーマーを四枚背に従えた、王国騎士のような氣高さを感じさせるH.Uを展開しており、それですぐさま急上昇する。

遙か上空でセシリ亞が静止したのを確認し、一夏もそれに続いた。イメージは燕。燕が空を舞う姿を、しぐれがH.Uで飛ぶ姿を想像し、イメージする。空を切り裂くよつに舞い上がる白式。すぐさまセシリ亞と同じ高度に到達し、静止したところで通信回線から千冬の声が聞こえた。

「上出来だ。まだまだないものもあるが、少しばかりにも慣れてきたようだな」

「そりゃ、先生がいいですから」

急上昇、急下降を習つたのは昨日の授業でだ。だが、一夏はH.U学園入学前にしぐれから手解きを受けており、入学後も毎日のように千冬から指導を受けている。これで上達しなければ泣けてくるところだった。

「本当に素晴らしいですね、一夏さん。短い稼働時間でよくもやここまで」

「せつかも言つたけど、先生がいいんだよ。もつとも、何度逃げ出したいと思つたことか……」

一夏のつぶやきにセシリ亞は苦い笑みを浮かべる。あの修行を直に見た者だからこそ思える気持ちだ。

「それにしても不思議だよな。実際に飛んでて今更何言つてんだつ

て話だけど、なんで浮いてんだ、これ?」

話題を変え、一夏は疑問を口にした。一応白式には翼状の突起が背中に一対ある。が、だからと言つて飛行機と同じ原理で飛んでいるわけではない。だからと言つて鳥と同じ原理と言つわけでもなく、一夏のイメージする燕にしたつて飛行の軌道だけだ。
IISとは翼の向きに關係なく好きに飛べるらしく、一夏の頭では原理を理解することなど到底不可能だつた。

「説明しても構いませんが、長いですわよ？ 反重力力翼と流動波干涉の話になりますもの」

「わかった。説明はしてくれなくていい」

「そう、残念ですわ。ふふつ」

セシリアが説明をしてくれようとするが、それでも一夏は理解できないだろ? IISに関する知識、専門用語はまだまだ、圧倒的に不足しているからだ。

「IISの実践はともかく、知識はいまひとつですね。一夏さん、放課後にわたくしが講義してさしあげましょうか？」

「お願いできるか？ ありがとな、セシリア」

「いえいえ、そのくらしどうか」とあつませんわ。で、一夏さん。その時は一人つきで……」

「一夏っ！ いつまでそんなところにいる！ 早く降りて来い！」

セシリアとの会話中に、通信回線から怒鳴り声が響いてきた。

「発信源は地上。上空から見下ろすと筈が山田先生からインカムを奪つており、『立腹の様子で一夏達を睨んでいた。

その隣ではインカムを奪われた山田先生がおたおたしている。やはり、ISのハイパー・センサーによる補正は素晴らしい。現在、一百メートルの高度で飛んでいるのだが一人の睫毛が見えるほどだ。一夏がその気になれば何百メートル離れていようと望遠鏡要らずなのだが、流石に睫毛などは見えないだろう。もつとも、梁山泊の豪傑達なら睫毛どころか毛穴すら見かねない。目の良さは武術家にとつてとても重要な要素だった。

「ちなみに、これでも機能制限がかかっているんですよ。元々ISは宇宙空間での稼動を想定したもの。何万キロと離れた星の光で自分の位置を把握するためですから、この程度の距離は見えて当たり前ですわ」

「宇宙空間での稼動。そういうえば、山田先生が授業でそんなことを言つてたなと思い出す。

「今現在では兵器として使用されているISだが、元々はそのために作られたマルチフォーム・スーツなのだ。ならばこの性能も納得がいく。

「流石に梁山泊の豪傑達でも、何万キロという単位になると肉眼での確認は大変困難なことだろう。そう考えると、やはりISは凄いのだと再認識した。

「織斑、オルコギト、急下降と完全停止をやつて見せや。田標は地表から十センチだ」

「了解です。では一夏さん、お先に」

千冬からの通信に従い、すぐさまセシリアは地上へと向かった。ぐんぐんとその姿が小さくなっていく。危なげなく下降していく、地上すれすれで見事に停止して見せた。

「つまいもんだなあ」

その姿に一夏は感心する。流石は代表候補と言つたところか。次は一夏の番だ。

落ちるように下降する。重力に従い、落下していく。どんどん地上が近づいてきて、一夏は完全停止の体制に入った。

「よ」

またもイメージは鳥。今度は燕ではなくカワセミだった。

停止飛翔、ホバリングのイメージ。飛行原理は違うが、ISの操縦で一番大事なのはそのイメージだ。一夏のイメージどおりに白式の翼上の突起はバツサバツサと羽ばたき、地上十センチで見事に停止した。

だが、白式の羽ばたきにより風圧が発生し、土煙が舞い上がる。周囲にいたクラスメイト達はゴホゴホと咳き込み、千冬は出席簿で団扇のようにして土煙を払いながら、厳しい視線を一夏に向かた。

「停止は出来ているが織斑、その方法は即刻改善しろ」

「はい……」

この方法は迷惑過ぎる。一夏としてはこれがやりやすいのだが、そのたびに風圧や土煙が起るのは問題だ。もっと静かに、目立たずに完全停止する方法を模索する必要があるだろう。

「次だ。今度は武装を展開しろ」

「あ、はい」

千冬の新たな指示が飛び、そのまま授業は続行された。

+++

「ふうん、ここがそうなんだ」

夜。IS学園の正面ゲート前に、小柄な体に不釣合いなボストンバッグを持つ少女が立っていた。暖かな四月の夜風になびく髪は、左右それぞれを高い位置で結んである。所謂ツインテール。茶色がかった黒髪が美しく、金色の留め金がよく映えていた。

「えーと、受付けってどこにあるんだっけ

上着のポケットから一枚の紙切れを取り出す。くしゃくしゃになつたそれは、少女の大雑把な性格と活発さを非常によく表しているようだつた。

「本校舎一階総合受付け……って、だからそれがどこにあるのよ

うが一つと妙な叫びを上げる。だが、叫びを上げたところで返事を返してくれる者などいない。

少女は苛立ちと共に紙を上着のポケットに捻じ込むが、その時にま

た中でぐしゃつといふ音が聞こえた。だけど、そんな些細なことは気にしない。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ」

気にしている余裕がないのだ。ぶつぶつ言いつつも、その足取りが止まることは決してなかつた。思考よりも行動。つまり、少女はそういう性格だということだ。良く言えば実践主義。悪く言えばよく考えないだけ。

愚痴をつぶやきながらも、彼女は先へと進んでいく。

（誰かいないかな。生徒とか、先生とか、案内できそうな人）

あまりにも広い I.S 学園の敷地内を当てもなく歩き回り、キヨロキヨロと辺りを見渡す。

とはいって、現在の時刻は八時過ぎ。既にどの校舎も灯りが落ちておらず、生徒は普通なら寮にいる時間だ。そう都合よく、人影が見つかるわけがなかつた。

（あーもー、めんどくさいなー。空飛んで探そうかな……）

そう考えたが、電話帳三冊分にも匹敵する学園内重要規約書を思い出してやめる。

まだ転入の手続きが終わっていないのに、学園内で I.S を起動させたら事である。最悪、外交問題に発展するかもしれない。それだけは本当にやめてくれと、何回も懇願していた政府高官の情けない顔を思い出す。少しだけ気が晴れたような気がした。

（ふつふーん。まあねー、私は重要人物だもんねー。自重しないとねー）

自分の倍以上も歳がいつてる大人がヘコヘコと頭を下げる姿は、ハツキリ言って爽快だつた。

少女は昔から歳をとつてゐるだけで、偉そうにしてゐる大人が嫌いだつた。政治家や大学の教授なんて名乗つていても、無能な者はいくらでもいる。大事なのはその人自身の能力、実力だつた。また、子供のころは男つてだけで偉そうにし、女を見下したように接する子供が大嫌いだつた。

だから、少女にとつて今の世の中は居心地がよかつた。女尊男卑のこの世界。けど、何事にも例外は存在する。

(元気かな、一夏)

世界で唯一、ISを動かした男。少女の幼馴染であり、周りの男達とは大きな違いを持つていた。

そして、少女がこうやつてIS学園を訪れた最大の理由。会うのは一年ぶりになるはずだ。

(怪我は……いつものようにしてたわね。死んでないかな?)

洒落にならないことを思い浮かべる。一夏が居候してゐる道場。そこにはISすらものともしない達人達が住んでいた。まさに人外魔境そのものである。

そこでの生活はまさに命がけであり、一夏は様々なトラウマを抱えていた。毎日のようにボロボロとなり、壊れしていく一夏。

それを支え、癒しのような存在だつたのが少女だ。一夏は少女のことを気に入つていた。それに対し、少女も満更ではない様子だつた。記憶がよみがえつてくる。日本で暮らした日々。少女と一夏の思い

出。

(まつたぐ。一夏はあたしがいないと駄目なんだから)

少女は得意気に鼻を鳴らして笑つ。そんな時、声が聞こえた。

少女はその声の主に受け付けの場所を聞こつと歩み寄る。だが、唐突に今まで止めなかつた足が止まつてしまつた。

なぜなら交わされる会話、その一方の方を少女はよく知つていたからだ。

「バンドをやりたい」

「こきなり何を言つてゐるんだ、お前は」

「いや、俺の友人が私設・楽器を弾けるようになりたい同好会なんてものをやつてるんだけどどな、それに感化されたというか、ギターを弾きたいというか」

「勝手にしろ」

仲が良さうに会話をする一夏と、一人の少女。一夏は少女のこと

を名前で呼んでおり、とても親しそうだつた。

それが、少女には面白くない。

「籌もやらないか？ 歌つまいしや、ボーカルとベースで」

「ボーカルはともかく、ベースはどこから来た？ 私は楽器なんて弾けないぞ」

「いやいや、そんなはずないだろ。絶対につまひつて」

「その根拠はどこから湧く？」

募る苛立ち。冷たい感情が湧き上がり、少女は気づかれないようこそ場から去っていく。額には青筋がくつきりと浮かび上がり、怒りのあまりに肩を震わせていた。

「ん？」

「どうした、一夏」

「いや、今、そこに誰かいなかつたか？」

「氣のせいだらう」

「さうか？」

一夏と少女の再会は、もつ少し先のことだった。

+++

「とうづわけでっ！ 織斑君クラス代表決定おめでとう！」

「おめでとう！」

クラッカーの音が鳴り響く。宙を舞う紙テープを眺め、一夏は心中で絶叫した。

（せんせんめでたくねえよ！ 何だこのパーティは…？）

現在、夕食後の自由時間。場所は寮の食堂。一年一組のメンバーは全員集合していた。

各自、飲み物を手に持つて騒いでおり、そんな中、冷めた表情で一夏は壁にかけられた紙を見る。

そこには、『織斑一夏クラス代表就任パーティ』と書かれていた。代表に決まったのはもうずいぶん前のことだが、どうして今更祝うのだろうとどうでもいいことを考えつつ、一夏はこれからのこと想像して肩を落とす。

とても、とても面倒なことになりそうだった。何度も思うが、こういったことはセシリ亞に任せた方が適任だと思う。間違つても自分に任せるべきではない。

どうなつても知らないぞと思う一夏だったが、クラスメイトたちはそんな一夏の思考に構わず存分に騒いでいた。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるね」

「ほんとほんと」

「ラッキーだつたよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

「ちょっと待て！ お前一組だろ！？ といつかおかしいだろ、おかしいよな！？ 一組つて三十人だろ？ なのになんて、明らかに三十人以上いるんだよ！？」

相槌を打っている少女を始め、一夏は場の混沌さに絶叫を上げる。クラスの集まりだというのに、その人数がクラスメイトの数を超えているという奇妙な状況だった。

「おりむー、そんな些細なこと気にしちゃダメだよ」

のほほんとした少女が一夏を諭す。それと共に笑いが巻き起こり、一夏の疑問はあっさりと吹き飛ばされてしまった。

とても疲れる。現状にため息をつき、一夏はどつかりと椅子に腰を下ろした。

とこりか、いつの間に『おりむー』なんて愛称が付いたのだろうか？

「人気者だな、一夏」

「……本当にそう思うか？」

「ふん」

篠はなぜか機嫌が悪い。冷たい態度でお茶を飲んでいた。
どうしてかわからない一夏からすれば、これも疲れの一因だつた。

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生、織斑一夏君に特別インタビューをしにきましたー！」

新聞部と名乗る少女に更なる盛り上がりを見せるクラス一同。一夏はテンションは留まるところを知らずに下がり続けていた。

「あ、私は一年の篠薰子。まおすみ かおりよろしくね。新聞部副部長やつてまーす。はい」れ名刺

「あ、どうも！」丁寧に……えつと、坂本美緒さんですか。俺、どうちかつて言つと先代の声の方が好きでした」

「本人を前にして言つ事ー？」 つてか、名刺にそんなこと書いてな

「いやー、黛薫子だつて言つたよね！？　どこから出でたの、坂本美緒つて名前！！」

「眼帯の下に魔眼とか持つてそつですよね。でもそつなると、将来的に眼帯キャラが被るか」

「何の話ーー？」

「あ、その眼鏡つて実は魔眼殺しなんですか？」

「違つよー、これ、普通の眼鏡だからね」

「黛薫子さんですか。画数が多いですね。書くの大変じゃありません？」

「なかつたことこされた！？　今までの会話、全部なかつたことこされた！？　いや、確かに書くのは少し大変だけど……」

「だからか！」とによつて無理やりテンションを上げる。黛の突つ込みが痛快で、一夏は溢れてくる笑みを噛み殺す。黛は自身がからかわれていたことに気づき、「ホンと咳払いをして氣を取り直した。

「いやはや、意外に面白い子だね、君。私が突つ込みに回るとは…」
「これはインタビューも期待できるかも」

そういうて、ボイスレコーダーを一夏に突き出しへへる。

「ではでは、すばり織斑君！　クラス代表になつた感想をどうぞー！」

「どうしてこうなったんでしょ？ 僕にはクラス代表になるつも
りなんてこれっぽっちもなかつたのに……」

「あやや、やる気が微塵も感じられないぞ。頑張つて、織斑君」
「期待に応えられるかはわかりませんが、やれるだけ頑張ります」
「うふ、インタビュ－ありがとうね。あとは適当に捏造しておくか
が」

「オイー。」

「ヨーロー」と笑顔でとんでもないことを言ひ黨。先ほどからかつたこ
とに關しての仕返しなのだろ？

今度は、一夏のすぐ側で控えていたセシリアに向けて黨はボイスレ
コードーを向ける。

「代表候補生、セシリアちゃんにもコメントもらつていいかな？」

「わたくし、いついたコメントはあまり好きではありませんが、
仕方ないですね」

「ならここや。適当に捏造するから写真だけちょうどいい

「ええつー。」

なんというか、黨は自由なお人だつた。そして面白い。一夏は彼女
とは仲良くやれるのではないかと思い、僅かに頬を緩ませる。

「先輩も十分に面白そうですね」

「あはは、そうかな？ セヒト、それじゃ織斑和とセシコアハヤん、並んでもいいえるかな？」写真撮るから」

「はー」

「え？」

カメラを構える黛と、それに素直に頷く一夏。セシリ亞は意外そうな声を上げていたが、その声はどこか喜色を含んで弾んでいた。リリカルに聞こえた。

「注田の専用機持ちだからねー。ツーショットもひつよ。あ、握手とかしてるといいかもね」

「や、そうですか……そつ、ですわね」

もじもじし、チラチラと一夏に視線を送るセシリ亞。その真意を一夏が理解することは百パーセントありえず、顎に手を当て、首を捻つて考え込むだけだった。

「あの、撮つた写真は当然いただけますわよね？」

「そりゃもちろん」

「だったら今すぐ着替えて……」

「時間がかかるからダメ。はー、ひとつと並ぶ」

「やうだつて。そもそも着替える必要ないだろ、写真くらいで。え

つと、握手をすればいいんですね？」

セシリ亞の提案を黛と一夏が同時に拒否し、一夏はセシリ亞の手を取りつて握手の形に持つていく。

その時、セシリ亞の顔が赤くなっていた。その理由を一夏が理解することはまずない。

簞が一夏を睨んでいた。その理由も一夏には理解できない。訳の分からぬことだらけで、一夏は反応に困った表情をする。

「浮かない顔だね、織斑君。笑つて笑つて。撮るよー。35×51
÷24はー？」

「え？ えつと……2？」

「ふー、74・375でしたー」

写真が撮られる。はい、チーズや1+1なんてありふれた掛け声ではなく、一風変わった掛け声で撮られたために変な顔になつていなか心配になつた。

だが、それよりも、一夏は気になつたことを口にする。

「なんで全員入つてるんだー!？」

黛がシャッターを押す寸前、一組の生徒は全員一夏とセシリ亞の周りに終結していた。その機敏な動きには流石の一夏も驚愕する。クラスマイトは全員武術をかじつているのではないかと思つほどに素早い動きだった。

そして、その中には簞もいた。簞は武術をかじつてるどひどひではなく、剣道で女子中学生の頂点に立つた人物だが、まさかこんなことをするような性格だとは思わなかつた。

篇の意外な一面を見たような気がし、それと同時に何がしたいのだ
うつと考える。

「あ、あなた達ねえっ！」

「まーまーまー」

「セシリ亞だけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になつていじやん」

「ねー」

不満を漏らすセシリ亞だが、クラスメイト達は一や一やした笑
みを浮かべて彼女を丸め込んでいた。
その様子を他人事のように眺め、一夏は紙コップに注がれたジュー
スを口にする。

「まあ、これはこれでありますな。仲良しクラスだね～」

「そうですか?」

黛はカメラの片づけをしながら、唐突に一夏に話題を振ってきた。

「そうやつ、織斑君。これ知つてゐる? 最近加わった、EIS学園の
七不思議

「七不思議……ですか?」

EIS学園。そこはEISを専門に教えるとは言つてもやはり学校。ど

この学校にも七不思議といつもののは存在するらしい。一夏の小学校と中学校にもそういうものは存在していたが、そのどれもが似通つたような内容だった。

13段目の階段だったり、動く一富金次郎像だったり、美術室のモナリザの絵、または音楽室の肖像画などなど。

「ずいぶん時期外れですね。普通、怪談なら夏とかですかよね？」

これが七月や八月なら時期的にはけつぱいだが、現在はまだ四月。こういう話の時期的にはかなり早い。

それは黨も理解しているようだ。

「やうなんだけどね。でも、ここ最近結構田撃者がいるのよ。これは放つておけないってことで今度新聞部が張り込むことになつたんだけども、織斑君も来る？」

「遠慮しておきます」

「ちえつ、残念。でね、その七不思議なんだけど……」

黨は語りだす。田撃者多数の、新たなるEIS学園の七不思議。

「深夜から早朝にかけて……出るんだって。お地蔵さんを担いだ少年が。石でできたお地蔵さんを軽々と担ぎ、EIS学園内を徘徊するらしいよ。でも、その少年に見つかると食べられちゃうんだって」「突拍子のない話ですね？」

「やうかな？ あ、食べられるってのは物理的じやなくて性的にね

「女性がそんなこと堂々と言つべきじゃないと思ひます！ つてか、どんな風に広がつたんですか、その七不思議……」

「案外初心だね、織斑君。でも田撃者の話だと、お地蔵さんを担ぐ少年はかなりの美形らしいよ。だからむしろ食べられたいつてことで、夜の校舎を徘徊する人がいるとか」

「そうなんですか……俺には関係ないです」

疲れたようにため息を吐く一夏。篠はそんな一夏の側に歩み寄り、耳元でさつと囁いた。

「おい、一夏。その怪談だが……」

「なんだ篠？ まさか信じたのか？ 」こんな突拍子もない話

「いや、じつは尾ひれがつくし、別に信じたりはないが……その少年というのはお前じゃないのか？」

「…………あ」

篠に言われて、一夏は氣づく。深夜と早朝に現れる、地蔵を担いで I.S 学園内を徘徊する少年。その正体は織斑一夏だった。

地蔵とは秋雨作のトレーニング機材、投げられ地蔵グレーント。これを使用するにあたつて、目立たないよう深夜と早朝に外に運び出し、そこでトレーニングをするわけだ。筋トレ、投げ技の練習。投げられ地蔵グレーントの活用法はさまざまだ。

トレーニングをするたびに地蔵を外に運び、トレーニングを終わるために地蔵を部屋に戻す。つまりはそれが徘徊であり、地蔵を運ぶ

一夏の姿を誰かに見られていたということだ。その事実に唖然、呆然し、一夏は頭を抱えた。

「なになに？ 七不思議について何か知ってるの？」

「何も知りません！ 絶対に、微塵も、これっぽっちも知りません！ 気のせいですのでお気になさりす……！」

「や、やう？」

黛の問いかけに慌てふためいて否定する一夏。この話はこれで終わつたが、パーティは騒がしく、十時過ぎまで続いた。

テンションを始終継続させる女子達。そのエネルギーに圧倒され、一夏は疲労を蓄積していった。

その疲労は、翌日まで残るほどだつた。

「ふあ～あ……」

「だらしがないぞ、一夏」

盛大な欠伸と共に一夏は教室内に入る。それを幕に注意され、僅かに気を引き締めた。

が、それも長続きはせず、一夏は再び欠伸をする。

「はふつ……」

「気が抜けてるな」

「眠いんだから仕方がない」

深夜と早朝はいつもどおりにトレーニングをしていた。欠かしでもしたら秋雨や千冬に何を言われるか分からぬからだ。ただ、昨夜のこともあって地蔵を運ぶ時には細心の注意を払った。昨夜はおそらく、誰にも田撃されることはなかつただう。

「織斑君、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた?」

席に着くと、隣の席のクラスメイトに話しかけられた。

入学からの数週間で、今では気兼ねなく女子と会話をすることができる。話し相手が皆無で、一人ぼっちという状況はあまりにもさびしそうため、この状況配置夏からすればとても喜ばしいことだった。

「転校生? 今の時期に?」

今はまだ四月だ。何で入学ではなく、転入なのだろう。

しかも、EIS学園に転入するにはかなり条件が厳しかつたはずだ。試験はもちろん、国の推薦がなければできないようになつてゐる。それはつまり、転校生は代表候補生クラスであることを示していた。

「そう、何でも中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」

案の定、代表候補生だった。それに代表候補生といえどこの一組にも一名存在する。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしり?」

セシリア・オルゴット。彼女の自信はどこのからわいてくるのだろうと思つが、その自信満々の腰に手を当てるポーズはとても似合つていた。

彼女はイギリスの代表候補生だ。

「Jのクラスに転入してくるわけではないのだしつつ、騒ぐことのほどもあるまい」

篠もこの会話に入ってきた。噂の転校生とは一組に転入するわけではないらしい。入るのは一組だとか。だが、それでも多少気になるのは事実。

「どんな奴なんだろ?」

代表候補生というからにはやはり強いのだろう。セシリアと同じくらいだろ? か?

とはいって、セシリアと戦つたことがないので確かに実力は分からぬ。一夏がJで戦つたことがあるのは千冬のみだが、あれは世界最強なので参考にはならないだろう。転校生が千冬クラスと考えただけで恐ろしくなる。もしそうなれば、次回のブリュンヒルデは間違ひなくその転校生だ。

「む……気になるのか?」

「ん? ああ、少しばな」

「ふん……」

聞かれたことに素直に答えたといつに、何故か筈の機嫌が悪くなつた。その理由が一夏にはまったく理解できない。

代表候補生云々も氣になるが、転校生の国籍が中国だといつのも氣になる一因だつた。中国といえば馬、そして一夏のサード幼馴染の出身国である。元氣でやつてるかと思い、今度手紙を書こうかと考えていた。

「今のお前に女子を氣にしている余裕があるのか？ 来月にはクラス対抗戦があるといつに」

「そう！ そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが務めさせていただきますわ。なにせ、専用機を持つてるのはまだクラスでわたくしと一夏さんだけなのですから」

「いや、千冬姉がいるしごいや。これ以上やつたら俺、マジで死ぬから」

「やつ、ですか……」

見てる方が氣の毒なほどに氣落ちするセシリア。思わず一夏に、罪悪感が芽生えるほどだった。

だが、一夏の練習相手で千冬ほどに最適な人物はいない。雪片といふ同等の武器を使う近接戦型同士。しかも世界最強。IS戦のいろはや戦闘の駆け引きなどを教わるにはこれ以上適任の人物はいなかつた。

「まあ、やるからには勝つか。これでも俺は織斑千冬の弟で、香坂しぐれの弟子だからな」

「その意気ですか、一夏さん。わたくしも微力ながらお手伝いいたします」

「男を見せる、一夏」

「織斑君が勝つとクラスみんなが幸せだよー」

ちなみに、クラス対抗戦とはそのままの意味だ。クラス代表同士によるI.Sのリーグマッチ。

本格的なI.S学習が始まる前の、スタート時点での実力指標を作るためにやるらしい。また、クラス単位での交流及びクラス団結のためのイベントだそうだ。

しかも、一位のクラスには優勝商品として学食デザートの半年フリーパスが配られるらしい。甘い物好きの女の子としてはとても魅力的な話だろう。

「織斑君、がんばってねー」

「フリー パスのためにもね！」

「今のところ専用機を持つてるクラス代表つて一組と四組だけだから、余裕だよ」

昨夜のパーティにも負けないほど、わいわい騒ぐクラスメイト達。対応に困り、一夏が適当に相槌をうとうとしたところで……

「その情報、古いよ」

とても懐かしく、聞き覚えのある声が響いた。その声を聞いた一夏

はがばつと壇の主に対して視線を向ける。

「一組も専用機持ちがクラス代表になつたの。そう簡単には優勝できなさいから」

腕を組み、片膝を立ててドアにもたれかかっていた少女。彼女は……

「レン……お前、鏡音レンじゃないか！」

「もうよ。中国の代表候補生……って、そういうネタはやめなさいつて何度も言つてるでしょ！」「……」

「あ、レンの方だったか」

「それは男でしょ！……」

「冗談だ。そんなに怒るなよ。久しぶりだな、鈴」

「まったく、あんたは……」

鳳鈴音。一夏のサークル幼馴染であり、中学時代に仲のよかつた少女だった。

「で、何しに来たんだ？」

「宣戦布告よ。一組のクラス代表に向けてね」

「そりか。つまり俺に会いに来たんだな。嬉しいぜ、鈴」

「ちよ、なんでそりなるのよ？ あたしは一組のクラス代表に……」

「だから俺が一組のクラス代表だつて。察しろよ」

「ええ、ううなのーー？」

「ううなんだよ。それにしてもさつきの登場の仕方はなんだ？　かつこつけてたのか？　ぜんぜん似合つてなかつたぞ」

「んなつ……！？　なんてこと書つのよ、あんたはーー？」

怒りをあらわにする鈴に対し、一夏は笑っていた。とても楽しそうな笑みを浮かべている。

久しぶりに会った幼馴染。それだけでも心躍る気分だつたが、このやり取りの楽しさに快感のようなものを感じていた。

クラスメイト達とある程度話ができるようになつたとはいえ、このように馬鹿騒ぎをする間柄ではない。篠は乗りが悪いし、セシリ亞に関してもそういうたキャラではない。

だから今までの憂さを晴らすかのように、一夏は存分に鈴をからかつていた。

「おい

「なによーー？」

が、この楽しかつた時間も終わりを迎える。鈴の背後から聞こえる声。その声に一夏は表情を引き攣らせた。

鈴が怒り交じりで聞き返すと、頭部に痛烈な出席簿の打撃が叩き込まれた。鬼教官、織斑千冬の登場である。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。ちつとも戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません……」

すぐさまドアの前から離れる鈴。その態度は明らかに千冬に対しても怯えていた。

そういうえば、鈴は昔から千冬を苦手としていたことを思い出す。その理由はわからないが、なんとなく理解することはできやうな気がした。

「また後で来るからね！ 逃げないでよ、一夏！」

「いや、なんで俺が逃げるんだよ……」

「ちつとも戻れ」

「は、はいっ！」

もつ奪取で一組へと戻つていく鈴。幼馴染が泡つていよいよで、一夏は一安心した。

「ちつとも戻れ、Hの操縦者だつたのか。初めて知つた」

「おこ、一夏。一体どうこいつだ！？ ビンしてあの女がHにいるーー？」

「い、一夏さん！？ 説明を……」

「お、おい、落ち着け。ちふ、織斑先生を前にそんなことをすると
……」

筆とセシリアを始め、クラスメイト達からの質問が一夏へと向く。
その様子を見て、一夏は思わず黙祷した。

「席に着け、馬鹿ども」

千冬の出席簿が火を吹く。クラスメイト達は頭を強打され、その場
に蹲つていた。あれは痛いと、あの痛みをよく知る一夏は思つた。
鎮静化した教室。千冬が教卓に上がる。今日も一日、HSの訓練と
学習が始まろうとしていた。

BATTLE 9 サード幼馴染（後書き）

中の人ネタ大好きですw 今後ともやっていきます。
ちなみに読者の皆様の好きな中の人って誰ですか？

(何故だ……何故今更にあの女子が、鈴とやらがIIS学園に転入してくる!?)

朝の一件が気になり、篝は授業に集中できないでいた。

一組に宣戦布告に来たという少女、凰鈴音。篝は彼女のことを知っていた。髪が少しだけ伸びていたが、あの姿は忘れようがない。一夏の私物である写真に写っていたのがあの少女だった。しかもツーショット。それだけで一夏と鈴は特別な関係だということが伺える。一夏曰くサーード幼馴染とのことだが、果たして本当にそれだけだろうか?

なにか隠し事をしていいかと篝は勘織りを入れる。

(幼馴染は私だろ。お前曰く、ファーストは私だろ! なのに、なのに、サーードなどという後から出てきた女子に……)

込み上げてくる怒りをどうにか抑えながら、篝は一夏に視線を向けた。現在、一夏はまじめに授業を受け、ノートを取っている。

(私は授業に集中できないうといつのこと、お前は……!)

だが、それは篝からすればさうに怒りを煽る切欠にすぎなかつた。

「…………

それでも落ち着く、冷静にならうとする。明鏡止水のようにな。考えてみればそれがどうしたというのだろう? なにせ、篝は一夏と同じ部屋だ。故に一人つきりの時間などいつでも作れる。それが

大きなアドバンテージとなり、筈の心に余裕を『えていた。

（考えるだけ馬鹿らしかったな。私は一夏の幼馴染なんだ。余裕を持たなくてどうする）

ふふんと上機嫌で腕を組む。このアドバンテージは決して揺るがないだろう。それは鈴にしてもそつだし、セシリ亞やクラスメイトにしてもそつだ。

（まあ……あの地蔵はなんとかして欲しいと思つが。たまに動き出しそうで、少しだけ怖い）

投げられ地蔵グレーートのことを思い出し、苦笑いを浮かべる筈。それでもその表情は、とても楽しそうなものだった。

「篠ノ之、答えは？」

「は、はいっ！？」

突然名前を呼ばれ、筈は素つ頓狂な声を上げる。

今は授業中。それも最悪なことに、山田先生の授業ではなく千冬が受け持つ授業だった。

「答えは？」

「……あ、聞いていませんでした……」

直後、出席簿が筈の頭に叩き込まれた。ぱしーん、と小気味のいい打撃音が響き、筈は頭を押されて机に蹲つた。

「…………」

教室の後ろの方の席。そこではセシリ亞がノートにシャーペンを走らせていた。しかし、まじめにノートを取っているというわけではない。書かれている文字は言葉になつておらず、意味のない線が無意識のうちにひかれしていく。

（まずいですわ……今更の方が何故！？）

直接の面識はないが、セシリ亞も鈴のことは知っていた。一月ほどだが梁山泊に下宿し、一夏と共に暮らしていたのだ。その時に知った。

セシリ亞と一夏が出会つた時期に中国に帰つた幼馴染。彼女は一夏にとつて特別な存在だったらしい。

それでも中国にいるということから安心感を抱いていたが、まさか ILS 学園に転向してくるとは思わなかつた。篠だけでも厄介だとうのに、最強の敵の出現。この状況にセシリ亞は気が気がなかつた。

（幼馴染。あの方や篠さんは一夏さんと長い間共に過ごしている。

それに対してわたくしは一月だけ……それはズルですわ！ 正々堂々と勝負なさい！）

なにがズルなのか、自分で考えていてもわからなかつた。だが、それほどまでに動搖し、セシリ亞は取り乱していた。

もしも条件が同じだつたら、一夏とセシリ亞が幼馴染だつたら、その時は負けないだろうと絶対の自信を持つてゐる。だが、そんなも

のを持っていたところでなにも意味はなかつた。そう思つたところで、そう願つたところで、セシリ亞が一夏の幼馴染になれるわけではないのだから。

幼馴染といつアドバンテージは思つた以上に大きかつた。

（しかも、代表候補生……）

「」、IS学園には二十数名の代表候補生が存在している。けれど、一年生では四人しかいなかつたはずだ。しかも、専用機持ちは一夏を抜かせば二人。

幼馴染の筈にはない、セシリ亞の大きなアドバンテージだった。なのに……

（専用機持ちつて言つていましたわね……）

最悪だつた。こちらの有利だつた部分が潰され、万策が尽きる。それでもセシリ亞は策を巡らせ、この状況を何とか打破しようと考える。

（なにか決定打になるよつたこと……わたくしがリードするには……）

「オルゴジト」

声がかけられた。けれど、セシリ亞はそれに気がつかない。

「……例えばテートに誘つとか。いえ、もっと効果的な……」

「……」

直後、千冬の出席簿がセシリアの頭部に叩き込まれた。セシリアは頭を押され、痛みに悶絶する。

十一

「お前の所為だ！」

「あなたの所為ですか？」

「なんでだよ……」

昼休み、篠とセシリアが理不尽な文句を一夏に向けてきた。この一人は午前中の授業だけで山田先生に注意を五回も受け、千冬には三回も叩かれてくる。その全てが一夏の所為だとこいつはあまりにも理不尽過ぎる。

「まあ、話なら飯食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」

「む……ま、まあお前がそういうのならいいだらう」

「わ、そうですわね。行つて差し上げなにこともなくつてよ」

「そりゃ、それならいいや。一組に行つて鈴を誘つてこよう」

「ちよつと待て一夏！」

「『』みんなさー、わたくしが悪かつたですわ」

そつさんの意趣返しも含め、一夏はあつたうと引く。そつさんと鶯は慌てふためき、セシリ亞は素直に頭を下げてきた。

一夏はニヤニヤとした笑みを浮かべ、結局は鶯とセシリ亞と共に食堂に向かつ。券の販売機では日替わりランチを購入した。リーズナルブルな価格で毎日違うものが食べられるので、学食ではほとどきじれを注文している。

ちなみに鶯はきつねうどんで、セシリ亞は洋食ランチの券を買つていた。

「待つてたわよ、一夏。」

注文の列に並ぶ。するとそこには鈴がいた。多少髪が伸びたが、昔と変わらない佇まい。

立ちふさがるよつよじこいたので、一夏は軽いため息を吐く。

「まあ、とつあえずナリビコてくれ。食券出せないし、普通に通行の邪魔だぞ」

「い、い、いわね。わかつてるわよ」

鈴が一夏の前から立つ。一夏はなんとなく鈴が持つてお盆、やれに乗つてるラーメン眺めてつぶやいた。

「のびるわ」

「わ、わかつてるわよー。大体、あんたを待つてたんでしょうがー。なんで早く来ないのよー。」

「いや、そつちが来るんじやなかつたのか？ またあとで来るなんて言つてたが、結局来なくつてもう昼休みだぞ。なにしてたんだ？」

「う……クラスメイトに捕まつてたのよ」

「そりか、代表候補生で専用機持ちだからな。質問攻めにでもなつたか？」

「まあね」

転校生といつのはただでさえ目立つ。それに代表候補生で専用機持ちという看板が付けば尚更だ。

一夏には鈴の気持ちが痛いほどに理解できた。別に転校生や代表候補生ではないが、世界で唯一EISを動かせる男で専用機持ちだ。注目度は鈴の非ではない。気苦労を労いつつ、一夏は食堂のおばちゃんに券を渡した。

「それにしても久しぶりだな。ちょうど一年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。あんたは……どうせ、ショット dziewiąty怪我してるんじゃないね」

「ああ、梁山泊の修行は容赦ないからな。今じゃ剣術の他に柔術、中国拳法をやってるよ」

「えつ、てことは秋雨さんと馬さんこと、一夏、あんた今までよく生きてたわね」

「ホントにな……」

一夏は遠い目つきをする。一体、何度も死にそうな目に遭つたことか。

「あー。ゴホンゴホン！」

「ンンンンッ！ 一夏さん？ 注文の品、出来てしましてよ？」

篠とセシリアが大袈裟に咳き込み、一夏は出されたランチに視線を向ける。

今日は鰯の塩焼き定食だった。この間食べた時に気に入つてたので、これは嬉しい。

「向こうのテーブルが空いてるな。行こうぜ」

昼時となると混む学食だが、運良く全員が座る」との出来る席を見つけることが出来た。

一夏達はそこに向かい、テーブルにお盆を置いて腰を下ろす。

「鈴、いつ日本に帰つてきたんだ？ おばさん元氣か？ いつ代表候補生になつたんだ？」

「質問ばっかしないでよ。あんたこそ、なにエレフ使ってるのよ。ニュースで見た時びっくりしたじゃない」

「あー、やっぱ中国にもニュースで流れたんだな。日本じゃ毎日のように取り上げられてたし」

一年ぶりということで積もる話が多くあつた。やはり、幼馴染の空白期間というのは気になるものだ。篠のときもそうだった。このまま鈴との会話を続けようとしたところ、その篠とセシリアが間に入ってきた。

「一夏、私達を忘れてないか？」

「やつですね。そろそろ話を進めません」と。

「ん、ああ、そうだな、悪い。とはいえたつてるだろ？俺のサード幼馴染の凰鈴音だ。もつとも俺は縮めて鈴って呼んでるけどな」

「よろしくね。で、一夏。気になつてたんだけビコの人達つて誰？」

「ん、ああ。前に話したろ？ こつちが篠ノ之箒。小学校からの幼馴染で、俺の通つてた剣術道場の娘。小四の終わりころに転校しちやつたんだけビコ学園で再会したわけだ」

「ふうん、そうなんだ」

鈴はじろじろと箒を見る。箒は負けじとそんな鈴を見つめ返していた。

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ。いたらいた」

（仲良くやれそุดだな）

交わされる挨拶。何事も礼儀は大事だ。これならばつまくやれるだろ？と、一夏はうんうんと頷いた。

一瞬だけ、二人の間で火花が散つた気がしたが、それは気のせいだと信じたかった。

「で、こつちがセシリ亞だ。鈴も代表候補生なら知つてるよな？」

「よひしへお願ひしますわ。中国の代表候補生、凰鈴音さん」

「……誰？」

今度はセシリアの番だ。一般人ならともかく、同じ代表候補生なら知っているかもしれないと思つたが、鈴の反応はとてもそつけないものだつた。

そういえば鈴はこんな性格だつたと、一夏は今更ながら思い出す。

「なつ！？ わ、わたくしはイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットでしてよ！？ まさかござ存じないの？」

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なつ……！？」

怒りで顔を真っ赤にするセシリア。じつは振り方はまずかつたかと後悔する一夏だが、既に後の祭りである。

「い、い、言つておきますけど、わたくしあなたのような方には負けませんわ！」

「そ。でも戦つたらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

嫌味などではなく、素で得意気な言い方をする鈴。けれどそれは、セシリアの怒りを煽るには十分すぎる発言だった。

「い、言つてくれますわね……」

セシリアはわなわなと震えながら拳を握り締める。なのに鈴は何食わぬ顔でラーメンをすすつていた。

（さて、）この状況をどう宥めるか……

一 夏は頭を搔ませる。

「一 夏

「ん？」

すると、鈴が声をかけてきた。一 夏はあいつとそれに乗る。いつも空気は、話題を変えることに限る。

「言つてたじやない、あんたがクラス代表つて

「おへ、成り行きでな

「ふーん……」

鈴は匕口を握り匕口とスープを飲む。これも昔からのことであり、一 夏は小さくため息を吐いた。

「何度も言つたがレンゲ使え」

「女々しいからイヤ」

「女々しこって、お前女だつたが。もつたいない、そんなこに處つたの」

「か、可愛い……」

鈴が顔を赤く染める。やはり女性は容姿を褒められると嬉しいのだろう。そう一夏が考えていると、簾とセシリアから鋭い視線が突き刺さってきた。一夏にはその理由が理解できず、冷や汗を搔きながら原因を考える。考えるが、いくら考えても一夏が原因を思いつくことはなかった。

「でも、さつきの話の続きなんだけど……あたしがEISの操縦、見てあげてもいいけど?」

鈴は今更ながらにレンゲを使い、ラーメンのスープを飲んでいた。飲みながら一夏に声をかける。

「申し出はありがたいんだが……」

それを、セシリアにもした問答で断ろうとする一夏。が、鈴の申し出を退けたのは一夏ではなく簾とセシリアの二人だった。

「お前には関係ない。これは一組の問題だ!」

「あなたは一組でしょ? 一人とも、敵の施しは受けませんわ」

(顔怖つ……一人とも、そこまでクラス代表戦に燃えてるんだな。俺も頑張らないとな)

机を叩いて立ち上がる一人を見て、一夏は的外れなことを思つていた。

「あたしは一夏に言つてんの。関係ない人は引っ込んでよ

「関係ないのはそつちだ！」

「そつですわ。一夏さんは一組の代表ですから」これは一組の問題。なにを後から出して図々しことを……」

「後からじやないけどね。あたしの方が付き合には長いんだし」

「や、それを言つなら私が早いぞ！ それに、一夏は何度もうちで食事をしてくる間柄だ。付き合はずそれなりに長い」

白熱する言い争い。だが、篠の言つとおりに一夏は何度も篠のお宅に世話をなつた。

ある事情で困つてた一夏と千冬に手を差し伸べ、毎日のように夕食に招待してくれたのが篠ノ之家人だ。篠の父と母には本当に良くしてもらつた。

「つうで食事？ それならあたしもそつだけ？」

ちなみに、鈴の家は中華料理屋だつた。しかも安くて量が多く、うまいのだから梁山泊の面子とよく食べに行つたものだ。また、修行後の数少ない癒しでもあり、今でも酢豚と杏仁豆腐の味は忘れられない。

「つまかつたなあ……鈴の親父さんが作る酢豚。また食べたいな」

「こつ、一夏！ つーじつうことだー？ 聞いてないぞ私は！」

「わたくしもですわ！ 一夏さん、納得のいく説明を要求しますわ！」

「説明も何も……幼馴染で、よく鈴の実家の中華料理屋に行つてた関係だ」

正直に一夏が言つて、余裕の表情を浮かべていた鈴がむすつとした表情をする。

「な、なに？ 店なのか？」

「あら、そうでしたの。お店なら別に不自由なことは一つありますわね」

対する鈴とセシリアは、安堵の表情を浮かべていた。

「それなら、わたくしが一番一夏さんとの関係は深いですわね。なにせ、一つ屋根の下で一緒に暮らしましたもの」

「一夏！？」

鈴の鋭い視線が一夏に向けられる。獰猛で、茨のように刺々しい視線だった。それに表情を引き攣らせ、一夏は必死に弁明する。

「一つ屋根の下って、離れだらうが。確かに渡り廊下の屋根でつながつてはいるが……基本、美羽と同じ部屋だつただろ？」「

セシリアは一時期、梁山泊の保護下にいた。その際に梁山泊に一月ほど下宿していたのだが、梁山泊内の建物は母屋と離れ、そして道場と三つの建物で分かれている。

一応渡り廊下でつながつてはいるが、一夏の部屋があるのは秋雨達と同じ離れの方であり、セシリアが泊まっていたのは母屋、美羽の

部屋だった。故に一つ屋根の下とこいつ言い方には語弊があった。

「なんだ、そういうこと

「それなら私の方が上だな。なにせ現在、私と一夏は同じ部屋だからな」

一安心する鈴と、張り合つた。またも鈴とセシリアの鋭い視線が一夏に向けられ、一夏は疲れたように肩を落とした。

「どうこう」と一夏。

「その噂は存じてましたが……まさか本当だったとわ。一夏さん、納得のいく説明を求めますわ！」

「いや、俺の入学ってかなり特殊なことだったから、別の部屋を用意できなかつたんだと。だから仕方なく、今は篠と同じ部屋でだな……」

「仕方なくだと…? 一夏、お前は仕方なくで私と同じ部屋にいるのか! ?」

「だあっ! なんでそこで篠が怒るんだよ…? 話が進まないから少し黙つてろ! 」

「そ、それってつまり、今の一夏はこのこと寝食を共にしてるってこと…?」

「まあ、そういうか。でも、篠が相手で助かってるっちゃ助かってるんだぜ。」これが見ず知らずの相手だったら緊張して寝不足になつ

ちまつからな

「…………」

「…………」

混沌する場。それでも一夏の言葉に無言となつた鈴とセシリアを見て、一夏はやつと納得してくれたのかと安堵する。

鈴は先ほどは不機嫌そうな表情をしていたが、今の一夏の言葉にまんざりでもなさそな表情をしていた。

「口口口」と表情を変え、忙しそうな三人だった。

「……つたら、いいわけね……」

「…………く、いきませんわ…………」

「うん? どうした?」

俯き加減の鈴とセシリアがなにかを言つたが、一夏はそれを聞き取ることが出来ず、耳を傾けて問い合わせ返す。すると二人は同時に顔を上げ、怒声交じりに叫んだ。

「だからー、幼馴染ならいいわけね!ー?」

「納得いかないと言つたんですわーー!」

「つおつー?」

思わず仰け反つてしまつ一夏。だが、一人はそんな一夏をお構いなしに言葉を続けた。

「というわけだから、部屋代わつて」

「そりですわ」

「ふざけるなつ……」

雰囲気は一気に険悪なものへとなる。まさに三つ巴の状況だった。
「いやあ、篠ノ之さんも男と同室なんてイヤでしょ？ 気を使うし。
のんびりできないし。その辺、私は平氣だから変わつてあげようと思つてわ」

「べ、別にイヤとは言つていない。それに一夏も私と同室で助かつ
てると言つただろう。それに、これは私と一夏の問題だ。部外者に
首を突つ込んで欲しくはない！」

「部外者じゃありません。むしろ関係者ですわ」

（なんの関係者だ、なんの……）

セシリヤの言葉に疑問を感じる一夏だったが、決して口には出さなかつた。なぜならとてもめんどくさいことになりそうだから。
今は三人の口論を聞き流し、鰐の身をほぐすことに集中した。

「大丈夫。あたしも幼馴染だから」

「わたくしは、えつと、その……そり、一夏さんは『友人』という
間柄で……」

「それはここにいる全員が当てはまるだろ。って、そりゃじやなくて、それが同室になるのになんの関係があるといつんだー？」

味噌汁をすする。やっぱり味噌汁は豆腐だと思いながら、次は「」飯を食べる。白米を食べ、日本人で良かったと場違いなことを考える。

「」のまま言い争つても埒が明かないわね

「そのよつですわね

「そりだな

鈴達が互いに顎を合ひ。険悪な雰囲気が漂い、一夏は居心地の悪さを感じた。

それでも昼食を食べ続ける。食事は体の資本でとても大事だし、何よつこの程度のこととで食事をいちいち中断しては馬鹿らしかった。

「一夏に決めてもらいましょうか。誰と同室がいいのかって

「その方が後腐れもなくつてよろしいですわね

「一夏、当然私だな？」

三人の視線が同時に一夏に向いた。ポリポリと漬物を食べながら、一夏は呆れたよつこに言ひ。

「俺に振るなよ……」

そもそも、三人は部屋の「」なんにも激しい言い争いをしていのだるつ。

一夏にはその理由が理解できず、頭に頭痛のような痛みを感じていた。半分が優しさで出来てている錠剤が欲しい。ほぐした鯖の身を口に運ぶ。おいしい。が、なにかが物足りなかつた。

「酢豚食べたいなあ」

酢豚が食べたい。鈴が転校してきたからか、あの味をよく思い出す。鈴の父親の酢豚は本当に絶品だった。

「そういえば鈴、親父さんは元気にしてるか？ まあ、あの人は病気とは無縁そうだけどな」

「あ……うん。元気……だと思つ」

「？」

言葉の歯切れが悪い。普段の鈴なら話を逸らしたことに激怒しそうだったが、それをせず、俯き加減でそう答えた。その様子に、一夏は違和感を覚えた。

「話を逸らさないでくださいーーー。」

「そうだぞ一夏ーーー。」

鈴は激怒せずとも、篠とセシリアが激怒した。怒りの視線を真つ直ぐに一夏に向けてくる。

「酢豚つて言えば一夏、約束覚えてる？ーーー。」

「約束?」

「おこー。」

そこで、鈴が割って入った。大きなアドバンテージを思い出したようない、不敵な笑顔を浮かべて問いかけてくる。
竇とセシリアが睨んでいるが、そんな視線など気にしない。

「鈴、約束つて言つのは」

「う、うん。覚えてる……よね?」

チラチラと、上田遣いで一夏を見上げる鈴。心なしか、恥ずかしそうな表情をしていた。

「酢豚で約束といつと、『えーと、あれか? 鈴の料理の腕が上がつたら毎日酢豚を……』」

「や、そいつ。それー。」

一度、響に約束の場面を邪魔されたことがあったが、田を改め、別の日にそんな約束を交わした気がした。

「……奢ってくれるつてやつか?」

「…………はい?」

「だから、鈴が料理出来るよつになつたひ、俺にメシを『』馳走してくれるつて約束だろ?」

次の瞬間、鈴の平手が飛んできた。一夏は思わずそれを受け止めてしまう。流石は梁山泊の修行。咄嗟の攻撃に対処する術は万全だった。

「受け止めるな！」

「鈴……？」

だが、これはまずい。今回ばかりはそれが悪い方に作用した。

鈴は体を震わせ、今まで見たことがないほどの形相を一夏に向けていた。それと同時に怒りと相反する感情、悲しみを浮かべている。泣いているのだ、あの鈴が。いつも笑っていて、笑顔がまぶしいと感じるほどの鈴が泣いている。その原因はまがつことなく一夏である。

「最っっっ低！ 女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けない奴！ 犬に噛まれて死ね！」

「あ、おい、鈴！」

鈴は一夏の腕を振り払い、食べ終えた食器を片付けすらせずに学食を後にした。

そう、ここは学食だ。今までの口論や騒ぎは全て周りの生徒に聞こえており、一夏に向けられる冷ややかな視線。それと同じものが、笄とセシリ亞からも放たれていた。

「一夏さん、一度死んだ方がよろしいのではなくって？」

「そうだな。馬に蹴られて死ね」

一人の冷たい言葉が一夏に突き刺さる。まつたくそのとおりだつた。理由がわからないが、鈴を泣かせたのは一夏自身。そのことにすきりと胸が痛んだ。

昼休み終了のチャイムが鳴る。一夏は自分の分と鈴の食器を片付け、教室へと戻つた。その道中、これからどうあるべきなのか頭を悩ませた。

+++

午後の授業中、ずっと考え続けて一夏の出した結論。それは……

「もしもし、馬さんですか？」

「あいや～、いつくんかね？ おじちゃんに電話してくるとは珍しいね。どうね、IS学園の方は？」

他者への相談。放課後に屋上へ赴き、携帯電話を使って馬に電話をする。梁山泊内ではこういった話に一番詳しく、適しているだろう馬を選択した。

馬は長老の隼人を除外すれば、梁山泊の豪傑の中で唯一の既婚者だ。しかも娘もいるらしい。わけあって中国に妻と娘を残してきているらしいが、それ故に人生経験はいろいろと豊富だ。若いころは美形で女性にもモテたらしい。もつとも現在は、頭頂部がとても悲しいことになっているが……

「いろいろ苦労しています。といひで馬さん、相談があるんですが……」

「なんね、こつくんも人並みに恋のお悩みかね？ おこちゃんに話してみるね」

「はは、そんなんじゃないんですけど……」

一夏は苦笑を浮かべつつ、馬に全てを話した。鈴が転校してきたこと。その後のやり取り。学食での騒動。全てを話し、それを聞き終えた馬からは深いため息が吐かれる。

「こつくん、それ、本氣で言つてるね？ もし本氣なら、お友達の言つとおり一度死ぬべきね」

受話器越しに馬のため息を聞き、一夏は苦笑い表情をした。やはり悪いのは自分がだと再度理解し、馬にどうするべきなのか指示を仰ぐ。

「どうあえず、こつくんは自分がどんなことを理解したのか知るべきね。じゃないと鈴ちゃんがかわいそうね」

「「」わつともです……でも、あいにく俺には理由が皆田見当も……」

自分が悪いことは理解している。皆の師との理由がわからない。それが一夏クオリティ。

朴念仁「唐変木などと呼ばれる所以だ。

「「」わいつた」」とは自分で氣づくべきであつて、おこちゃんが言つべきじゃないけど……こつくんの場合は誰かが教えないこと一生理解しないだろうから、この際言つね。こつくんは日本の典型的なプロポーズの台詞に『毎日味噌汁を』は知ってるね？』

「それはもちろん。前にアパチャイと一緒に麻雀とかで……え？」

「気づいたね？」 鈴ちゃんはそれを酢豚でアレンジしただけに過ぎないね

「えええええええええええええつ！？」

馬の言葉に、一夏の絶叫が響き渡る。今更言葉の意味を、鈴の気持ちを理解し、一夏の頭はオーバーヒートするほどに混乱していた。

「ちよ、ちよ……待つてください。約束したのは、確か小学校の時ですよーー?」

「小学生だからそういう約束を気軽にしちゃつたりもするね。でもその気持ちは純粋で、とても纖細なものね。いつくんはそれを踏み躡つたね」

「…………でもあれって、もう二度とない…………」

それでも一夏は考える。考えに考えて、極限までに頭脳をフル稼働させた。

「それって、鈴が俺のこと好きってことじや……」

「今更気づいたのかとしか言えないね」

馬の言葉を理解し、一夏は自分で自分の頬をぶん殴る。手加減はせず、本気で殴った。

好きでもない相手にプロポーズのような約束をするわけがない。し

かも、小学校の時にしたそれを今更持ち出すところとせ、鈴の気持ちは今も変わらないということだ。

それなのに一夏は踏み躊躇つてしまつた、鈴の気持ちを。気づかなかつたとか、理解できなかつたというのは理由にならない。

「馬鹿だ……俺は」

ズキズキと頬に痛みが走る。それでも、こんなものは鈴の気持ちを考えればまだ足りないだろう。自分で自分を殺したいほどの怒りを、一夏は自分自身に向けていた。

「こつくんは鈴ちゃんのことをどう想つね？」

「嫌いじゃないです。むしろ、その……」

鈴のことは嫌いじゃない。鈴が帰つてきて、HHS学園に転校してくれたことは本当に嬉しかつた。

何気ないやり取りを交わし、鈴が変わつてないと理解して思わず笑みがこぼれた。

嫌いではない。鈴が側にいることで、一夏は安らぎのようなものを感じていた。

「でも、好きかつて言つとどうかつて話になつて……正直、戸惑いが隠せないです。それに、俺はまだ高校生ですから……」

鈴は身近な存在だつた。けど、身近ゆえに一夏はそういう対象として見ていない。見ることが出来なかつた。

鈴とは幼馴染、友達のような感覚で付き合つていたのだ。それをいきなり異性として見ることに、少なからずの違和感を感じてしまう。約束の意味に關しても、プロポーズだとか結婚は高校生の一夏にと

つては早すぎる話だ。

「そこまで重く考えなくていい。恋愛とはもっと気軽に、気楽に考えるものね」

そんな一夏に、馬からは軽い声がかけられた。微笑ましそうな笑みが携帯電話から聞こえてくる。

「それにいつくんも鈴ちゃんも若こ。これもまた経験ね」

「でも、俺は、鈴を……」

一夏だつて男だ、彼氏、彼女の関係に興味がないかといえど嘘になる。彼女が欲しいと思つたことだつてあるし、性欲も存在する。それでもまだ、一夏に可愛いがあるのは事実。鈴を怒らせ、悲しませたことをまだ引きずつっていた。

「その点に関してはおいちやんに策があるね。とつても良い策なんだけど……聞くかね？」

一夏には打開策が思い浮かばない。だから、選択肢は選ぶまでもなかつた。

迫るクラス対抗戦。一夏の所属する一組の相手は二組。つまり鈴だった。

BATTLE11 クラス対抗戦（前書き）

鈴ルートに入っている展開に作者自身も驚きです。でも、鈴は可愛いですよね、個人的にはE/Sで一番好きなキャラです。一夏無双始まります。

「甲龍ねえ……ウーロンのあの願いを叫びたくなるなあ」

「一夏、あんた馬さんにいろいろと悪影響受けてんじゃないの？」

「まあ、自覚はある。けど、なんだかんだでとても頼りになるんだぜ」

試合当日、第一アリーナ第一試合。組み合わせは一夏と鈴。初戦から示し合わせたような組み合わせに一夏は内心で笑みを浮かべる。視線の先では鈴とそのEVA、とある大人気漫画に喧嘩を売っているとしか思えない名前の甲龍が試合開始の時を静かに待っていた。セシリアのブルー・ティアーズ同様、アンロック・コード非固定浮遊部位が特徴的だ。肩の横に浮いた棘付きバイク・アーマー装甲がやたら攻撃的に魅せてくる。

（あれで殴られたら、すげえ痛そうだな……）

内心でつぶやきつつ、一夏は改めて段取りを確認した。馬に『えられた策。それを今一度頭の中で整理する。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに促され、一夏と鈴は空中で向かい合ひ。その距離は五メートル。正面から向かい合ひており、先日のこともあって嫌でも意識してしまつ。

（落ち着け……落ち着け、俺。冷静になるんだ……）

柄にもなく、胸が早鐘のように鼓動を打つ。馬に言われるまで気づかなかつたが、鈴は一夏に好意を向けている。それを知り、昔から知つてゐるはずの鈴がまったくの別人に見えていた。

「一夏、今謝るなら少しきらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

鈴が言葉をつむぐ。粗暴で棘のある言葉だつたが、形の良い朱色の唇からつむがれた言葉は一夏を変な氣分にさせる。息を呑み、心を落ち着けて一夏は言った。

「なんで俺が？ むしろ謝るのは鈴、お前の方だろ？」

「はあ！？」

まずは責任を鈴に押し付ける。それが馬の与えた策だつた。鈴の眉が吊り上り、怒氣を孕んだ鋭い視線が一夏に向けられる。鈴が怒つてゐる理由を理解してゐるために、一夏には罪悪感が芽生えた。だけど、ここまで来てしまえばもう後戻りは出来ない。ここからは個人間^{プライベート・チャンネル}秘匿通信での会話を忘れない。もし、この話を赤の他人に聞かれたら悶絶ものだ。一夏は通信関連の操作は苦手だったが、このために千冬との訓練の合間に練習し、習得した。

『そもそも、普通あんなとこひで言つか？ 学食で言われても、正直返答に困る』

学食にはセシリ亞と篠の他にも、そこを利用してゐる他者の視線があつた。そんなところで、そんな恥ずかしいことを言えるかといふのが一夏の弁だ。

『あつ……それはそうかもしけないけど……って、一夏。約束の意味ちゃんと理解してるので…』

『まあな』

内心で謝る。『『めん、嘘』と。何度も言つが、馬に言われるまで鈴の好意には気づかなかつた。約束の意味なんて理解しているわけがない。だけどここはあえて、気づいていたように振舞う。

『約束はちゃんと覚えてるぜ。そして鈴の気持ちもちゃんと理解している。その……正直、すぐえ嬉しいよ』

『あ、あつあ……』

ポリポリと、頬を搔く動作をしながら言つ一夏。これ以上ないほどに恥ずかしい。

だが、鈴は一夏以上のように、顔を真つ赤にしながら意味を成さない言葉を呻いている。

『でもな、俺も鈴もまだ十五歳で高校生なんだ。その話は早いつて言つが、重いつて言つが……『悪いが隠せない。鈴は幼馴染で、今までそういう対象としてみていなかつたのも理由かもしれない』

『…………』

けれど、続けられた一夏の言葉に鈴の表情がとても悲しそうなものに変化した。表情が沈んでいく。もつともそれは、一夏の次の言葉を聞くまでのことがだつたが。

『だからそんなに重く考えないで、もつと気楽に付き合つてみるの

はどつかつて思つただ

『え?』

鈴の顔ががばつと上がる。呆けたような表情で一夏を見つめていた。その顔が思つた以上に面白い。

『それでは両者、試合を開始してくださー』

アナウンスが試合の開始を告げる。ビーツと鳴り響くブザーの音。だけど一夏と鈴は動かない、空中で見詰め合つたまま、プライベート・チャンネルでの会話を続けていた。

『ちやんと手順を踏むべきと言つが、物事には順序があると言つが……それに、こつこつたことは男から言つべきだろ?』

一夏ははにかんだ笑みを浮かべ、自分の気持ちを真つ直ぐ鈴に伝える。

『だから、俺がこの試合で勝つたら、毎日毎飯に弁当を作つてくれないか?』

『え、ええつー?』

『言い換えるなら、俺の彼女になつてくれつてことだ』

『えええええええつー!』

鈴が叫びを上げる。思わずプライベート・チャンネルを切つてしまつぽんに衝撃的だったのださう。

一夏はにやりと笑い、馬の策がうまく計ったことを確信し、プライベート・チャンネルを切る。

「俺が勝つたらの話だ。もう試合は始まってる。いくぜ、鈴！」

あとはこの試合に勝つだけ。一夏は雪片一型を構え、未だに呆然としている鈴に肉薄した。

+++

「あら、散々言つてた割には鈴さんの動きはたいしたことありますね」

「あれは……動搖しているのか？」

ピットからリアルモニターを見ていたセシリ亞と笄がそれぞれの感想を漏らす。

一夏の雪片式型と鈴の武器、青竜刀が激しい打ち合っこをしている。一見すると互角に見えるが、鈴の動きはどこか纖細さを欠いているように見えた。それは代表候補生というにはあまりにもお粗末な動きだ。

「動搖？ そういえば一夏さんと鈴さんは試合前に何かを話していましたが、それが関係しているのかしら？」

「だらうつな。だが、一夏と鈴は一体なんの話をしたんだ？」

セシリ亞と笄は同時に首を傾げる。もしもこの一人が、一夏と鈴の

会話を聞いていたら果たしてどのような反応をするだらうか？

「なんにせよ、」のまま押し切つてしまえば一夏さんの勝利は間違
いありませんわ」

「ああ、そのまま叩き込め、一夏」

一夏の応援をする一人。彼女達が会話を聞いていたら、このように
一夏の勝利を願う」ともなかつただろう。

+++

「」のつ、なんで……」

鈴は冷静さを欠いていた。最初こそ激しい打ち合いを演じていたが、
自体は徐々に悪い方向へと傾いていった。

一夏の修めている香坂流とは日本刀から手裏剣、槍からトンファー
まで様々な武器に精通している流派。その中でも一夏は剣術を得意
としている。そんな一夏と真正面から打ち合つのは、如何に鈴が代
表候補生とはいえ分が悪い。

更に鈴が苦戦している理由は、一夏が激しい打ち合いから一撃離脱
戦法に切り替えたこと。冷静さを欠いているために鈴の攻撃は次第
に大振りとなり、避けるのを容易にしていた。その隙を突き、一夏
は確実に鈴に攻撃を当てる。そつやつて、確実に鈴のシールドエネ
ルギーは削られていった。

「どうした、鈴。動きが鈍いぞ」

「うっさいわね……そんなこと、言われなくても分かってるわよー。」

思つたように動けない。そのことに対する苛立ちが募り、一夏の問い合わせに対し乱暴な口調で返してしまつ。

後悔の念を抱き、それを振り払うように青竜刀を振るう。バトンでも扱うかのように回転させ、一夏に突っ込んだ。だが、一夏はそれさえも避ける。青竜刀をやり過ごし、隙をついて逆に鈴の胸元に突つ込む。

あまりにも決定的な隙。やられる、そう思い、鈴の動きが鈍つた。それに対して一夏の取つた行動、彼の攻撃は……

「あだつー？」

「デコピングだつた。雪片式型を使わず、デコピングを鈴に叩き込む。しかもどういった原理かシールドバリアーを衝撃が抜け、直接鈴に痛みが走る。

絶対防御は攻撃が通つても操縦者の生命に別状ない場合は作動しない。デコピングで人が死ぬことはないだろうが、それでもかなり痛かつた。

「一夏！ あんたふざけてんのー？」

鈴は額を押さえ、涙目になりつつ一夏を睨む。

「まさか。大真面目だ。少なくとも鈴よりはな」

当の一夏はそんな視線をものともせず、平然と言い切つた。そして、そのまま言葉を続ける。

「まさか、中国の代表候補つてのはその程度なのか？」

「そ、そんなわけないじゃない！」

「だよな。なら本気を出せよ。じゃないと、あいつ落としきり

「ぜ」

「あんたはあ……」

プルプルと鈴の肩が震えていた。あまりにも軽い一夏の物言こと、理不尽ながらも怒りが爆発してしまった。

「なんでそんなに平然としてんのよー？ あたしがどんな気持ちなのかも知らずに……」の馬鹿一夏ー！」

「馬鹿はないだろ、馬鹿は。これでも結構頭を悩ませたんだぜ。ひょっとして、わざわざの約束が嫌だつたのか？」

「く……？」

激情に任せて怒鳴る鈴だったが、予想だにしなかつた一夏の切り返しに渾然としてしまう。

「さうか……そうだよな。あまりにも一方的だつたからな。嫌なら仕方がない。鈴、さつきのことは忘れてくれ」

「ちよ、まつ……別に嫌だなんて言つてないでしょー。」

「せうなのか？」「

「せうよ。こいぢやない、乗つてやるわよその話！ あたしが負け

たらあんたの彼女になつてやるわよ…… 絶対にあたしが勝つけどね！」

慌てて言葉を発した鈴は、もはや自分がなにを言つてゐるのかさえ理解できなかつた。カツとなり、感情の赴くままに叫んでしまつた。

「わうか。なら、こっちも本氣で行くからな

「当たり前じやない。こつちも、ここからは本氣で行くわよー。」

もはや後戻りは出来ない。鈴は自棄になつて、それでも先ほどとは打つて変わつた動きを披露する。おそらくは吹つ切れたのだろう。

「はああー！

青竜刀一閃。それを僅かに後退してかわす一夏。本当に僅かな距離。だが、距離が開いた。それは鈴の欲しかつた距離。この距離では鈴自身も巻き込まれるかもしぬないが、それでもこの好機を逃すつむりはない。

「ぐはつー！？

鈴のI-Sの肩のアーマーがスライドして開く。中心の球体が光つた瞬間、一夏は見えない衝撃に吹き飛ばされた。

鈴もその衝撃に巻き込まれるが、一夏と比べるとその被害は軽微。そして更に開いた距離。これでこちら側が被害を受けることはもうないだろ？

そして一夏は雪片式型以外の装備を有していない。この距離は鈴を有利にさせゐる。

「これからたつぱり、龍砲りゅうぱうをお見舞いしてあげるわよー。」

龍砲。それは一般的に衝撃砲と呼ばれる代物。空間自体に圧力をかけて砲身を生成し、余剰で生じる衝撃を砲弾化して撃ち出す。その上、龍砲は砲身も砲弾も目に見えないのが特徴だ。

セシリ亞のブルー・ティアーズと同様の第三世代型の兵器だ。それを鈴は連射する。

「つおつ、あぶねえ！？」

一夏は回避する。砲身も砲弾も見えないというのに、龍砲の連射を避けている。

そもそも、最初に当たったのが出会い頭であり、鈴が自身を巻き込んでまでも砲撃を撃つてくるとは思わなかつたからだ。来ると分かつていればそれなりの対応を取ることが出来る。

声こぞ慌てているように聞こえるが、一発目から一夏は余裕で回避していた。

「なんで避けられるのよー？」

「いや、確かに砲身と砲弾は見えないけど、射線はあくまで真つ直ぐだし。ハイパーセンサーが空間の歪みと大気の流れを探ってくれるから、あとはそれに合わせて避けるだけだ」

「なんてデータラメなのよあんたは！？」ハイパーセンサーがあるからって、それでも撃たれてから分かつてゐるようなもんでしょう？ なのに回避するなんてどんな反射神経よ！？」

「これくらじ出来ないと、俺は何度死んだことか……」

一夏は梁山泊での地獄の修行を思い出す。銃弾よりも恐ろしいじぐれの手裏剣。視認不可能なほどに速いアパチャイの拳。秋雨の怪しい発明。死にかけた時は馬の怪しげな漢方によつての復活。そして何より、ここ最近は世界最強の姉によつて特訓をさせられていたのだ。

この程度のことが出来るのは当然であり、出来なければその時点で一夏は死んでいたことだろ？。

「デタラメなのはあんたじゃなくて、あの人達なのね……」

「ははは……」

鈴の言葉に一夏は苦笑をもらす。その間も龍砲は放たれ続け、一夏はそれを回避していた。だが、このまま回避し続けても埒が明かない。一夏の武装は雪片式型のみ。他にも中国拳法と柔術を修めているが、接近しなければ話にならない。

一夏が勝利するためには、こちらから仕掛ける必要がある。

「いくぜ鈴！」

「なつ……」

そして、一夏が仕掛けた。鈴への特攻。それは愚策としか思えなかつた。真っ直ぐ突っ込むのはいい的であり、代表候補生の鈴がそんな好機を逃すはずがない。突っ込んでくる一夏に向け、龍砲を放つ。直撃。龍砲は確かに一夏に命中した。命中したのだが……

「捕まえた」

龍砲の直撃を受けつつ、一夏は鈴の元に接近した。シールドエネル

ギーが大幅に削られ、絶対防御が作動したがそれでも一夏は怯まない。鈴の手首をつかみ、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

「流石に直撃は結構痛かったけどな」

「訂正するわ……あんたも十分にデタラメよ」

鈴の表情が引き攣る。つかんだこの手は絶対に放さない。一夏はこのまま、柔術の技に移行しようとしたところで……

「！？」

轟音がアリーナ全体に響き渡った。隕石でも落してきただかのよつな轟音。落ちた場所はステージの中央。もくもくと煙が上がっており、その姿を確認することは出来ない。どうやらそれは、アリーナの遮断シールドを突き破つて入ってきたらしく。

「なんなんだ、一体……」

「一夏、試合は中止だ。すぐピラットに戻つて！」

いきなりなにを言ひ出すのか。そう思った瞬間に一夏の背筋に嫌なものが走った。ついで、HSのハイパー・センサーが緊急通告を行つてくる。

〈ステージ中央に熱源。所属不明のHSと断定。ロックされています〉

「なつ……」

乱入してきたものはISだつた。しかもアリーナの遮断シールドはISと同じもので作られている。それを貫通するだけの攻撃力を持つ機体が乱入し、こちらをロックしている。そんなものが直撃すればただではすまないだろ？つまり、ピンチだつた。

「一夏、早く！」

「鈴、お前はどうするんだよ！？」

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ！」

「アホか。そんなことできるわけないだろ！」

「アホってなによ、アホって！ あんたはまだISの素人でしょうが！」

「さつきまでお前は誰と戦つていた！？ その素人に追い詰められてたのはどこのどいつだ！？」

「う、それは……」

一夏と鈴は口論を始める。敵を前にして、それはあまりにも愚かなことだった。

乱入した機体は狙いを鈴に定める。一夏同様、彼女もロックされていたのだ。

「あぶねえっ……」

鈴の体を抱きかかえ、間一髪で回避する。先ほどのいた空間は、熱線で焼き払われていた。

「ビーム兵器かよ……セシリアのHより出力が上だ」

一夏はハイパーセンサーの簡易解析でその熱量を知る。それは前に訓練で見たセシリアのビーム兵器の出力を優に超えていた。

「ちょっと、ちょっと、馬鹿！ 離しなさいよー！」

「お、おー、暴れるな。……って、馬鹿！ 殴るなー！」

「う、うぬやこうぬやこうぬやこうー！」

一夏に抱きかかえられ、いわゆるお姫様抱っこをされている鈴は気恥ずかしさのあまり一夏の腕の中で暴れていた。

「だ、大体、どこ触つて……」

「あー、うん。鈴ってスレンダーだなー、ちゃんと女らしこ体つきしてるんだな」

「死ねえええ！」

「ぐふっ……って、あ、来るぞー！」

「ぐふー発鈴の拳を喰らいつつ、一夏は再び飛んできたビームを回避する。

今のビームによって煙が払われ、ISがふわりと浮き上がりてくる。

「なんなんだ、こいつ……」

姿からして異形だった。深い灰色をしたISはその手が異様に長く、爪先よりも下まで伸びている。しかも首がない。肩と頭が一体化しているような形状をしていた。

そして、何より特異なのが『全身装甲』ということだらう。

通常、ISは部分的にしか装甲を形成しない。それは何故か。必要ないからだ。

防御はほとんどがシールドエネルギーによって行われている。だから、見た目の装甲というのはあまり意味を成さない。もちろん防御特化型ISで物理シールドを搭載しているものもあり、一夏の師であるしぐれも強固な装甲を纏っているが、それにしたって肌が一ミリも露出していないISなんて聞いたことがない。

そしてその巨体も、普通のISではないことを物語っていた。腕を入れると優に一メートルを超えている。かなりの重量がありそうで、姿勢を維持するために全身にスラスター口が存在した。

頭部には剥き出しのセンサー・レンズが不規則に並び、腕には先ほど

のビーム砲口が左右に合計四つあった。

「お前、何者だよ」

「…………」

当然といえば当然だ。なぞの乱入者は一夏の呼びかけには答えない。

『織斑君！　凰さん！　今すぐアリーナから脱出してください！　すぐに先生達がISで制圧に行きます！』

その代わり、山田先生からの通信が割り込んでくる。普段の頼りな

わわわな声とは打って変わり、その言葉には威厳があった。

「えっと……山田先生。試合の方はどうなるんですかね？」

けど、一夏には納得がいかない。

『中止に決まっているじゃないですか！ 織斑君、凰さん、早く！』

「やうですか……」

鈴が試合は中止だと叫んでいたが、山田先生が正式に試合の中止を一夏に告げる。当然だらう、このよつな状況で試合を続行できるわけがない。

わかつっていた。わかつていたことだが……

「千冬姉……アレ、落としていいかな？」

とても納得できわづになかった。怒りがふつふつと沸いてくる。

『織斑君！？』

「一夏！？」

山田先生と鈴の驚きの声が同時に上がる。避難しきとのことだが、あのHSは遮断シールドを貫通する攻撃力を有している。つまり、今ここで誰かが相手をしなければ、観客席にいる生徒に被害が及ぶ可能性があるということだ。

だが、一夏は言った。時間稼ぎではなく落とすと。

『織斑先生だ。いい加減にしろ』

「はいはい、織斑先生。アレ、落としますよ」

『はいは一回だ。ふん、それにしても大口を叩く。いいだろ？、やつてみせや』

「ありがと、『それこまか』

千冬の許可をもらひ、一夏の表情に笑みが宿る。ニヤリとした不敵な笑みだ。

「一夏、いい加減に離しなさいよ！ 動けないじゃない！」

「ああ、悪い」

未だに鈴を抱えたままだつた。一夏が鈴を離すと、その瞬間に再びビームが飛んでくる。それを回避する。

「危なかつた」

『織斑先生！？ 織斑君もダメですよ！ 生徒さんにもしものことがあつたら……』

山田先生の心配をうな声が聞こえるが、それ以上聞く余裕はなかつた。敵のEDが体を傾けて突進してくる。それに対し、一夏も突進で応戦した。

はいはい。
靠撃。『いひげき』とも読む。

肩や背面部で突進する中国拳法の技。一夏はそれで、一メートルを

越える敵のI-Uを逆に弾き飛ばした。

「鈴、手は出すなよ。これは俺の獲物だ」

「一夏、無茶は……」

鈴が忠告するが、それは一夏には聞こえなかつた。目の前の戦闘に集中する。心を高ぶらせ、臨戦態勢をとる。

+++

「もしもしー？ 織斑君聞いてますー？ 凜さんもー、聞いてますーー？」

I-Uのプライベート・チャンネルは声を出さずとも相手に言葉を伝えることが出来る。だが、そのことを失念するくらいに山田先生は焦つていた。

「本人がやると書つてるんだ。やられてもいいだら？」

「お、織斑先生ー。わざから向のんきなことを書つてるんですかーー？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

千冬は平然を振る舞い、コーヒーにたっぷりと白い粉を入れる。だが、この白い粉は砂糖ではなかつた。

「……あの、先生。それ塩ですか?」

「…………」

白い粉の入っていた容器を確認し、千冬の手が止まる。そしてポツリと疑問をもらした。

「何故塩があるんだ」

「え、それ? でもあの、大きく『塩』って書いてありますけど」

「…………」

山田先生の言つとおり、塩の入っていた容器には確かに大きく『塩』と書かれていた。

「あつ! やつぱり弗さんのことが心配なんですねー? だからそんな//スを……」

「…………」

イヤな沈黙が訪れる。山田先生はまことに想い、話を逸らすと試みた。

「あ、あのですね? ……」

「山田先生。マークをどうぞ」

「へ？　あ、あの、それ塩が入ってるやつじや……」

「どうだ」

が、その試みは失敗してしまつ。千冬は先ほどの中身に差し出し、圧力をかけてくる。

「い、いただきます、……」

「ずずいと差し出されてくるコーヒー。塩がたっぷり入つていてそれを、山田先生は涙目で受け取つた。

「熱いので一気に飲むといい」

悪魔だ。千冬の言葉に、山田先生は本気で泣いてしまつくなる。

「千冬ちゃん、後輩をいじめるもんじやないね

「えつ……誰ですか？」

そんな山田先生をフォローする声がかけられる。だが、山田先生はその声に首を捻つた。

聞いたことのない声だ。しかも、女性の声ではなく男性の声のよう

に聞こえた。

さらに千冬のことをちやん付けで呼ぶのはどんな人物だつと山田先生が視線を巡らせる。いつの間にか帽子を被つた中年男性がいた。千冬の背後。そこでキリッと真面目な視線をモニターに向けているが、その手はじりじりと千冬の臀部に伸びている。とてもいやらしい手つきで、わきわきと指が動いていた。

中年男性の手がもう少しで千冬の臀部に触れ、揉みしだこうとした

とこりで千冬が振り返る。その手にはいつの間にか出席簿が握られており、それを中年男性に向けて思いつきり振り下ろした。

「久しぶりですね、馬さん」

「うん、久しぶりね。相変わらず元気そうね」

「あなたも相変わらずのようですね」

ビュンツ、と出席簿が空を切る。馬と呼ばれた中年男性はひょいひょいと千冬の出席簿をかわし、普通に会話を続けていた。

普段、教室などで振るわれる手加減された一撃ではなく、千冬本気の攻撃をかわし続ける馬。そのことがこの人物がただ者ではないということを証明している。千冬と親しそうに話していることから怪しい人物ではないだろうが、それでも山田先生は警戒して馬に問い合わせた。

「あなたは誰なんですか？ どうしてここへ。そもそも学園にはセキュリティーが……」

「落ち着け、山田君。この人を前にそんなものは何の役にも立たない」

「つて、ああっ！ おいらさんの帽子が……」

千冬が更に鋭く、出席簿を一閃させる。それを身を屈めることで回避する馬だったが、出席簿は馬の帽子を切り裂いた。

ホントにアレは出席簿なのかと目を見張る山田先生。簿は一夏の弁ではしゃもじで斬鉄をする人物がいるらしいので、千冬なら出席簿で帽子程度は切りそつたある意味納得していた。だが、この人物

が誰なのかは気になる。

「あの、織斑先生。この人は？」

山田先生と同等の疑問を千冬に向ける。千冬は「ホンと咳払いをし、馬を紹介する。

「この人の名は馬剣星。中国拳法の達人だ。そして、一夏の師でもある」

「どうもね」

帽子がなくなり、見事な禿頭を晒す馬。彼はニカツと笑い、手を振つて答えた。

BATTLE 1-2 決着!!

「で、なんで馬さんがここにいるんですか？」

「いつくんが試合だつて言つから見に来たね。弟子の成長は師としてやはり気になるものね」

「そうですか」

千冬の問いかけに馬は平然と答えるが、千冬にはそれだけとは思えなかつた。鋭い視線を馬に向ける。

「なら、そのカメラはなんですか？」

「えつ、これかね？」「これは……」いつくんの勇姿を撮ろうと思つてね

「そうですか。なら、写真を確認をしても構いませんね？　まさか、更衣室とかが写つたりしていませんよね？」

千冬の指摘に馬から冷や汗が流れる。試合は中止となつたものの。今日はクラス対抗戦が行われていたために更衣室では数多くの女子が着替えをしていた。それは馬にとつて格好の獲物だつた。最新式のカメラ片手にさわが激写をしていたことだらう。

「いやあ……千冬ちゃんは疑り深いね。そ、そんなわけないね……」

「なら、見せられないわけはありませんよね？　もし提出を拒むと

「のなら、そのカメラを破壊します」

千冬の言葉を最後まで聞かず、馬は駆け出した。カメラを守るようにしてこの場からの離脱を試みる。

せっかく撮ったお宝だ。それを失いたくはないのだろう。馬は逃げる。だが、それを千冬は許さない。

「ビームに行くんですか？」

馬の正面に回りこみ、退路を塞いだ。その手には凶器（出席簿）が握られている。

「後生ね、千冬ちゃん」

「そういうわけにもいかないんですよ。私はビームの教員ですから」

馬からカメラを取り上げ、それを破壊する。カメラを破壊されたことにより、馬はがっくりと膝を突いた。その光景を見て、セシリアは冷ややかな視線を馬に向かえた。

「剣星さんは相変わらずのよつですわね」

「久しぶりね、セシリアちゃん。そもそも、おじちゃんからエロを取つたら何が残るね？」

「ただ、駄目人間だという事実が残りますわ」

「トホホね……」

セシリアの言ひように肩を落とす馬。もっとも問題は馬にあるわけで、言い返すことすら出来ない。

梁山泊関係者には女性の敵と見られ、冷ややかな視線を向けられていた。

「織斑先生！ 暢気に談笑をしている場合じゃありませんよー 早くなんとかしないと……」

「せつかも言つたが、落ち着け。教師が取り乱してどうする？」

一夏と鈴の心配をし、あわあわと気が氣でない様子の山田先生。彼女を落ち着けようとする千冬だったが、その千冬自身もどうか落ち着きがなく、そわそわしていた。

「先生！ わたくしにHIS使用許可をー すぐに出撃できますわー！」

「そうしたいところだが……これを見ろ」

セシリ亞の申し出に対し、千冬はブック型端末を操作してある情報を見せる。それは数値化された情報で、この第一アリーナのステータスチェックだった。

「遮断シールドがレベル4に設定……？ しかも、扉が全てロックされて……あのHISの仕業ですのー？」

「そのようだ。これでは避難することも、救助に向かうことも出来ないな」

ハッキングをかけられ、現在一夏と鈴は孤立していた。遮断シールドにさえぎられて助けに行くことが出来ない。

また、アリーナの観客席にいる生徒達も扉がロックされているため避難できず、閉じ込められている状況だ。これでは避難すること

が出来ず、被害が及ばないようにするにはロックが解除されるために誰かが時間を稼ぐ必要があった。その点に関しては、一夏の選択は正しいだろ？。

だが、千冬は苛立ちと困惑を隠せず、ブック型端末の画面を指で何度も叩いていた。

「で、でしたら…緊急事態として政府に助勢を…」

「やつている。現在も三年の精銳がシステムクラッシュを実行中だ。遮断シールドを解除出来れば、すぐに部隊を突入させる」

言葉を続けながら、ますます募る苛立ちに千冬の眉がぴくりと動く。これ以上は危険だと判断し、セシリアは頭を押されてベンチに座つた。

「はああ……結局、待つてこる」としか出来ないのですね……」

「なに、どうせしてもお前は突入隊に入れないから安心しや」

「な、なんですって…？」

千冬が何気なことのこつこの言葉に、セシリアは過敏に反応した。

「お前のHISの装備は一対多向きだ。多対一ではむしろ邪魔になる」

「そんなことはありませんわ！」のわたくしが邪魔だなどと……

「では連携訓練はしたか？　その時のお前の役割は？　ビットをどうこう風に使う？　味方の構成は？　敵はどのレベルを想定してある？　連続稼働時間……」

千冬の意見を否定しようとする。だが、更に続けられた言葉には流石のセシリ亞もぐぐの音しか出なかつた。

「わ、わかりました！ もう結構ですー。」

「ふん。わかればいい」

放つておいたら一時間は続きそうな千冬の指導を、セシリ亞は両手を挙げて止める。降参のポーズだ。げんなりし、深いため息を吐いた。

「はあ……言い返せない自分が悔しいですわ……」

「元気を出しね、セシリ亞ちゃん。千冬ちゃんはいつくんが心配で言葉がきつくなつてるだけね。まつたく、少しほは弟離れをすべきね」

「馬さん」

セシリ亞にフォローを入れる馬だったが、千冬にじりじりと睨まれて肩をすくめる。

「それにいつくんは仮にもおいちやん達の弟子ね。あの程度の相手に不覚を取らないように鍛えてあるし、ひとつ技を授けているね。そもそも、^{いい}IS学園に入学してから千冬ちゃんがいつくんの修行を見てるから、実力は把握しているはずね」

「…………」

今度はキリッと馬の表情が引き締まる。真剣な目付きでモーターを

眺め、一夏と敵ISの戦闘を見ていた。

先ほどのやり取りが嘘のような真剣味に千冬も押し黙り、モニターに視線を向ける。そこでは敵ISを圧倒する一夏の姿があった。

+++

「つおらあああああつ！」

デタラメに長い腕を取り、力任せにぶん投げる。敵ISは全身のスラスターを用いて空中で体勢を立て直した。

このスラスターは出力が尋常ではなかった。そのためにあの巨体だというのに高い機動力を持っている。でかく、速く、一撃必殺の攻撃手段を持つ厄介な相手。だというのに一夏は一步も退かなかつた。

「ふつ！」

攻める。攻めて攻めて攻めまくる。八卦掌における型のひとつ、托^{たく}槍掌^{そうじょう}。

顔を守るように片方の手を配置し、もう片方の手を仰向けにして相手の喉元へ突き出すような構え。

この構えは逆の構えに変えることで攻撃と防御を同時にこなすお得意な技だ。更に、流れるような連続技を得意とする。

喉を搔くように擦り、続いて金的、後ろに回りこんでの後頭部に手刀、脇腹に肘を入れる。戦場が地上ならば最後に膝の裏を蹴つて体制を崩し、そのまま決めるのだがここは空中。IS戦においてそのような手は使えない。一通りの技を叩き込んだ一夏は離脱し、敵ISの様子を見た。

「まったく効いてねえ……八卦掌つて流れる攻撃な分、一発の威力は弱いけど、それでも急所に食らってノーダメージとかありえないだろ」

IIS操縦者は女性だから金的は効かないだろ？が、それでも喉、後頭部、脇腹と急所に連続で攻撃を入れたのだ。絶対防御が発動していたとしても、人である以上少なからず怯むものである。だといふのに敵IISは、まったく怯む様子を見せなかつた。

（もしかして……）

そのことから一夏は、ひとつ仮説を導き出す。他にも違和感を感じていた。動き、そして攻撃した時の手？？たえ。そのひとつひとつが一夏に疑問を生じさせる。

あのIISはもしかしたら……

「……なあ、鈴。あいつの動きって何かに似てないか？」

「え……え、何かって何よ？ まさかママとか言ひこんじやないでしょ？？」

敵IISを圧倒する一夏の姿に啞然とし、固まつていた鈴だが急に話を振られて我に戻る。

一夏の問いかけに、鈴自身が感じていたことを素直に言つた。

「それは見たまんまだろ？が

敵IISの攻撃方法は、あのデタラメに長い腕をぶんぶんと振り回して接近してくる、まるでコマのような動きだった。その高速回転の最中にビームまで撃つてくるのだから厄介だ。

それでも一夏はビームを避け、高速回転する腕を取つてぶん投げた。決して対処できぬ動きではない。だが、その動きを見れば見るほど疑問が湧き上がつてくる。

「あー、なんていうかな、昔自動車メーカーが作った人型ロボットいたろ?」

確か、アシなんとかという名前だった。

「いたつけ? あたしはどうちかつていうとロボット兵を思い浮かべるんだけど」

「あー、ジーリいいよな、面白いよな。ラピタは名作だ。今度DVDレンタルしていくから一緒に視よ!」

「いいわね……って、今はそんなこと言つてる場合じゃないでしょ!」

「まあ、[冗談はさておき、なんつーか、あれ……機械じみてないか?]

「HSは機械よ」

「そう言つんじゃなくてだな。えーと……あれって本当に人が乗つてんのか?」

「は? 人が乗らなきや HSは動かな……」

鈴は一夏の言葉を否定しようとする。だが、何か思うところがあるのか、その言葉を止めた。

「……そりいえばアレ、さつきからあたし達が会話してる時ってあんまり攻撃してこないわね。まるで興味があるみたいに聞いてるような……」

思い返すように鈴が今までの戦闘を振り返る。その顔はいつになく真剣だ。

そして、鈴の言葉を証明するように、現状、敵のIJSは攻撃を仕掛けでこない。本当に会話に興味があり、聞いているような反応だった。

「ううん、でも無人機なんてありえない。IJSは人が乗らないと絶対に動かない。そういうものだもの」

鈴の言つていることは本当だ。教科書に書いてあり、一夏もそれを読んだ覚えがある。だが、どこかの誰かが言った。教科書に書いてあることが全てではないと。もし、現在の技術力で無人機が可能だとしたら？ そのことを極秘としていたら、一般的に知られることはまずないだろう。

「仮に、仮にだ。無人機だつたらどうだ？」

「やけに無人機に拘るわね……何か策があるの？」

「ああ。人が乗っていないなら容赦なく全力で攻撃しても大丈夫だしな」

人が乗っていないというのなら手加減する必要はない。雪片式型には奥の手があり、また馬や秋雨にもいざという時のための技を習っている。

八卦掌の連續攻撃が効かないというのなら、一撃必殺の技を叩き込めるばいいだけだ。

「いいわ、そんなこと絶対にありえないけど、アレが無人機だと仮定するわよ。それで、手伝いは？」

「要らない。言つただろう、アレは俺の獲物だ」

「そう、わかつたわ。そこまで言つんだから、失敗したら駅前のクレープを奢らせるわよ」

「了解。あ、それと鈴」

「何よ？」

「俺、これが終わったら店を開こうと思つんだ」

「フラグが建つたー？」

唐突な一夏の発言に、鈴の鋭い突っ込みが入る。

「ちよ、一夏ー。今の会話のどこにそんな要素が……そもそもなんのお店なのよー？」

「じゃ、こつてぐる

「ひつとおおおつーーーー。」

追求をひりつと受け流し、一夏は飛び出す。それを狙い撃ち、敵工Sからハイゲームが飛んできた。回避。急加速。

瞬間加速と呼ばれる技能だ。後部スラスターの翼部分からエネルギーを放出、それを内部に取り込み、圧縮して再び放出する。その際に得られる慣性エネルギーを利用して爆発的に加速する。弱点として直線的な動きしか出来なくなるが、使いどころさえ間違えなければ大きな武器となる。雪片と瞬間加速。この二つで千冬は世界一に輝いたのだから。

一瞬で敵ISとの距離を詰め、一夏は投げの動作に入る。秋雨に教わった一撃で相手を戦闘不能にする技。

「もんきゃくじんはかいじく
悶虐陣破壊地獄！！」

次の瞬間、敵ISは頭部から地面上に叩きつけられた。

投げ、当て身、関節技の三つを同時に仕掛けるのがこの技の特徴だ。ISには絶対防御があるとはいえ、所詮は人型の兵器だ。関節技はとても有効だと言える。その証拠に敵ISの左手と右足の間接部分は完全に破壊されていた。

「この技のいいところは、ここまでやつても受け手が死ないといふことだよな」

「うわー……」

鈴の表情が引き攣る。一夏の発言にしてもそうだが、あまりにも容赦のない投げ技に思わず敵ISを心配してしまってほどだった。だが、敵ISは立ち上がる。手足の関節が破壊されているというのに平然と、まるで痛覚を感じていないかのように体勢を立て直す。その様子には一夏の言つとおり機械じみたものを感じた。

「やっぱり、人が乗つてないみたいだな。なら、このまま一気に叩く

敵 I.S. が完全に体勢を直す前に、再度接近した一夏が次の技の動作に入る。掌を一旦敵 I.S. に当て、一瞬引き、そしてもう一度押し付けるように当てる。その瞬間敵 I.S. が吹き飛んだ。

「**浸透水鏡掌**」

馬の絶招であり、表面を破壊する打撃と、内部を破壊する打撃を同時に発する。これを前に I.S. のシールドバリアーなんてものは何の役にも立たない。衝撃が突き抜け、今度は容易に立て直せないほどに敵 I.S. の体勢が崩れる。

「終わりだ」

雪片式型を開。日本刀の形状だつたそれが変形し、エネルギー状の刃が出現した。それを上段に振り上げる。

零落白夜発動。バリアー無効化攻撃が雪片の特殊能力であり、相手のバリアー残量に関係なくそれを切り裂いて、本体に直接ダメージを与えることが出来る。大幅にシールドエネルギーをそぐことが出来るため、雪片は全 I.S. の中でもトップクラスの攻撃力を誇つている。

ただ、この技、雪片の特殊能力である零落白夜を発動させるためには自身のシールドエネルギーを消費する必要があるため、まさに諸刃の剣と言えた。だが、千冬はこれを使って世界一に輝いたのだ。そして一夏は彼女の弟であり、弟子もある。使えない道理などない。そんなものがあれば、それを叩き切つてでも前に突き進む。

「せえええええいっ！！」

一刀両断。敵 I.S. の胴体を横一閃に切り裂く。上半身と下半身がず

れ、支えを失った上半身は地にのめり込むよつに落ちた。

「完全勝利！ どうだ、鈴。フラグなんて叩き折つてやつたぜ」

「もつ一度言つわ……やつぱつあんたはテタラメよ」

勝利の余韻に浸る一夏。それをどこか冷めた表情で見詰め、呆れた
ように言つ鈴。

なんにせよこれで一件落着、一安心だと一夏の気は緩んでいた。

『「この馬鹿者が！ まだ終わってないぞ！』

プライベート・チャンネルから千冬の怒鳴り声が飛んでくる。それ
と同時に、白式が警告音を発した。

『敵IISの再起動を確認！ 警告！ ロックされています！』

下半身を失つて尚も、上半身だけで這いするよつに敵IISは動いて
いた。無事な左腕で狙いをつけ、^{バースト・モード}最大出力形態でビームを放とうと
していた。

（やばつ……）

避けよつとするが今更間に合わない。だが、だからといってこのま
まやられるつもつはあらざらない。

思考を巡らせるよつも先に体が反応し、投擲の動作を取る。投げる
のは雪片式型。

雪片式型は敵IISの頭部を貫き、今度こそ完全に活動を止めた。け
ど、活動が止まつかる前に放たれたビームはもうどつするこども出
来ない。それが一夏に迫る。

視界が真っ白な光で染まり、そこで一夏の意識は闇へと落ちていった。

+++

「ふふあつー？」

闇へと落ちた一夏の意識。それは口内に入ってきた異物によつて強制的に目覚めさせられてしまった。

「死人すら目覚める、超高価な秘伝薬ね」

「凄い効果ですね」

馬と千冬の声が聞こえる。だが、一夏はそれを冷静に聞くことが出来なかつた。

辛い、苦い、痛い。舌に走る激痛。怪しげな薬を飲まされたことに

より悶え苦しみ、じたばたとベットの上を転がり回る。

「あいたつー？」

「お前は何をしている?」

ベットの上で暴れていたために一夏はベットから落ち、足元に転がる一夏を見下ろして千冬は呆れたように言つた。

「いたた……」「は?」

「保健室だ」

床から千冬達を見上げ、一夏は問う。その問いに短く簡潔に、千冬が答えた。

「何があったか覚えているか?」

「確か敵の攻撃を受けた……ああ、俺はそのまま氣を失ったのか」

「そうだ。正面から敵のゲームを受けたんだぞ。その上、お前はIRSの絶対防衛をカットしていたな? よく死ななかつたものだ」

（あれ? 絶対防衛つてカットできないシステム根茎じやなかつたつけ?）

そう思う一夏だったが、自分の記憶違いかと自己完結する。何せ、一夏にはIRSの知識が圧倒的に不足していた。だから勘違いだと思いい、じのことに関してはこれ以上深く触れなかつた。

「油断大敵ね。やつたと思つた時が一番氣を引き締めなければならない時ね。いつくんはそのところがまだまだ未熟ね」

「まったくです。これは普段の修行をもう少し厳しくする必要がありますね」

「うえつ……」

自身の失態を指摘され、修行が増えるといつ葉に一夏は嫌そうな顔をする。現状でもかなりきついのにこれ以上増えたら死ないかとしやれにならないことを思いつつ、今更ながらに思つたことを口

「出しだ。

「馬さん…… なんで馬さんがここいるんですか？」

「それは、いつくさんの成長を見るために……」

「馬さんのこつもの悪い癖だ。既にカメラは破壊した」

「ああ、なるほど」

馬にかぶせてこつ馬の言葉で、一夏は納得した。それと共に軽蔑したような視線を馬に向ける。

「うなみに千冬姉、携帯は確認した？ 最近の携帯は高性能だから、ねらいも馬さん……」

「これ、こつくん…」

指摘されて慌てるあたり、どうやら図星らしい。

「それなら心配する必要はない」

「ちよ、千冬ちゃん… それ、おちちゃんのけいた…」

「確認するまでもなく、破壊する」

「ああ…」

千冬の手こなこつの中にか馬の携帯が握られてしまつた。そのまま握力によつて握りつぶされてしまつた。

ガラクタへと成り下がる携帯。それを見て、馬が悲痛な叫びを上げる。

「まあ、なんにせよ無事でよかつた。家族に死なれては寝覚めが悪

そんな馬をスルーし、千冬は柔らかな表情を一夏に向ける。とても優しげな、実の弟である一夏にしか見せない顔だった。

「千冬姊」

「うん?
なんだ?」

「いや、その……心配かけて、『じめん』

千冬は一夏の言葉にきよとんとした後、小さく笑つた。

「心配などしていない。お前はそう簡単には死ない。なにせ、私の弟だからな」

変な信頼の置かれ方だと一夏は思う。けれど、これは千冬の照れ隠しの一種なので気にはならなかつた。むしろ信頼してくれることが嬉しく、一夏も釣られて小さく笑つた。

「千冬姊」

「今度はなんだ？」

「俺も、白もいいけど千冬姉には黒が似合つて思つただけど」

「は？」

一夏の言葉に、千冬の目が点になる。

現在、一夏は未だに床に倒れていた。そこから千冬を見上げるようになってる。そう、千冬の足元から千冬を見上げているわけであり、スカートの中身がバツチリと見えていた。

黒のパンストから透けて見える実の姉の純白の下着は、なんともいえない口を醸し出していた。

「つー?」

「へふつー?」

千冬は真っ赤な表情で一夏の顔を踏みつける。一夏は珍妙な呻きを上げて再び意識を手放した。

千冬は荒い息を吐き、キツ、と馬を睨みつける。

「馬やん! あなたの所為で一夏が悪影響を受けているんですが!?

?

「いい傾向ね。ヒッチなのは生命力の証。あつといつくんはどんな状況でも生き残るね」

「そんな証は要りません!」

激情のままに怒鳴る千冬。心の底から馬を軽蔑し、どうしようもない怒りを向けていた。

当の一夏は未だに床の上で、とても満たされた表情で気絶していた。

「一夏……」

人の気配を感じた。一夏はいつの間にかベッドで寝ていた。既にここには千尋と馬がいないので、そのどちらかが一夏をベッドに戻したのだらう。そのことに感謝しつつ、一夏は目を開ける。

「鈴」

「つー?」

一夏の田先には鈴の顔があった。しかも鼻先二センチの距離だ。

「……何じてんの、お前」

「おひ、おひ、おひ、起きてたのー?」

「気配を感じてな。それと鈴の声が聞こえたから。で、どうした? 何をそんなに焦つてるんだ?」

「あ、焦つてなんかないわよー。勝手なこと言わないでよ、馬鹿ー?」

「馬鹿はないだろ、馬鹿は。そもそも馬鹿馬鹿言こ過ぎやだ。口癖か

?」

「あんたが馬鹿なんだから仕方ないでしょー?」

真っ赤な表情で一夏と争いながら、鈴はベット脇の椅子に腰掛けた。そんな鈴の顔を見て、一夏はあることを思い出した。

「あ、そういうえば試合は中止なんだよな？」

「あんなことがあったんだし、当然じゃない

「再試合とかないのか？」

「今のところ決まってないみたいよ」

「マジかよ……」

正直、試合のことなどびっくりでもよかつた。クラスの女子は学食でデーターの半年フリー・パスが手に入らなくて残念だろうと肩を落とすだろうが、一夏にはそれよりも重要な問題があった。

「なら、試合前の約束はどうなるんだ？　そのまま続けてたら、絶対俺が勝つてたよな？」

「や、そんなわけないじゃない！　私は仮にも代表候補生よ！　まだ奥の手を隠し持つてたんだからね！」

一夏が勝てば、毎日一夏に弁当を作るという約束。つまりは鈴が一夏の彼女になるということだ。

そして、そのまま試合を続けていたら勝つたのは自分だと述べる一夏に、鈴は更に顔を赤くして否定した。

「まあ、俺は試合の勝敗はどうでもいいんだけどな。それにしても

腹減った……そういうと、鈴は、じつに戻ってきたつてことはまたお店やるのか？ 鈴の親父さんの料理、うまいもんな。また食べたいぜ

「あ……その、お店は……しないんだ」

「え？ なんで？」

一夏の言葉に急に鈴の表情が暗くなる。

「あたしの両親、離婚しちゃったから……」

その言葉が一瞬、一夏には信じられなかつた。なにせ、あんなに仲の良さそうな夫婦だつたのだから。

けれど、鈴が冗談や嘘を言つて居るのではないといつては霧園氣で分かる。

「あたしが国に帰ることになつたのも、その所為なんだよね……」

「わかったのか……」

今にして思えば、あのころの鈴は酷く不安定だつた。何かを隠すようになると振舞つことが多い、一夏にはそれが妙に気になつていて。けれど、当時の一夏は鈴の力になることが出来なかつた。過去に戻ることが出来れば、自分で自分を殴りたい衝動に駆られる。

「一応、母さんの方の親権なのよ。ほら、今つてビリでも女の方が立場が上だし、待遇もいいしね。だから……」

ぱっと明るく振舞おうとした鈴だが、その声がまたすぐに沈む。

「父さんとは一年会つてないの。たぶん、元気だとは思ひけど」

一夏には、鈴にどんな声をかければいいのか分からなかつた。鈴の両親が離婚したという事実は、一夏の心中に少なからずの影を落とす。

家族がバラバラになる。それは絶対にいいことじやない。だが、そうせざるを得ない状況になつたのだろう。

気前のいい、鈴の父親のことを思い出す。鈴にそつくりで、活動的な母親を思い出す。

ビーツしてだらう。ビーツして、あの夫婦が離婚してしまつたのだろう。そのことについては間違つても鈴に聞けることではない。何せ、一番辛いのは鈴自身なのだから。

「家族つて、難しいよね」

鈴の言葉に、一夏は実感が湧かなかつた。千冬だけが一夏にとつて、血のつながつた家族。両親の顔は知らず、梁山泊の者達を本当の家族のように思つてゐるが、そんな難しさなど今まで感じたことがない。

それでも、今の鈴を放つておくことは一夏には出来なかつた。

「鈴」

「ん、なに？」

鈴が無理に明るく振舞おつとして、苦しげな笑みを浮かべる。それ以上は見てられず、一夏はベットから起き上がりて鈴を抱きしめた。

「へ、ええつ！？ ちよ、一夏！？」

鈴の顔は見えないが、おそれくまたも真っ赤に染まっているのだろう。荒い息遣いが聞こえる。

一夏は鈴の耳元で囁くように小さく、けれどハッキリと言つた。

「俺が鈴を幸せにするから」

鈴が中国に帰る時、意味すら分からずに戸惑つたあの言葉とは違う。今度はちゃんと意味を理解し、真っ直ぐ鈴に向けて続ける。

「その、や……まだ高校生だから将来のことについては未定だけど、それでも俺は鈴のことを大事にするから。何か困っていることがあれば力になるから。だから……」

「いや、か……」

熱い。照れ臭さで焼き切れてしまいそうなほど熱を感じる。心臓が早鐘の如く脈を打ち、一夏の息も荒くなつていた。

「試合の決着は付かなかつたけど、俺の彼女になつてくれないか?」

「一夏」

鈴の声は震えていた。とてもか細く、縋るように一夏に問いかけてくる。

「あたしなんかで……いいの?」

「鈴だからこそいいんだ。俺は鈴のことが好きだ」

「あたしも……あたしも一夏のことが前からずっと好きだった」

「うん……」めんな、今まで氣づいてやれなくて」

「……あれ？ 一夏、約束の意味つて理解してたんじゃないの？」

「やばい……」めん、あれ嘘。本当に馬鹿なんに相談するまでぜんぜん気づかなかつた」

「なによそれ……」

「本当にじめん」

「わっいいわよ……結局、一夏があたしの気持ちに応えてくれたか

「ひ

カミングアウトされた事実に呆れつつ、鈴は小さく笑っていた。一夏は鈴を抱きしめる力を緩め、正面から顔を見詰める。彼女となつた幼馴染を見て、意地が悪そつに笑つていた。

「それはやうと鈴。やつぱりこのつて男の方からするべきだと思つんだよ」

「へ？」

呆ける鈴に反応する間を切れない。一夏はそう言つて、即座に行動した。顔を近づけ、そのまま唇を奪つ。鈴の瞳が大きく見開かれていた。思わずじたばたと暴れるが、一夏によつて抱きしめられていたためにつまく動けない。それでも鈴は抵抗しようとすら。

「こてつ」

「あ、『』めん……じゃなくて…」

鈴のチャームポイントともいえる八重歯が一夏の唇に引っかかり、口元から血が滲み出していた。それでも一夏は満たされたような表情をして、ニヤニヤと笑みを浮かべてこる。

「い、一夏… あんた、さつきは起きて…」

「ああ、起きてたぞ。狸寝入りだ。だから鈴が何をしようとしていたのかバツチリ見てた」

「う……うの、馬鹿馬鹿馬鹿…」

「実を言つと俺、かなりエロいんだよね。鈴みたいな可愛い彼女が出来たし、色々とやってみたいことがあるんだ」

「ひやうつ… い、一夏、どこの触つてんのよ…?」

「ん、お尻」

「変態変態変態…」

いつの間にか一夏の手は鈴の臀部に伸びており、存分に揉みしだいていた。鈴も一夏を罵倒こそしているが、大した抵抗をしない辺りは悪い気はしないのだろう。

一夏は笑う。鈴は恥ずかしがる。甘く、桃色な雰囲気。そんな中、この雰囲気を完膚なきまでに破壊する乱入者が現れた。

「な、なんだー!?

「え、なに? どうしたのー!?

耳を劈く破碎音。その音は保健室のドアの方から聞こえてきた。一
夏と鈴はドアへと視線を向けるが、そこには既にドアなんてものは
存在しなかった。完全に破壊され、破片となつて辺りに飛び散つて
いる。

そして、ドアの代わりに鎮座する阿修羅のよつた存在。阿修羅は鈴
にギンと鋭い視線を向け、底冷えしそうな声で鈴に宣言した。

「よひしー、なうば戦争だ。凰鈴音ー!」

阿修羅の正体は千冬。最強無敵の一夏の姉だった。

「魔王ノブナガ!?

「そういうネタはやめると何度も……まあ、それはいい。今は関係
ない。一夏、私は言ったな? お前の嫁になる者は私を倒すことが
条件だと」

「だから、それ無理ゲー過ぎるだろ千冬姉! そもそも嫁じやなく
て彼女だから。俺高校生だし、その話はまだ早い!」

「そんな屁理屈が通ると思つか?」

「屁理屈じゃないからー。事実だからー!ー」

「つむさーー お前は私のだ。凰、貴様が欲しいといつのなら奪い
取つてみろー!」

「何たる暴君……」

一夏と千冬の言い争いを、鈴はただ呆然として聞いていた。いきなりすぎる乱入者。その正体が千冬であり、ブラコン全開の発言をしたことが信じられないのだろう。普段の千冬を知るものなら誰もが唖然、騒然とする光景だった。

「ちひ、鈴！ 逃げろ！…」

「えつ！？」

だから次の瞬間、何が起きたかも理解することが出来なかつた。中国の代表候補生である鈴が、状況を理解することが出来ない。それほど攻防が一瞬の内に行われていた。

「！」は俺が食い止める！ だから、少しでも遠くに……」

「ええい、一夏！ 何故私の邪魔をする！？ 私はただ、あいつを始末しようつと……」

「姉の凶行を止めるのが弟の役目だ！ 千冬姉、正気に戻つてくれ！」

「私は正気だ！」

「そんなわけあるかつ！？ 俺の知る千冬姉はこんなことをしない！」

振るわれる凶器（出席簿）。それを避け、受け流し、払う一夏。常

識を超えた、超人レベルの戦闘。その光景に呆気に取られ、鈴は固まっていた。

「お前が私に勝てると思つのか…？」

「達人級に勝てると思ひはじ思ひに上がつむやこないさ。だから……」

いつまでたつても逃げ出さない鈴に脾れを切らし、一夏は鈴の元に駆け出す。そもそも達人級の千冬とやりあつこと自体が無謀なのだ。ならばすることはひとつだけ。

「あ……」

「戦略的撤退イイ！」

鈴を抱き上げ、一田散に逃げ出す。戦つことが無謀なら逃走すればいいのだ。如何に千冬が達人級の実力者とはいえ、ここはE.S学園で、千冬は教師であり、専用機を有していない。いくらなんでも、空を飛ぶ存在を追うこととは出来ない。

「来い、白式！」

一夏は窓から飛び出し、白式を展開して空へと逃げ出した。未だに状況を理解し切れていない鈴は、現実味を帯びない声でポツリとつぶやく。

「なんだつたのよ、一体……」

「悪夢……かな？」

姉の豹変に一夏も戸惑いを隠せず、力のない言葉を吐く。なにやら千冬は、一夏に彼女が出来たことによつて覚醒したようだつた。

今、I.S学園に騒動の種が生まれた。

BATTLE 12 決着… (後書き)

『おまけ』

「ちーちゃん、おつまたせーー。」

「束か……よく來たな」

「せりや愛しのちーちゃんのせつかくの呼び出しだもん。地球の裏側からでも駆けつけるよ~」

「わうか……」

夜、どこかのおでんの屋台。そこで千冬は酒を飲み、久しく友人と再会していた。その友人の名は篠ノ之束。千冬の教え子である篠の実の姉であり、天才（天災）と称される科学者。

「ちーちゃんがご飯を奢ってくれるつてのも珍しいしね。あ、おじちゃん、私はんぺんね」

「あいよー」

束は屋台の親父に注文を述べ、出されたはんぺんをはむはむと食べ始める。

「今日呼び出した訳なんだが……実はお前に頼みがあつてな
よ

「実は……専用機を一機、用意して欲しい」

そんな中、何気なく言われた千冬の注文。その言葉に束の瞳が怪しく光り、興味深そうに千冬を見詰めた。

「へえ……一度は引退したちーちゃんが専用機を欲しがるなんてどんな心境の変化なのかな?」

「実はな……一夏に彼女が出来た」

「へ?」

あまりにも唐突過ぎる話題の変換。普通ならそれがどうしたって話になるだろうが、その言葉に束は鋭く食いつく。

「えつ、こつくんに彼女が? エ、それってお相手はまさか篠ちやん?」

「違つ……中国の代表候補生、凰鈴音だ」

「へ……凰鈴音つて言つんだ。へ……その名前、束さんの抹殺リストもとい、興味対象上位にランクインだよ」

「殺すなよ」

「あつはつは、わかつてゐよ、ちーちゃん。で、つまりはその凰鈴音つて子に対抗するために専用機が欲しいんだね?」

「話が早くて助かる。まあ、実際凰ならビリでもなるのだが、一

夏が問題だ。あいつは凰のことを気に入っているからな。その上、かなりの実力を付けてきた

「流石いっくん。もつとも、あそこにいたのなら当然なのかな？それはそつとしーちゃんは元気でやつてる？」

「しぐれさんか？」この間会つたが、あの人は相変わらずだった

「へへ、そなんだ」

楽しそうに騒ぐ千冬と束。一夏のサード幼馴染、鈴は何気に大ピンチを迎えていた。

『俺が鈴を幸せにするから』

画面から聞こえたその音声に、一夏の頭の中は真っ白になつた。

『その、さ……まだ高校生だから将来のことについては未定だけど、それでも俺は鈴のことを大事にするから。何か困っていることがあれば力になるから。だから……』

『いち、か……』

画面に映る一夏と鈴は抱き合つており、背後では逆鬼が冷やかすよう口笛を吹く。その音が一夏の耳を打ち、無性に腹が立つた。

『試合の決着は付かなかつたけど、俺の彼女になつてくれないか?』

『一夏』

『いや――、よく撮れたね』

元凶、馬にはもはや殺意すら抱いていた。帽子で目元が隠れていているが、顔がにやけているのは十分に分かる。

『あたしなんかで……いいの?』

『鈴だからこそいいんだ。俺は鈴のことが好きだ』

『あたしも……あたしも一夏のことが前からずっと好きだった』

『うん……』めん、今まで氣づいてやれなくて』

『……あれ？ 一夏、約束の意味つて理解してたんじゃないの？』

『やばつ……ごめん、あれ嘘。本当は馬さんと相談するまでぜんぜん気づかなかつた』

『なによそれ……』

『本当に元気めん』

『もついいわよ……結局、一夏があたしの気持ちに応えてくれたか』

『ひ

「ちよ、ちこまでつ！ ストップ！…」

暫し呆然としていた一夏だが、ふと我に返つてテレビの電源を切る。映像が消え去り、画面が黒く染まつた。

「なにをするね。ここからがいいとこだとこうのに

「黙れ盗撮魔！ 人のプライバシーをなんだと思ってるんですか！？』

一夏の絶叫が梁山泊内に響き渡る。

もう五月も終わつた。IS学園での生活も落ち着きを見せ、一夏は久しぶりに梁山泊へと顔を出す。そこでは馬が撮影した映像の上映会が行われていた。

「迂闊だった。まさかカメラや携帯の他にもビデオカメラを隠し持つていたなんて……」

「こっくんに千冬ちゃんもまだまだ甘いね。ビデオカメラの件にしてもそうだけど、おいちちゃんが撮影していたことにまったく気づかなかつたのだから」

「達人が完全に気配を消してて、俺が気づかるわけないじゃないですか。それに千冬姉はなんか冷静じゃなかつたし……」

「あれにはおいちちゃんも驚いたね。それほどこっくんに彼女が出来たことが衝撃的だったのだろ?」

「あんな千冬姉は初めて見ました。ってか馬さん! あの現場にいたら撮影なんかよりも千冬姉を止めてくださいよ……!」

「自分で蒔いた種は自分で刈り取るべきね」

「一体、俺がなにをしたって言つんですか?」

「どうやらこっくんに彼女は出来ても、根本的な部分が変わつていなこよ?」

千冬の暴走を思い出し、馬に文句を言つ一夏。けれど馬はため息を吐いて肩をすくめ、呆れたよつて言つ返す。

「気になる言い方ですね……そういうば、じぐれさんとアパチャイを見ませんね。それに秋雨さんも」

一夏もため息を吐き、それと同時に疑問を吐き出す。他にも梁山泊

の主である長老、隼人も姿を見せないが、彼はふらつと放浪の旅をする癖があるために機にしない。隼人の心配などするだけ無駄だった。

「アパチャイは鳩の餌やりに行つたね。しぐれさんは『いつものね』

「ああ、『いつもの』ですか」

しぐれもしぐれで、長老のように唐突に姿を見せなくなることがあつた。とはいえ、一、二、三日もすれば平然と帰つてくるから梁山泊の者は何も気にしていない。一夏も同様で、納得と頷いた。

「一夏さん、お茶ですわ

「ありがとう、美羽。でも困つたな。しぐれさんに稽古をつけてもうおつと困つたのに」

にこにこと微笑みながら、美羽が一夏にお茶の入つた湯飲みを差し出す。一夏はそれを一礼して受け取つた。

「それで、秋雨さんは？」

「秋雨さんなら兼一さんと一緒に走り込みに行つてますわ。ですので、もう少ししたら帰つてくるかと」

「兼一？」

聞き覚えのない名だ。首を傾げる一夏に対し、美羽はとても楽しそうに説明をしてくれた。

「そういえば、一夏さんはまだ紹介していませんでしたわね。実は、最近うちに入门した方なんです。私のクラスメイトで、一夏さんや弾さんの手を借りずに入めて出来たお友達でもあるんです」

「なんだ。おめでとう、美羽。で、その友達が入門したって？」
梁山泊に？

「は」

美羽は楽しそうで、とても嬉しそうだった。それは一夏からしても大変嬉しいことだが、それよりも非常に気になる単語が聞こえた気がした。

「美羽……お前は友達を死地に追いやるつもりなのか？」

「そ、そんなつもりはまったく。ただ、兼一さんにも事情があります、うちに入りたる見えない状況に陥ったといいますか……」

「どんな状況だよ、それ。それにしても秋雨さんと走り込みか無事に帰つてくるといいな」

「そんな心配をしなくともちゃんと帰つてきますわよ。ただの走り込みなんですから怪我をするなんてありえませんわ」

「まあ、ただの走り込みかどうかはさておき、それもそうか」

案じるのは、兼一という美羽の友人の身。梁山泊の豪傑の中では比較的常識を持つ秋雨だが、彼の扱いが尋常ではないことを一夏は知っている。

走り込みで負傷を負うことはないだろうが、それでも未だ会わぬ兼一という人物を心配せずにはいられなかつた。

「ただいま」

「あ、お帰りなさい、秋雨さん」

「おや、一夏君。来ていたんだね」

「そんな」とを考えていると、当の秋雨が帰つてきた。といふことは兼一と言う人物も帰つてきたはずであり、一夏はキヨロキヨロと辺りを見渡す。

「秋雨さん。兼一って人はどこなんですか？」

「ああ、美羽にでも聞いたのかな？ 兼一君なら今は、中庭で基礎トレーニングをしているよ」

「走り込みの後に基礎トレーニングですか？ 相変わらずみつちりやりますね」

「何事も基礎が大事だからねえ」

一夏も秋雨達の手により、基礎をしっかりと叩き込まれていた。それはまさに鬼のような扱いだった。それを思い出し、背筋がぶるりと震える。

だから、一夏が兼一のことを気にするのは当然だった。

「中庭ですね。さて、どんな基礎トレーニングを……」

中庭に足を進める。先からは少年の悲鳴のよつたな叫びが聞こえてきた。

「うがあああああああああああああつ――」

おそらくは彼が兼一なのだろう。黒髪と黒い瞳、如何にも日本人といつた風貌をした少年。左目の目元にある絆創膏が特徴的だつた。彼は半裸で中腰となり、足をロープなどで縛られていた。膝の上にはご飯が盛られた茶碗が載つており、頭の上には沸騰したお湯の入つたお椀が置かれている。お椀には『忍耐』とかかれていた。

更には『努力』、『根性』と書かれた大きな壺。それを指の力だけでつかみ、握力を強化させるのだろう。壺の中には水も入つていてるためにかなり重い。股の下には『精神力』と書かれた線香立てが置かれており、火の点いた線香が差されているので腰を下げるることは許されない。

腕にはバンドが巻かれており、そのバンドには棘が付いていた。腕が下がると脇に刺さるという仕掛けで、常に腕を上げていなければならぬ。

中腰で腕を広げ、指の力だけで壺を持ち上げる。下手に動けば火傷を負うというこの状況。それを見て、一夏はポツリとつぶやく。

「なんだ、思つたより軽めの基礎トレーニングだな。うん、兼一つて奴もがんばつてるし、邪魔しちゃ悪いな」

梁山泊の想像を絶する扱きにより、一夏の感覚は完全に麻痺していた。梁山泊の修行がとんでもないことに変わりはないが、あの程度なら準備運動にも入らないという認識だ。

「指が、指がちぎれるううう――」

「美羽に組み手の相手でもしてもいいつかな？」美羽～」

せっかく梁山泊に戻ったのだから、自らも鍛えようと美羽に声をかける。

一夏は兼一に背を向け、中庭から去った。

+++

「そりいえば美羽、転校したんだってな。せっかく名門の松竹林^{しょくちくりん}高校に受かつたってのに」

「『存知でしたか。まあ、隠せる』ことでもありますわよね」

道義に袖を通し、一夏と美羽は対峙する。千冬以外の者とは久しぶりにやる組み手だ。

「そのとおり。馬さんに聞いたよ。しかも、いじめられてたんだって？」

「べ、別にそんな」とは……ただ、わたくしが目立ちすぎた所為で
……

蹴りを主体とした美羽と、手数を重視した一夏の攻防。
かわし、受け、流す。その際に一瞬だけ、美羽に隙が出来たことを
一夏は見逃さなかった。

「隙あり」

「あ、ずるいですわ！」

ぴたりと、美羽の顔の数センチ前で一夏の拳が止まる。会話の最中に隙を突かれたことで、美羽は不満そうに頬を膨らませた。

「油断する方が悪い。そつか……いじめか。なんで俺に相談してくれなかつたんだ？」

「穏便に済ませたかつたといいますか……一夏さんに相談したら相手のところに殴り込みに行きそうでしたから。あの時もアバチャイさんを宥めるのが大変だったんですよ」

なんだかんだで一夏は手が早い。小学校の時、クラスに溶け込むことが苦手だった筈をいじめていた男子と殴り合いの喧嘩をし、転校してきたばかりでいじめの標的となつた鈴を庇うために大立ち回りを演じたりしていた。

「それは否定しない。でも、まあ……それは別にしても美羽は友達を作るのが苦手だったからなあ」

「うう、そなんですよ。だから兼一さんがお友達になつた時は本当に嬉しかつたんです」

新たな組み手を始める。その際に会話も継続し、一夏と美羽は拳と蹴りによる攻防を始めた。

「確かに美羽は弾や鈴、響に祐馬も俺の経由で知り合つたからなあ。セシリ亞は旅行の時に成り行きで。だから、自分の力で作った友達は初めてなわけか」

「はいー。」

嬉しそうに美羽が笑う。またも出来た隙を突き、一夏は足払いを仕掛けた。

「おつと」

それを美羽は、跳んでかわす。

「お、かわしたか」

「同じ手は喰らいませんわ」

着地し、今度は美羽が鋭い蹴りを上段に放ってきた。

「なんだかんだで今を楽しくやつてるならいいけど、転校するならIS学園って選択肢はなかつたのか？ 美羽の成績なら転入試験も楽勝だろ」

「大変魅力的な話ですが、IS学園の転入には試験結果だけではなく、国の推薦がなければ入れませんわよ」

「そこは千冬姉のコネを使ってだな。それに美羽はISの適正って、確かAだつただろ？ 僕より才能あるんじやないか？」

女性しか動かせない兵器、ISだが、それには才能や素質なども関係する。ISとの適正を調べ、それをランクとして表すのだ。政府はIS操縦者を募集する一環で、希望者はタダでその適正試験を受けられる。

Aランクは代表候補生クラス。美羽の他にセシリ亞や鈴もこのラン

クだ。

ちなみに簞はしで、一夏はBランク。もつともこれは、訓練機で出した最初の格付けなのであまり意味はない。

「[冗談せじておき]、一夏さん、鈴かやんとはどうんな感じなんですか？」

「別に[冗談じやないんだけ]なあ。知り合ひが少ないし、美羽が転入してくれたらいろいろと助かるんだけ」

互いに小さく笑い合ひ。その際に一夏の腕と美羽の腕が交錯し、互いに弾けたように腕を引いた。

「美羽も腕を上げたな」

「一夏さん」。それで、鈴かやんとはどうなんですか？」

「そんなに気になるのか？」

「は」

美羽の笑顔が一段と輝く。やはり美羽も年頃の少女なのか、恋愛ごとに人一倍の興味を持つていた。

もつともそれは他人の色恋沙汰についてであり、自身の色恋に関してはかなり鈍い。なにせ、弾が好意を抱いていて露骨なアピールを繰り返したところに、それに気づかないほどなのだ。

前にそのことを遠回しに指摘したが、一夏だけには言われたくはないと返されてしまった。

「その、なんていうか……鈴って可愛いよな」

「元から鈴ちゃんは可憐ですわよ。一夏さんは果報者ですわよ」

「それはまあ……確かに」

「鈴ちゃんもきっと、幸せでしょう。けど、やうなると今度はセシリ亞ちゃんが可憐もうですね」

「なんでセシリ亞の名前が出るんだ?」

「……一夏ちゃんって、彼女が出来ても根本的な部分は変わりませんわね」

「せつや、馬さんにも言われたよ、それ

美羽が呆れたように息を吐いた。またも隙が出来たので、今度は手刀を放つ。美羽は再び跳んでかわした。けれど、それだけでは終わらない。羽のように宙を舞い、空中から針のように鋭い蹴り技を放つ。

一夏は自ら地面に倒れ、転がりながら回避した。

「今のは危なかつた」

そして、すぐさま立ち上がる。

「惜しかつたですわ」

「本当に腕が上がったな、美羽。もつひとつ」の組み手を続けたいけど、午後からは鈴とデートだからそれなり終わらせないと」

「ま、そなんですか？ デートですか、よろしいですわね～」

その会話を最後に、互いににやけていた表情が引き締まる。この組み手の決着がつこうとしていた。

「だ、誰だよあの人……」

一夏と美羽の最後の打ち込みが行われる少し前、道場のふすまを少しだけ開け、中の様子を伺う少年の姿があつた。彼は先ほどまで基礎トレーニングをしていた人物、兼一。

道場の方から物音が聞こえ、基礎トレーニングが終わつたので様子を見に来て見れば、そこでは美羽が見覚えのない少年と組み手をしていた。

美形だと兼一は思つ。非の打ち所がない、理想的なイケメン。兼一の妹であるほのかならジャニーズ系と褒め称えることだろう。しかも美羽となにやら会話を交わしており、内容は聞こえないがとても楽しそうだつた。その光景が兼一を存分に焦らせる。

「うが～！ 誰なんだよあれ！？ まさか彼氏？ そ、そんなわけ……うわあ～んつ……」

兼一は美羽のことが好きだ。一田惚れであり、彼女のあり方に一瞬で心奪われてしまつた。

強く、心優しく、真つ直ぐな美羽。そんな彼女に惹かれ、いつか守つてあげられるくらいに強くなりたいという目標を持つ。だから兼一は強くなろうと決意し、梁山泊の激しい修行にも耐え抜いているのだ。もっとも強くならなければ自分の身が危ないということから、

修行をやめるにやめられない状況なのだが。

それでも兼一が梁山泊に居続けているのは、美羽の存在が大きいだろ、^り。

「なんだよあれ、なんなんだよあれ！ 反則だよ。かつこいいし、美羽さんと互角にやり合えるほど強いし。誰なの？ あの人誰なのおおーー！」

「織斑一夏。少し前にコースで大々的に取り上げられたから、兼ちゃんも名前は知っているはずね」

「うわー、びっくりしたーー！」

取り乱す兼一に、背後から掛けられる声。その声の主は馬であり、いつの間にか後ろに回っていた馬の存在に兼一は肩をびくりと震わせる。

「え……織斑一夏？ あ、それって世界で唯一ISを動かした男つて有名なあの人！？」

「そうね。織斑一夏こといつくん。彼は元々、この梁山泊に住み込みで修行をしていたね。今は全寮制のIS学園に通っているから、兼ちゃんが会うのは初めてね。ちなみにIS学園は女の子ばかりでとても良いところね……羨ましい

「はあ……」

今の時代、ISを知らない者はいない。流石に専門的な知識は持ち合わせていない兼一だが、それでも織斑一夏という名前は知っている。

そして少しだけ思つ。一夏のことが羨ましい。なんだかんだで兼一も男だった。

「まあ、安心するといいね。美羽といつくんは互いのことを家族として認識しているし、なによりいつくんは彼女持ち。美羽はフリーだから希望はあるね」

「そりなんですかー? よかつたあ……あの人気が美羽さんの彼氏だつたらどうしようかと思つましたよ」

「やうだつたら万が一にも兼ちゃんに勝ち田はないね」

「うう……」

ぐさりと兼一の胸に言葉の刃が突き刺さつた。ルックスだけでも既にかなりの大差がついている。

「なに、男は顔じゃないね。とはいへ、兼ちゃんがいつくんに勝つているものがあるかどうか……武術の才能にしたつて、兼ちゃんの遙か上を行くからね」

「ぐふう……」

さらに追撃の刃が突き刺さる。兼一はその場に跪き、プルプルと震えながら無力感に叩きのめされていた。

「それはそうと基礎が終わつたのなら修行ね。少しでも強くなるために、おいちやんが手解きしてあげるね」

「うう……」

泣きそつた兼一を引き連れ、馬の修行が始まる。その少し後に一夏と美羽の組み手の決着がついた、一夏の勝利で幕を閉じた。

+++

「やあ、俺は織斑一夏だ。一夏って呼んでくれ

「あ、どうせ。僕は白浜兼一」

「やうか。なあ、軍曹って呼んでいいか？」

「どうしてそつなるのー？」

「こや、その声を聞くとどうもな……もしも王様とか」

「あだ名を付けるのは構わないけど、そんな変なのはやめてよ。つか、どうから出来たの、その単語

「まあ、[冗談な]おも、兼一と呼ばせてもらひてこいか？」

「別にいいけど……それじゃ、僕は一夏さんだ」

「同じ年だし、同性だからなん付けはやめてくれ。なんかむず痒い。呼び捨てでいいよ」

「えつと……じゃあ、一夏君？」

「君付けかあ……まあ、別にいいか。よろしくな、兼一」

「うん、一夏君」

改めて一夏は兼一と対面する。まずは血口紹介。互いに名を名乗り、呼び名を決めた。

「それにしても、まさか梁山泊に入門するとはな。勇氣があるとうか、無謀といつか……」

「うう……僕もまさか、ここまで無茶苦茶な道場とは思わなかつたよ」

「兼一はなにを習つてるんだ？ 僕は剣術と柔術と中国拳法」

「あ、僕は空手と柔術、中国拳法にムエタイを」

「ムエタイ！ ムエタイつてアパチャイにか！ ？ ちよ、それはまずい。死ぬぞ！ ！」

「ほ、僕だつて……僕だつて本当はやつたくなかった。けど、生き残るために仕方ないんだ」

「事情はわかんないけど、アパチャイに師事する方が遙かにアシジヤラスで死ねるぞ。悪いことは言わない、やめておけ」

「う、うう……」

二人は初対面だが、どこか通じるものがあったのだろう。互いの気苦労を吐露し、極めて良好な関係を築こうとしていた。

「アパ、来てたのかよ一夏。今戻ったよ」

そんな中、話題のムエタイ使い、アパチャイの帰宅。彼は一コ一コと人の良さそうな笑みを浮かべていた。

「ゆつくり話をしたいけど、その前に兼一の修行があるので遊ぼうよ」

「いや、俺は昼から用事があるのでそろそろ失礼しようかと……」

「アパ……それは残念よ」

「すいません」

残念そうな顔を浮かべるアパチャイに罪悪感を抱きながら、一夏はそろそろお暇しようと準備を始める。

「兼一、修行がんばれよ。ひとつだけアドバイス……死ぬな」

「はい……」

兼一の肩にポンと手を置き、一夏は自分の荷物をまとめ始めた。

「一夏さん、鈴ちゃんこよひじくですわ」

「分かった。美羽も元気でな」

「はい」

荷物をまとめ終え、美羽と一言一言言葉を交える。そしてちらりと、アパチャイと兼一が向かった中庭へ視線を向けた。
そこでは一人が向かい合い、これからミット打ちを始めるようだつた。

「け、兼一……死ぬな」

「うふふ、大丈夫ですわよ」

「ホントか？ 本当にそつなのか！？ アパチャイって手加減を知らないんだぞ。比喩じゃなく、言葉そのものを！」

一夏の体がぶるぶると震える。前に一度だけアパチャイにムエタイを教わるつとした時、アパチャイの手によって死にかけたためだ。あの時の出来事は今でも鮮明に思い出せる。それほどまでに一夏の記憶に深く刻み込まれ、トラウマと化していた。

「見ていれば分かりますわ」

美羽の言葉に促され、一夏は少しだけ修行風景を見ていくことにした。

アパチャイがミットを構え、兼一がそれに拳打や蹴りを放つしていく。

「レウ！ レウ！」

レウとはタイ語で『速く』という意味。アパチャイの指示に従い、兼一は更に速く、鋭くミットに打撃を叩き込んだ。

「ヤ」で避けるよ……」

その合間を縫い、アパチャイがミット越しにパンチを放つ。右腕が消失したかと思うような超高速のパンチ。それが兼一の顔面に直撃し、一夏は思わず渋い表情をした。アパチャイの本気の一撃を受けて、無事でいられるはずがない。

「はー……相変わらず凄いパンチだ。速すぎて見えなかつたや」

だが、兼一は無事だつた。アパチャイの一撃を受けて生きてる。今度は驚きの表情を浮かべ、一夏は美羽に向き直つた。

「どうですか？ アパチャイさん、手加減を覚えられたんですよ」

「凄いな……本当に驚いたよ」

「これで兼一さんや一夏さんにムエタイを教えられるつて、本当に喜んでましたわ」

裏ムエタイ界の死神と呼ばれるアパチャイ。達人級の中でも上位の実力を持つ彼だが、未だに弟子を持つたことがなかつた。武術を修めた者にとって弟子は誇りであり、己の技術を後世に伝えるための大切な存在。そんな存在にアパチャイもあこがれており、いつか弟子を持つことを夢見ていた。だから、本当に嬉しいのだろう。ムエタイを人に教えることが出来るようになり、初めての弟子が出来たことが。

「はい、また避けるよー」

一夏は微笑ましそうにアパチャイを見る。アパチャイは優しく、とても良い人物だ。一夏が小学生の時はよく遊んでもらつた。梁山泊の者達を家族正在思つてゐる一夏だが、アパチャイの場合はそ

れに加えて歳の離れた親友という言い方がしつくらくる。だから、そんなアパチャイの嬉しそうな顔を見ていると、まるで自分のことのように嬉しく感じられた。

「へふつー？」

その表情が引き攣る。

「…………」

美羽は言葉を失った。

「…………おーーー」

アパチャイは間の抜けたような表情で、冷や汗をたらりと流した。今、アパチャイが放ったのは蹴り。テツ・ラーン（ローキック）だ。足元から掬い上げるように蹴り飛ばされ、兼一は宙で何回も回転し、頭から地面に落ちる。そして、ぴくりとも動かなかつた。

アパチャイは確かに手加減を覚えた。けれど、足加減はまだまだだつた。

「一瞬だけ、これならムエタイを教わつてもいいかなと思つたけど……やつぱりやめとー」「ひー

「キヤーーー 兼一やーん！ー！」

梁山泊は今日も騒がしい。

BATTLE 13 梁山泊（後書き）

あとがき

二巻編を始める予定でしたが、その前に外伝、梁山泊編を。兼一の登場です。

それにもかかって、季節感というか時期が分かりにくいくらいですね。一巻開始が入学から一ヶ月くらいなので五月。それから空手部と揉めて梁山泊に入門し、主将を倒して、個人的には今時期は武田戦前だと思っています。

既に手加減を覚えたアパチャイ。けど、足加減がまだまだでした。兼一の苦難もまだまだこれからです。

次回は五反田食堂編を書きたいなと思います、一巻開始ですね。
夏が既に鈴とくつついてるんで蘭渢田……
さて、次回は五反田食堂編といつことでこんな短編をじうざ。

その名は我流W

「クソツタレがあ！！」

五反田弾。彼は足元にあつた「ゴミ」箱を蹴飛ばす。「ゴミ」箱は壁に当たる、ゴミを散らしながら転がつていった。

「落ち着け、弾」

「これが落ち着いていられるか！」

「そうですよトール。これは即ちしき事態です」

トール」と祐馬が荒れる弾を落ち着かせよといする。が、弾はその程度では落ち着かず、ジークこと響も同調するよう、帽子を深く被り直して頷いた。

「スネイクの奴らふざけやがつて！ 蘭を攫つただあ！？ 上等だ！ 一人残らず地獄に送つてやる！..」

「おい、どこに行く！？」

「決まつてゐだろー！ スネイクのアジトに乗り込むんだよ！..」

スネイクとは弾の所属するチーム、ラグナレクと敵対関係にあるチームだ。

要するに不良集団であり、スネイクの連中はラグナレクの幹部であ

る弾をおびき出すため、妹の五反田蘭を人質として誘拐したのだ。それに怒り狂つた弾は鼻息を荒くし、今にも殴りこみを仕掛けそうな雰囲気だった。

「だから落ち着け。一人で行つても返り討ちにあうだけだ」

「ならどうしろってんだ！？ 蘭を見捨てろってか！…」

弾は祐馬の胸倉をつかみ、腹の底から怒鳴りを上げた。

蘭は弾にとつて大切な妹だ。そんな選択肢など存在するわけがない。祐馬もそのことはちゃんとわかつており、手を振り払つてから弾を宥める。

「一人で行けば返り討ち。だが、一人ならどうだ？ 三人なら？」

「それって……」

「ええ、私達も妹君を助けに行きます」

かけられる力強い言葉。友が困つてているといふのなら、その友のために動く。熱い、男と男の友情。

「一夏殿にも先ほど連絡を入れました。すぐに向かうとのことです。ここは戦力を整え、確実に救出しましょう」

「響……」

「こんな時だからこそ冷静にならんでどうする？ 大丈夫、蘭はワシらが絶対に助け出す」

「祐馬……」

弾の目頭が熱くなつた。彼らは友のためならば命を懸けるだりつ、そんな奴らだ。そんな奴らだからこそ、弾は共につるんでいる。

「すまない、ありがと」

「まだ、お礼を言つ必要はありませんよ」

「さうだ、それは無事に蘭を助け出してくれだ」

結束を固め、いざ、蘭の元に向かおうとする三人。だが、その三人に待つたをかける存在がいた。

「待て」

「オーディーン……」

ラグナレクの将、第一拳豪のオーディーンこと朝宮龍斗。あさみや りゅうと彼の登場に弾は生睡を飲み込み、重々しい口調で問う。

「なんですか？ いくらあなたの言葉でも、俺達は止まりませんよ」

「そうじゃない。別に止める気はないよ。ただ、スネイクの奴らには誰に喧嘩を売ったのかちゃんとわかる必要がある」

龍斗から弾への返答は、とても予想外なものだつた。

「ラグナレクに直接の関係がない君の妹を攫つたんだ。その報いを受けさせるため、スネイクの連中は今日潰す。僕も行くよ」

「オーディーン」

ラグナレクトップの参戦。その事実に、弾は驚愕する。

「オーディーン……蘭はやりませんからね」

「君はなにを言つている?」

弾の言葉を聞き流し、龍斗は眼鏡を掛け直した。

「待てよ、オーディーン。最近退屈なんだ。そんな面白やつなことに俺を連れて行かない気か?」

「私も行こう。欄とはそれなりに面識もあるしね、放つてはおけない」

そして、更なる戦力の加入。第一拳豪バーサーカー。第三拳豪フレイヤ。この二人を加え、彼ら六人はスネイク殲滅へ向かう。ラグナレクの敵対チーム、スネイクの運命は風前の灯だった。

+++

「うわああああつー

「な、なんだよあれー!?

「化け物だ……

風前の灯……いや、それどころかスネイクは今にも鎮火してしまい
そうな勢いだつた。

ラグナレクの敵対勢力なだけあり、百を超える人数で結成されてい
るスネイク。だが、その集団がたつた一人の手によつて壊滅しよう
としていた。

「我流」ホワイトオオオオ「W」

謎の少年、その名は我流ホワイトW。学ランに身を通し、宇宙刑事のような
面をした十代半ばほどの人物がスネイクを相手に大暴れしていた。

「彼は何者なんだ……？」

現場に駆けつけ、呆気に取られるオーディーン。

「弾、あれつて……」

「ふむ、非常に酷似したメロディーを感じますね」

「なにやつてんだ、一夏の奴……」

我流Wの正体に感づく三名。面で顔を隠しているが、間違いない。
彼は弾、祐馬、響共通の友人である織斑一夏その人だつた。

「ホワイトオオオオオ！」

「へふつ！？」

「どふつ！？」

「ゴミのよつに」一掃されるスネイクの連中。その光景を見て、フレイヤは引き攣った表情を浮かべていた。

「本当に人間なのか？」

「面白そうな奴だな」

バーサーカーは我流Wに興味を持ったようで、くつくつと小さく、不敵な笑みを浮かべていた。

「流石に数が多いな……なら、無敵超人直伝、108秘儀が一つ」

そういうて、一夏はある構えを取つた。世界的有名で、王道なバトル漫画に出てくる構え。それを見て、祐馬はポツリとつぶやく。

「そういえば子供のころ、かめはめ波を出せないかとよく真似たものだ」

かめはめ波。男なら一度はあこがれる必殺技。けれど、それを実際に出来る人などいない。そんなことが出来れば、それは既に人ではない。人を、人類をやめているといつても過言ではない。

「梁！－！」

それでも我流Wは、

「山！－！」

織斑一夏は、

「波！……」

やつてのけた。人を、人類をやめた。
掌から波を出し、人をまとめて吹き飛ばす。何人も地に倒れたが、
それ以上に戦意を削げたのが大きい。

「波が出たぞ、波が！！」

「逃げる！ あんな怪物に勝てるわけがねえ！…」

「わああああああああ！」

蜘蛛の巣を散らすように逃げていくスネイクの構成員。我流Wは敵
が一人もいなくなつたことを確認すると、呆けている弾達の下へ歩
み寄つてきた。

「やあ、君が五反田弾だね。安心するといい。君の妹、蘭ちゃんは
既に我流^{ヒンク}Pが保護した」

「ああ、ありがとうな……それはそうと一夏、お前何をやつてるん
だよ？」

「つ？ ち、違う！ 僕は織斑一夏ではない。我流Wだ！…」

「いや、嘘はいいから。お前つて嘘が下手だな。それに俺は一夏と
しか言つてないぞ。なのになんで織斑つて苗字を知つてるんだ？」

「や、それは……」

面をしていろが、それでも我流Wが動搖しているのがよくわかった。最初つ殻まつたく隠せていないが、それでも一夏は隠し通せると踏んでいたのだらう。はつきり言つて馬鹿である。

「おつとー、我流^{ブラック}Bからの通信だ。今すぐ向かわないとーー、世界の平和を守る我流Wとして、この場は失礼する！」

「あ、逃げた……」

腕にはめていたおもちゃの通信機見て、我流Wはそうつぶやく。そして脱兎の^ごとく、その場から離脱した。

その背中を弾は果然と見送る。

「なんだつたんだ、一体……」

なんにせよ、悪は滅びた。蘭は無事に戻り、更に一夏に好意を寄せる原因になつたことをここに明記しておく。

そして一夏と弾が激しく激突したとかしなかつたとか……

あとがき2

正義の味方、我流Wでした。

ちなみにこのおまけの時期は一夏の中学時代。鈴が転校して、セシリアがイギリスに帰った数カ月後くらいですかね？

秋雨達に師事してる時点で我流じやないですが、おまけですので。ちなみに我流Bは千冬ですw

梁山波を使う一夏。正直やりすぎかと思いましたが、反省はしていません。しょせんはおまけですしね。

さて、上にも明記してますが次回は一巻、五反田食堂編。弾は書いて結構楽しいキャラですw
次回も更新がんばります。

それはそつと熱すぎる原作史上最強の弟子。最近のサンデーで美羽が……

美羽の身も心配ですが、それはそつと相変わらずあの漫画つてエロいですよねw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6723v/>

IS 史上最強の弟子イチカ

2011年10月9日08時13分発行